

淺岡山の合戦は四月九日の事にそ有りけるか豊州陣營したりし兒湯の川下とは其間百町許を阻て炮聲の響山彦に應へ手にとる如くに喧く聞えける左なくとも程近き敵味方の城を攻るを争てか知らて有るへきや然るを救はさりけるは親安宗榮元來不快の故にそありけり夫れ國を憂へ家を忘れ軀を棄て難を濟ふ忠臣の志なりとこそ聞けるに己れか宿意のあるに任せて成すへき公務を急とせず空く祿を費して時光を送と歎息ウツクけれ一盲衆盲を引く習ひ親安此の如くなるへくとも自餘の四將勢も七八千に及ひぬれば遲滯すへきにあらざるに是も親安を今度の大将屋形の名代と有るなれば萬事を親安次第に任て各々進むに及はさりけり淺岡の城堅固に持にしこそ幸ひ其上豊州勢後詰せは薩州勢必定大敗なるへきを思慮なき程こそ淺ましけれ島津勢は杉浦に陣を取て城をも攻す兒湯にも蒐らす大友方は淺岡に加勢をも入れす杉浦にも向はす徒に數日を送りて居たりける同十七日大友義統より日州在陣の諸將に使者を以て今度其表の儀に付態と利光を遣し行の趣申し合する處に其儀を用ゐす各城を出兒湯に於て對陣し其上淺岡の如き小城に敵大勢押寄しを後詰をたにせず一つは兵略の不_レ足處一つは臆病の至り諸人の嘲哂武門の瑕瑾是非に及はぬ事ともなりとを申し遣はされける茲に因り親安己下議定しけるは義統公の忿激陳謝するに路なし偏に面々後れたり何様一戦を遂け一面目に不備は豊州への聞へ然るへからすとて同廿五日志賀朽網佐伯田北木付五頭其勢都合一萬餘兒湯の川上中の郷杉浦と云處に押寄せ島津新納と對陣す島津方は待合戦大友方は蒐てする戦なれば島津備を堅くして鉄炮稠く打掛る豊州勢一面に突てか、れ

は荒手を入替く矢炮を飛せて攻戦ふ程に豊州勢蒐る度ことに追立られく一備へも破り得す本の陣所兒湯の川下に引返す斯りし後ち淺岡も小勢にて始終支へかたしとて宗榮足達諸共に臼杵の郡に引入にける其後島津圖書の助大隅より援兵を招きよせ其年の十月まで兒湯に在陣したりしかは日向國中に於て大友方奈何ともすることを得す那珂宮崎諸方皆島津の手にと屬しける

紹忍調議肥後事

去年の春の比より肥後の國大に亂て所々の合戦幾回と云數を知らずありける中にも甲斐宗運は無二の大友方なりければ豊州へ飛脚を馳て急き御勢を差越し給へ若し此時を失は、薩州より阿蘇をも陥れ豊州へも打入なん宗運衰老致し候と云へとも諸軍を領しつかさとりなは再び御旗下に屬せんこと案の内と覺え候只居ながら敗亡を見んことも口惜く存候なりと頻に出勢を乞ければ先つ調て見るへしとて田原紹忍へ命せらる紹忍肥後の國垣原と云處に到りて諸城主何れも已前の如く志を通し幕下に屬せらるへしとて三月より扱ひ初て六月に至るまでに蘇秦張儀か辨を振ひしかども郡主給人一人も來り従はず剩へ國士十餘人起り合ひ紹忍を討へきなんとの沙汰ありければ田原は是に怖をなして豊後の國へと馳歸りぬ其比豊府に於て如何なる者か仕たりけん一首の狂歌を書て立にける

武士の俵あつかひ似合ねは耻かき原を逃て甲斐なし

龍造寺討筑後并大島船軍之事

斯て諸城主大友を背きしかは龍造寺山城守隆信肥後筑後の兩國に度々出張して大友方と相戦ひける去るに依て筑後の國田尻鑑種蒲池鑑廣三池鎮實等より豊州に使を以て曰く隆信か勢數回出張し防戦頻繁なるに依て今は我々人數も薄く兵糧も乏く候へは籠城叶ひかたう候急き援兵を給りて救給へ左なきに於ては下城をするより外は無之候なりと告たりける大友家老の面々相寄て議定しけるは近年諸國擾亂に依て幕下の諸士所々の領地に取離れ衰窮貧乏して侍をも扶持し得ず馬をも持ぬ輩多かりければ國家次第に減少して今慥に當手の國とては豊後の外筑前の國端を添て漸く一國半計なり殊に戰國の砌なりければ諸所の城番境目の押へに人數多く費ぬ當年に至て日州も敵に屬し肥後の國も餘されたり筑前の立花道雪高橋紹運のみ領内堅固に取鎮め敵を能く縮と云へとも龍造寺秋月筑紫の大敵を三方に受て數度合戦しけるに一度も加勢を遣はされず此の方より豊前表に人數を出せは道雪紹雲は境目迄も出張す彼の兩人にさへ御手を及はされざるに筑後士は一族紋葉にもあらず當時幕下と云はかりなり加勢あるへき所にさへ向させられず勢を何くに遣はすへきと云ふ中にも志賀道輝か曰幕下を見繼るゝ事は一族紋葉よりも專一にすへきこと探題職の前なれども當時諸方の押へとして御勢太半減少す若筑後に勢を遣はさるへくは一萬の内にては叶ふへからず隆信自身出る程ならば二萬五千は有るへし然るを僅か五千三千の勢を遣し愁の事仕出し耻辱を失んより唯棄置んに如はなしと申せしかは各此儀に同して使を空しく歸しけり是に依て筑後衆大友には棄られつ隆信には攻立られ難儀はこゝに極まりぬ斯る折節薩州勢

肥後の國水勝に出る由其聞へ有りければ去らは島津を頼んとて三將島津に使を以て幕下に屬し援兵を給るへしと乞ければ肥後國天草郡志岐民部允天草伊豆守木山彈正忠三人去年より島津に従ひしを薩州^{ゴノキ}鶴島の住人甌相馬允に相添へ筑後の國へ加勢として大船小船十餘艘に兵糧を積み肥後國三角の背渡まで出船せしむ龍造寺隆信は豊州勢筑後に出は一戦を遂へしと兼て用意し居たりける大友筑後下の五郡を棄られしかは其儀に及はす今は定て我が方にを従ひなると思ひ居たりける處に案に相違し遠き島津を頼むの由扱は忽せにすへき處にらす急に攻亡すへしとて天正八年九月上旬自ら筑後へ發向し住吉と云所に陣を取り軍勢の手分して諸所へ差遣す先西久留米の城には隆信一萬餘にて自ら發し十重二十重に取卷半時はかりに攻破り男女四五百人を殺戮し直に高良山に押寄る座主良寛法印叶はしと思ひけん三井郡日光院先規の領知計りを乞うけ久留米表を悉く相渡し降人に成てそ出にける山下の城には神代熊代高木馬場を大將として三千餘の勢を授て差向ける此の勢山下の城より西半里計を縮て陣屋を打ち後れし勢を待揃へんか爲四五日逗留しける程に後陣ことく來り調りければ只一齊に押寄する蒲池鑑廣五百人身命を棄て防き戦ひたりければ寄手大勢なりといへとも急に陥らしむへしとは見へさりけり鑑廣思惟して此の間敵の居たりける陣屋を燒さしめんとて竊に人を遣しけるに元より空虚なりければ思ひのまゝに走り廻り所々に火を差ける程に同時に^{カッ}颯ともへ上り黒烟天に覆て夥し肥前勢後を願てこはいかに敵はや後に廻りたるか田尻三浦より後詰をしけるかと云程こそあれ陣々にわかにはさわき立ひたひし

めきにひしめいて堪へず取て返しつゝ、犬塚までを引にける去れども鑑廣小勢なれば討て出るに及ばざりけり同國田尻鑑種は龍造寺多勢を率し向ふと聞き此間構へ置たる津留濱田堀切江浦四箇所の砦を引拂ひ本城高尾に籠り居て島津方の援兵を遙に待て居たる處に龍造寺家晴多久與兵衛尉八千餘にて押寄せ二十日餘を攻たりける龍造寺筑後の國に望を掛て攻轟す事既に三年に及けるに不思議に今まで怵へけるか今度は城中勢微にして持ち難きと見えへにける斯る處に薩州より田尻に力を合せんとて數多の船に兵糧をつみ軍兵相そへ送る由隆信是を傳へ聞島津勢を入れ立は由々しき大事なるへし路にて防き止めよとて兵船三十艘田澤大隅守を大將として九月十日高尾の南海より押出さしむ其日島津の加勢船も肥後の三角を出寺尾を差て馳けるか風悪くして漸く其日の晩景に同國大島の浦に寄せ翌日は則ち押出す田澤も船を漕出し大島差て行はとに沖中にて逢と均しく戦ける島津方には兵糧多く積たる故船の足重くして進退自由ならず田澤か船は元來軍の出立にて櫓數多く立たりければ思の儘に押廻して近き船をは鎌熊手を打懸く遠き船をは矢炮を放て射伏打伏などしける程に志岐天草か船二三艘終に乘取られければ其餘の船は悉く三角を差て漕もとす斯て隆信五十餘日の在陣なれども豊州より後詰もなく島津も國を隔てぬれば重て加勢はなかりけり筑後五郡の者共すへき様のあらざりければ皆人質を出し命計りを乞請て何れも下城したりける隆信肥前に歸りて後ち降人の本領をことごとく没収して新に僅の地を宛行はる其中にも田尻鑑種同鎮種計り弓矢の道に長せし故隆信他國に働きなは殊更頼み思ふ間味方

に於て忠を盡すへしとて本領を返し與へける凡筑後の國士の内蒲池左衛門尉鎮連草野長門守重永黒木兵庫頭家實は最初より隆信に隨身す此度降參したる士は田尻鑑種同鎮種蒲池鑑廣同源十郎三池鎮實高良山良寛僧都小身の輩には齋藤美作守都地民部大島居なり其外豊後より置る所の給人江上豊饒豊持は逃て豊後へ歸りにけり

隆信肥後出張并赤星没落事

同九年四月九日龍造寺隆信肥後國を計んと欲し嫡子民部大輔鎮賢後改政家を先陣の大將として一族越前守家就同安房守信周同備後守鎮家同彦右衛門尉家俊高木左馬大輔盛房内田肥後守兼信馬場肥前守鑑周同中務少輔鎮周姊川中務少輔信安同彈正信秀倉町左衛門大輔信俊横岳兵庫助鎮貞同下野守頼續出雲兵部大輔信忠熊代彈正空間鴨打鹿カシノ江本告以下を従はしめ後陣は次男江上下總守家種を大將として舍弟和泉守長信波多參河守鎮後藤善次郎家信其外松浦肥前守鎮信同豊前守是等の陣代相添らる又一方には鍋島豊前守信房を大將として吉田嬉野久間大塚原永田等を相添て莊津鹽田澤より舟にて差向らる程に西郷刑部大輔同右衛門大輔多良守良上野介等も武崎よりそ出船す筑紫上野介廣門は新助増門を代官として出し大村丹後守純忠は一族左兵衛尉同左近大夫同左衛門大夫同又八郎以下を遣はしける有馬修理大夫義純同義直筑後の蒲池彈正少弼鎮並同兵庫助鎮連黒木民部少輔鎮連西牟田播摩守鎮豊田尻丹後守鑑種草野長門守鎮員高良山良寛林慶兄弟も或は自身出もあり或は陣代を出すもあり島原純豊深江安徳其外高來彼杵の郡士は兵船數十艘を促し高瀬大島猫宮三池黒崎の浦に押

向ふ都合其勢五萬餘騎同く十日大津山に着陣す翌日民部大輔鎮賢陣を山鹿に進めければ小代入道宗全隈部但馬守親永同源次郎親泰を初め大津部原山下の諸將肥後筑後の者共までも我も我もと馳加る斯て龍造寺隆信も來られ續て鍋島加賀守直茂も筑後の酒見より來りければ即ち二萬餘の兵を與へて同十三日に赤星統家か隈部の城を攻させける此城もとは隈部但馬守親永か累代の居城なりしを赤星に攻取れにければ其舊怨を散せんとて隈部眞前に進んで爰を専途と攻戦ふ加賀守直茂舎弟小川武藏守信俊も士卒を勇め進ければ松田彌兵衛副島太郎兵衛島原大學中野監物など云ける熊の如きもの共勢ひ猛にのしり攻立攻立する程に難なく石壁を乗破り町架に懸て火を放ち煙の中より込入て喚き叫んで戦へは城中に討る者三百餘人に及びり赤星防くに力なく甲の丸へ引籠るを尙もつひて取廻し攻破らんとしたりける程に今は爲方あらずして降らん事を乞ひにける隆信これを許容して暫く攻口を退けしむ時に合志常陸助親爲城越前守親賢以下來服する者數を知らず赤星は攻口緩になるにや怠りけん人質を出せと責たりければ隆信大に怒て同廿一日重て押寄せ取圍み下村入道生運を以て質を出せと責たりければ統家大に怖れ嫡子新六とて生年十一歳に成けるを是非なく出し渡しける此人もとより鍾愛他に異にして姑くも傍を離れず荒き風にもあてしとこそは勞りし恩愛の深き中を斯くさけられし心中思ひやられて哀なり此を限りの別れとは後にぞ思ひ知られける斯て統家城を開て合志の城竹迫へ退きければ親永が居城なりとて但馬守に是を與へ翌日内久我へ押寄せければ内久我こらへず降參す其外天草の城主志岐

豊前守鎮經以下悉く靡き従ひたりしかは隆信大に悦て肥前の國へ凱旋し兩筑兩肥豊前の國を合せて五州の太守と號しける佐賀(嘉)城邑の繁榮は時を得てこそ見えにける

蒲池鎮並誅戮事

筑後國柳川の城主蒲池近江守鑑盛入道宗雪か嫡子彈正少弼或民部大輔鎮並並或連は藤原家の氏族として粟田の關白道兼公七代の後胤宇都宮左衛門尉成綱か末裔なり久則と云しより當國に下着して蒲池の家を興立し鎮並まで八代下筑後七千町の領主たり一族廣く富榮へ弓馬の道に疎からず天文の昔龍造寺家兼同胤榮筑後へ狼(浪)々なりし時父鑑盛入道宗雪最懇志不淺剩へ歸國には軍卒二百騎を従へしめて送らける其後隆信大友を叛しかは宗雪同心なかりけり去ぬる天正六年の秋大友日州出張のとき幕下の國士等皆催促に應しけるに宗雪は老體なる故遠陣叶ひかたしとて嫡子彈正少弼鎮並を代官として遣しけるに鎮並肥後國まで出陣したりしか叔父田尻鑑種か勸に依て落馬と稱し筑後の國へ歸りにけり宗雪大に怒て云甲斐なき者の所存かな君一日の恩の下に百年の命を忘るゝは士の習なり況や多年の主従なるをや先さらは某行んとて三百餘騎にてうち出けるか日州高城に於て一人も残らず討死したりけるを世人は鎮並父を殺しけるとを沙汰したりける夫よりして龍造寺に相従ひ川崎出羽守退治以後所々の合戦に勳功許多なりけるか天正八年の春の比自立の志ありて矛を倒にするなど聞えしかは隆信是を安からぬ事に思ひ嫡子政家同家清を以て三月十日より取圍み挑み戦事數月に及ぶ斯て城兵防くに方便盡ければ十一月廿八日鎮並既に下城して頻に先非

悔る故其罪を宥免し舊地を興へて置きけるか其後猶あやしき事のありければ誅戮すへきに
を定めける諸國今打治まれる始に騒動しては然るへからず賺し寄て討んには去くへからず
とて西岡美濃守田原伊勢守兩人に委細の趣き云含め柳川へとを遣しける兩使鎮並に對面し
て申けるは去年隆信須古在佐嘉城北六里許へ隱居仕り候しか國々の軍に暇なかりしかは日夜心を安ん
せず候き今五箇國を治めて姑く往年の辛勞を忘る小家より出て數國を領し家を政家に譲り
名を天下に振ふこと自他の面目なり去るに依て猿樂能を興行し隱居を祝はよと存する處な
り鎮並殿は數代詩歌舞樂の達人なりければ此度須古へ御越ありて隆信を祝ひ給ひ候ひなは
御志の切なると云ひ兩家和合の悦ひと云ひ何事か是にまかさらんや早く御光駕あるへしと
懇に辭を盡して申ける鎮並元來智勇兼備の人なりければ是は定て隆信か謀計にてそ有らん
已か聲の小田鎮光を害する程の暴虐なるを見なから何ぞ後車の誠とせさらんや敢て信し難
しとて更に承引せさりけり西岡田原様々に諫めすゝむと云とも所勞と號し返答にも及はさ
りければ兩人思慮を廻らして鎮並の母公と叔父蒲池左馬大輔の許へ行き霜臺の御所勞させ
る事は候はねども察するに狐疑を生せらるゝと覺え候若し許諾なきに於ては隆信の心中計
りかたし一度和平破れなは蒲池一家の人々誰か安穩に候はんや只然るへくは須古へ御越候
て隆信を祝せ給はゝ兩家の和平いよく熟して當家の長久申に及さる處なり又我々つたな
き心を先立さしもの名將を謀り申すへきや偽なき驗なりとて誓紙を書いて出しければ母堂並
に左馬大輔二人か智辨に落されて鎮並を諫しかは此上はさのみ人を疑ふへきにあらすとて

既に用意をしたりける其夜母堂の方より西岡田原か旅宿へ各美女一人黄金一枚に酒肴など
持せて今度鎮並始て肥州へ趣くなれば龍家への取なしを偏に頼存するなりと云送られけ
る西岡熟々思ひけるは良將をは謀計を以て罪せすと云へり去れども鎮並自立の心あるによ
りたばかり計ん其爲の使に來り偽なる身を以て禮物などを受んこと士の本意にあらすと
思ひければ御志しは有かたく候へとも隆信へ聞えなは後日の尤に逢もやせん此度鎮並公の
御供須古佐賀の首尾をとゝのへ目出度又此處に御供仕て其時美女をも寶をも給り候はんと
て美女と黄金を返しぬ誠に志し深重なりける振舞なりと各感しあひにけり斯て鎮並は母君
に暇を懇に乞ひ路次の行粧はなやかに藝者數十人を召具し上下三百餘人西岡田原を先きと
して天正九年五月廿六日に肥前の國へと趣かる神ならぬ身の哀しさは今を限りの出立と知
らて行こそ歎息けれ佐賀の城には隆信の嫡子民部大輔政家在城ありて法華宗本行寺其時城の北にあり
今興賀に移すと云けるを旅館と定め其より本丸に招請し種々の饗應あさからさりけり鎮並坐中に
於てあやしと思ふ事やあけん席を立て左馬大輔を傍に招寄せ潜に事を談せらる左馬大輔
其儀にて候はゝ某鍋島直茂の心を引見申すへし事若しあやしく候はゝ直茂と差違へし其時
公は政家を討せ給へと云終て席に歸りぬ左右盃の獻酬既に闌はなるの後ち左馬大夫直茂の
傍に居寄て申けるは今度兩家合體の御祝ひ何事か是にまかさらん左あらは貴殿と某ことさ
向後別心あるへからず夫に付鎮並近年政道に私あり土民を撫育する事もなく歌舞宴樂に日
夜を渡る偏に滅亡を招くにあり某蒲池の親戚として是を見るに忍ひす今宵の中に速かに鎮

並を討て須古へ捧け申すへし吹擧を頼み存するなりと云ければ直茂屹と推察し色を損して御邊はさしも忠節の人と思ひしに聞しにも似す千古未聞の不義を宣ふものかな弓取は貳心なきを以て人どす直茂ことき物の數には有らねとも左様の不忠不義の人には同坐をも耻る處なり御邊鎮並を討て百年をたもち給ふへきか政道悪しくは幾度も諫め給はんこそ道ならめ返々も淺ましき心底なりと天に耻しめ以の外の返答なり左馬大夫からからと笑ひ吾あへて野心を狹ます思ふ子細のある間貴殿の心を引見ん爲にてあればなり御詞こそ頼もしけれど申ける此由かくと鎮並に語りければさては野心なかりけると鎮並心打とけて聊か用心の體もなく其夜は本行寺へ宿し明れば須古へ趣んとて與賀明神の社の前を過ぎける處に隆信より伏置し小川武藏守信俊石井か一黨一同に蒐出前後より取りかこみ関を咄とそ揚たりける供の者共肝を消しあきれ居たる計なり鎮並馬を控へ左馬大夫に向ひ某始めより申せし事は爰にてあり御邊頻りに勸めらるゝに依り今この難に逢事よとありければ鎮永涙をばらはらと流し偏へに我か智の足らざる處なり此の期に望んで兎角を申すに及はずいて二心なき處を御目に掛んと花表の前に馬打寄せ重藤の弓にせきつるかけて挽えをり眞先に進んたる敵三騎射て落し肥前方の土石井參河守同四郎兵衛同次郎右衛門秀島隼人中島將監大塚勝右衛門澁谷善右衛門水町彌太右衛門等面も振らす討てかゝる蒲池の者共少しも臆せず大木兵部丞鎮照田尻彌太郎種教蒲池左近大輔並安中山掃部大木越後同忠五郎内田内藏助丸野外記左衛門本郷中務同彌七大谷與三兵衛同式部西川縫殿原對馬岩井九郎小溝藤兵衛鳥巢勘解由

今村源右衛門以下一騎當千の者共今は遁れぬ處なり鋒を揃へて切て入り死生知らず攻戦ふ其隙に鎮並は傍なる小屋に走り入り見れば老婦一人あるに汝急き湯を沸すへし心靜に自害を遂んと思なりとそ申しける去程に左馬大夫鎮永は板屋の上に蒐登り矢束といて押亂し指取引詰散々に射たりける係る處に直茂よりの使者として江副兵部左衛門と名乗て立文を差出す左馬大夫披見せしか如何なる文にて有るやらん二つ三つに喰裂すて箆の上矢を拔出す江副是を見て返答は其矢なるかと云ひ敢ぬに能挽て兵と放ては江副か膝にはつしと立つ江副もさすか大剛の者なりければ少しも疼ます立たりけるに二の矢をも射さりければ此由直茂に申さんどて太刀を杖とし歸りける鎮永矢種は射盡しぬ今は是まてなりけると太刀拔持て飛て下り勢ひ餘りて控へたる大勢の中へ割て入り巴の字に切て廻りしか數箇所を蒙て堤左馬允にそ討れにける大木忠五郎も朱に成て戦しか太刀打折れは短刀にて石井四郎左衛門に走りかゝり左右の股を突抜たり石井是を物ともせず頓て抜すて忠五郎を討取ぬ其間に鎮並は心靜に浴して主従三人差違へてを臥たりける其後老女家の後ろを見るに十文字の鎗一本金龍の笄金作の太刀取をろへて軒の下に有ける家主へ禮物にやと覺えて最哀れにそ聞えける老女は福地覺右衛門と云し者の乳母なり其外の輩一人も残らす討れ藝者共も返す袂の面白からすちりやたらりと成はてゝ水のあはれを促しける其後龍造寺隆信鎮並の居城へ軍勢を遣し残りし從類悉く攻め亡しける程に蒲池の家業此の時に至て絶にけりさても鎮並と云けるは數代豊州の旗下として忠義深重なりしかは恩惠あつく蒙り家門の繁榮今此時

とさかへけるか忽ち心翻て其君恩を忘るのみならず父宗雪か遺言に背き龍造寺に隨ひ多の人を亡し筑後國中悉く隆信に隨はしむること鎮並一人の不義より起る處なり因果歴然の其驗一義に及ばず謀り寄せられやみくくと討れしこと誠に人を賊ソコナふ者は天必是を禍すとば斯る事をや云ならん父の宗雪は義を重し命を君に奉り其名を九霄の天に揚譽れを千載の後に輝かす嫡子の鎮並は是に似たる事もなく不忠不孝の生れにて惡名のみを末代に傳へ子孫も永く絶果てにけり其後隆信三男家晴を柳川の城に居へ筑後の國を治めしめらる爰に如何なる者かまたりけん一首の狂歌を書て柳川の井手の橋にを立にける

義統被築朝日嶽之城并築城儀式之事

去程に薩州の島津修理大輔義久武威日を逐て盛んになりしかは大友入道宗麟思慮を廻らし嫡男豊後守義統と相議つて豊後と日向との堺に一城を築き兵を籠置き守らしめんとを思ひ立れける其の比南郡三本松圓福寺の住侶權大僧都宥榮法印丹生の島へ登城ありけるに義統對面し種々物語有て後法印能き折節の御出なり我日州堺に新城を築んと存する間加持祭祀を頼入候なりと有ければ宥榮左様の儀式をば金剛寶戒寺へ仰付られ然るへく候はんとを辭せられける去れども今日の御出を幸と存するなればなりとて強て申されけるにより法印領掌せられける義統重ねて新地の城取には如何なる儀式の候ひけるやと尋ねられければさん候古より大概定まる式法の候あらく申上候はん夫城は帝釋の坐を表し須彌の十二方門を

かた取三百六十四門に準し候ゆへ惡く取らは城に災多く出来る者にて候東西の長地形は赤龍の地と號し巳午の間に戸帳を結ひ巳より七つ目の方に向ひ軍陣を祭り五つ目に鐘を進む巳より九つ目は城主壽命の方なる故此の方に向ひ祭りを執行ひ候其後門を立てけるに竹三本に篠を付け門の左右に是を立て七重に七五三を引き次に東方に人歩五人南方に七人西方に三人立て、鋏初めを仕候是七五三なり南北の長地形は青龍の地と號し寅卯の間に門を立て寅より七つ目に鐘を進む九つ目は城主壽命の方なるか故此方に向て祭りを執行ふ南方に七人東方に七人立て鋏初をす坤の長地形は鉄體の地と號し南に取り候なり申酉の方には門を立申より七つ目に向ひ軍陣を祭り五つ目に鐘を進む九つ目は城主壽命の方なるか故此方に向て祭りを執行ふ戌亥巳の長地形は閻體の地と號し巽面に取り門を立て辰より七つ目に向ひ軍陣を祭り辰より五つ目に鐘を進め九つ目は城主壽命の方なるか故此方に向て祭りを執行ふ乾の方に七人立て鋏初をす四方圓地をば方蓮の地と號して何方になりとも門を立る然りと云へ共其地の性を見合すへし縦ひ平地たりと云とも河の流れを以て高下を定め水上を上にとり其大將の性に見合せ吉方を定め軍神を祭り鐘を進め候なり方圓の地は四方に七人つゝ立て鋏初めを仕候惣して新城を見立る事は或は山上或は平地其郷の性城の性を大將の性に取り合せ相生相尅を勘へ申候なり中高くして四方下りの地は土性東高くして西下りなるは白龍の地是金性西高く東下きは青龍の地木性南高く北下きは黒龍の地水性北高く南下きは赤龍の地火性此の如く其土地の形を以て相生相尅を相計らひ候本は火を生し火は土

を生し土は金を生し金は水を生し水は木を生す是則ち相生にして宜く候木は土を尅し土は水を尅し水は火を尅し火は金を尅し金は木を尅す是則ち相尅にして宜しからず又木性に木火性に火土性に土是等は皆相加とて半吉にて候次に行ひの次第は一番に藏を祭り二番に鐘三番に大將四番に軍兵を祭り候吉方に壇を設け壇上に虎の皮の空穗二穗滋藤の弓二張甲冑太刀百味の供物花は勝軍木メルテノ鞍置馬一疋馬の性を用る事鹿毛カシノ佐目サメは土性鶴毛河原毛は金性青蘆毛は木性栗毛雲雀毛は火性黒駁は水性此の如くの毛色を以て五性を勘へ大將の性に相生させ行ひ處近く繋ぎ置武運長久息災延命如意満足の祈りを仕候さて坐の次第は右の坐上は阿闍梨左の坐上は城主それより一族家臣階級次第を守て列す肴の次第は阿闍梨の前には粟の餅城主の前には雉の股を重ねて篠カシノの蔭にて是を置く其外鯉を二喉同篠の蔭きなり酒終て其家の長臣早鐘を九つ撞く又祇園稻荷を祭候阿闍梨へ馬太刀を出す事是定れる法式なり又鐘を掛る所の長臣の下を二尺堀り千盤水にて符して埋め其上に鐘をかけ候千盤水と云けるは一大事の秘密にて候なり東西南北に門の名あり東方の大門を寶壽と號し南方の大門を福壽と名つけ西方の大門を延命と名つけ北方の大門を成就と號し候なりと委細に演說せられければ義統大に感心あり柴田遠江守入道紹安を築城の奉行と定められ法印も柴田と同道にて城地を見計らひ祭祀を勤め給はるへしとを申されける是に依て天正十年五月上旬大僧都宥榮柴田入道諸共に宇目の内酒利と云所に行き此彼と見計らはれたりしかとも然るへき地形なし朝日嶽ならては城に取るへき所なしとて吉日良辰を撰んで繩張せられける法

印柴田に向ひ物よりの堀横の郭かさしの土手流しの土手角馬出トカイし外側の矢倉横矢の思案能々勘へ計らるへし祭祀は宥榮仕らん此山不相應の處もあれども宗麟公の仰せには境地の端城は敵に取れて又味方より攻る事もあるなれ其思慮を廻らすへしとの仰せなり其段は愚僧に任せらるへし敵の城に成りて後ち此方より攻るとき敵利を失ふ秘術ありとを語られける斯て城取の繩張八つ割等を定め普請の八歩は宇目中村に下知して相催す朝日嶽の近所に兜整岩及び酒利と云ふ所ありけるを法印如何思はれけん兜整岩を青山と改めて

朝日指光もつゝ青山は盛り久しき君か御代かなと一首の歌を詠してを歸寺せられける柴田は丹生島に登城し朝日嶽を新城に取りし趣委細に申たりければ義統喜悅淺からずいよ／＼普請の才覺あるへし殊に法印の詠歌又兜整岩の名を改められし事尤も能き作意なり見えぬ敵に早兜整を脱せ降参させたる心面白しとを感せらる此宥榮僧都は長壽にして行法有驗の高僧なり去れば平生奇特多し空を翔る鳥などを呼て手にとまらせ歸れと云へは飛去りぬ又一年間の城に於て大般若の札を書れけるを後に如何程削りけれども消さるけり或人の云く墨の精残りて古き札には必ずある物なりと云ふ去れども是は五月に書たるを同七月に削り見しとかや餘の法印の同時に書たる札を削りけるに痕かたもなからしかは諸人のいよ／＼奇異の思ひをなしにける斯て朝日嶽の城經營すてに終りければ柴田入道紹安に野津院の侍を相副へ番兵となして籠置れける

有馬叛龍造寺事

去程に筑後柳川の城主蒲池彈正鎮並は龍造寺山城守隆信の爲に誅せられ哀れを滅亡の跡に
 ぞ留めける鎮並に男女の子四人あり三人は害せられぬ嫡女は徳と云ひけるか乳母か忠にて
 危き命を扶けられ少しゆかりの有馬なる修理の大夫を頼んと海を渡り山を越へやうくた
 ども著けれ共定め難きは人心あらはに名乗出て後ち悔る事もやありなんと深くつゝみて仙
 岩へ筑後方の賤き者と偽り奉公にそ出にける誠に化なる世のありさま移り換れる飛鳥川の
 たとへも今は身の上と同じ流れと汲てある柳川に有し時は深窓の内に長なり荒き風をもい
 とひしに何しか今は引かへてかゝるなけきを島原や高來の嶽に立烟胸の思ひにくらふれば
 何かうすき夏衣馴ぬ仕へに日を重ねうきを身に知る秋の來て緋女祭る比にも成りぬ城中の
 侍女我も我もと竹竿に願ひの糸を掛まくも色々の衣服をかさり掛たるは龍田の紅葉芳野の
 花宮城野の萩出手の山吹四季の詠めを一目に浮へて宛も仙境の浮香世界に入るかど怪しま
 る彼の徳の方は只獨り打たはれたる氣色なるを朋輩の女房何とて衣をは掛給はぬそやと云
 ければ徳の方涙と共に

いさゝらは何をか借ん七夕に涙の外は身に副ばこそ仙岩此歌を聞よりも去ればこそ我始
 より只人ならぬ思ひしに歌の姿心さま哀と云も愚かなり父は誰なるらん何故さのみ隠すそ
 やと頻りに尋問ければ徳の方今は何をかつゝみ申侍ん自は蒲池鎮並か娘加様加様の次第な
 りと始め終を語り龍造寺を打亡し父尊靈に手向黄泉の怨を散せしめ度由涙なからに頼みけ
 る仙岩大に驚きて鎮並の息女とは聊か思ひ寄さる故麤略をなしたる悔しさよ御身の父とは

所縁ありしかども境を隔てし事なれば疎遠には打過ぬ吾近年隆信と和平して縁者の好みを
 通し一族島原大學土黒備中兩人を質とし遣し置とは云へとも遺恨更に晴やらす必ず隆信を
 討取て御身か素懷を遂げさせん今より後は仙岩を親と思ふへしとて則奥に冊き入れ嫡孫に
 締ヒひ合せ懸て密に薩州へ使者を遣しひたすらに島津を頼みたりければ義久早速領掌して能
 き味方を得たりけると悦はる爰に有馬の一族深江の城主深江伯耆守同く嫡子下野守と云
 者ありけるか斯と聞より大に驚き此事然るへからすと様々諫めを納れしかども仙岩用ゐさ
 りければさては家門の滅亡も遠きにあらしと思ひける故骨肉同胞の好を離れて龍造寺隆信
 に志をそ通しける仙岩大に怒りて天正十年十月より薩州勢を招き寄せ深江の城を取圍み攻
 動す事頻なり去れども城中身命を顧みず防ぎ戦ひたりしかは輒く乗取事を得ず數月を送り
 ける處に同十一年四月深江に一味したりける安徳入道宗泉忽ち心をひるかへし島津に降て
 深江と佐嘉の通路を斷つ薩州の援兵新納刑部大夫伊集院肥前守間宮平馬介樺山播磨守養田
 右馬允河上左京亮福島新兵衛等七千餘騎を引率し晝夜十八日息をも續せず攻立る是に依て
 深江方の後詰として隆信の嫡男民部大輔政家數千騎にて高來郡に發向し薩州勢と相戦ふ城
 中よりも討て出鎬を削り鏑を割り死を争て戦ける中にも深江か士村吉雅樂と云ける者薩州
 の大將新納刑部と鎗を合せ卒に刑部を突伏けるか其身も疵を蒙て首を取事かなはさしを
 横岳鎮貞か士古館播磨と云者走り寄て刑部か首を取にける養田右馬允も討れ河上左京亮は
 深手を負ふ薩州勢戦ひ負け肥後の國へと引退く政家有馬は小城なれば重て攻るに安かりな

んとて肥後の國へと逐て行き玉名南の關に屯をなし高瀬山鹿邊に於て戦はる其勢都合三萬餘島津兵庫頭義弘も八代より討て出對陣しける處に秋月長門守種實肥後に來て兩陣の和融を議らひしかは肥後の國を二つに分ち兩家より領すへしとて約諾し政家は筑後へ義弘は八代へと互に陣を引にける隆信須古にて是を聞き勝へき處の圖を迦して和睦したりけるこそ安からねとて怒られける

甲斐宗運逝去の事

玉は碎けても其白ウキモノを改めす竹は焚ても其節を毀はす人は死ても名を失はずとかや肥後の國御舟の城主甲斐宗運と云けるは其質聰明英武にして群を出るのみならず佛祖不傳の妙道の奥義を探り超宗越格の機用を具し加之有時は禮學の窓の月に逍遙し又有時は詩林の苑の花に吟詠し難波津や淺香山の井の清き流れを汲て人丸赤人の古風を逐ひ聖賢の教へにかなつて窮を祐け危きを救ひ慈悲深重にして士民を撫育せしかは義を鉄石に比したる者共從ひ屬して四肢を使ふにことならず誠に希代の良將なり去れば生者必滅ハ世の習ひ世尊も免れ給はず況んや世人に於てをや去年臘月下旬の比より重病を受けさまゝ療養したりけるか更に徵驗のある事なく又立歸る春の空にも寒風まきりに吹て病惱は猶とけやらす次第に重く成りにけり七月の初今を最後と覺敷て子共を近付云けるは人の死なんとする時其言よしとかや最後の一言なるを能々聞置て忘るなよ我數度の合戦に一度も不覺の名を取らず遠き敵をは射て落し近き敵をは討て捨或は智謀を以て軍を破り或は雄偉を以て敵を亡す夫名將と

云けるは其身は黄壤一堆の底に埋むと云へとも名を青雲へも天の上へも擧るなり勤て學ふへきは文嗜んで勵すへきは武也文武の二つを知らざる時は其道直なる事なし故に論語に曰く智者は惑はず仁者は憂へず勇者は懼れずと云へり相かまへて汝等父か名を下たすことなかれ死生は天に有るなれば身を捨て勵さすんは有るへからす我本意是にあり身終るまで忘るへからす我卒して後葬儀墳墓あるしの木石佛事供養を執行ふ事なかれ供養せんと欲しなは有漏の作善を營むへからす汝か自心の妙果を開き無明長夜の夢をさませ是則我を供養するなり我は是不生不滅本來三世不可得也と演へ天正十一年七月五日生年七十六歳にて終に北邙黄壤の露と消にけるこそ哀れなれ抑此宗運か先祖を尋ね考るに菊池十代武房の三男甲斐守武本にそ出たりける武本より六代にして重村と云けるに尊氏公より命ありて甲斐を以て氏とし肥後守に任せられて下國せしかとも菊池武重に追出され薩州へ入り日向に往て土持榮綱に屬して年月を送りけるに永正の比阿蘇大宮司惟豐日向へ没落の事ありて宗運か父甲斐大和守親宣に邂逅し父子か計略にて再び阿蘇に還住しぬ是より君臣の約をなし阿蘇の南郷を領し住けるか大友と阿蘇とは縁者なる故義長其勳勞を賞し又は肥後一國の壓へにもせんとて益城郡御舟に於て五百四十町を加恩しける其後親宣卒して嫡子民部大輔親直家を相續し後入道して法名宗運名を焦夢と云けるか智謀最も敏捷にして當時の良將なりし故彼か在世の内には薩州勢豊後へ打入事を得さりとしかや

赤星子共被害并龍造寺有馬發向の事

茲に肥後國人赤星安房守統家と云けるは故蒲池鎮並の妻女の爲に兄なる故隆信か蒲池を亡はしぬる事を深く憤りたりしかども嫡子新六を質とし出し置ける故爲方さらに在らすして虚しく時光を送りける處に隆信も心元なく思ひければ天正十一年佐嘉へ參禮致すへしと云ひ送られける赤星左右に事を托て敢て來らさりければ實否を糺し見るへしとて木下四郎兵衛昌直成松遠江守信勝を赤星か許に差遣す折節統家他行せしめて居さりければ空く歸るへきにもあらず去らは質をと與へ入り八歳に成ける幼稚の女子を奪取てを歸りける隆信怒てさては統家隠れしならん反心疑ひなし幕下の諸士の見懲にせよやとて人質新六か十四歳に成けるとかの八歳の女子とを引出させ筑後と肥後との境竹井原と云處にて磔にを掛させける是を承る武士とも情なしとは思へとも主命なれば力なく涙なからに兄弟を西向に直し念佛をすゝめければ新六我か故郷は何の方にて候ひけるやと問ふ是より東の方と云へば我面て西にな向けを赤星の親に後ろを見せしと思へはと詠しければ諸人みな袂をぬらしける父安房守統家これを聞て大に歎きもたへ焦て涙を流し恨み骨髓に徹りしかども無勢なれば力なくてその比島津兵庫頭義弘八代に在りけるに走り行様々歎き申けるは昔者菊池全盛の世なりしときは城赤星八代とて隣國までも威を振ふ菊池斷絶せしめて後大友に従屬し今又龍造寺に服せし事時の到るを待ち運を勘るにあり然るに隆信猛威を振ふにつき人の歎き世の毀をも辨へすかくの如きの振舞生をかへても盡せぬ處の恨みなり某武威漸く衰へ一身に怨を報せん事叶はず薩州大守の御慈に依すんは如何を隆信に矢一筋射て生々の恨

を散し申へき冀くは哀憐を垂給へと涙にむせひ申ければ義弘あはれと思はれけん敢て難澁する事なく本意を達せらるゝ程こそなくとも如何まさ矢一筋は弔ひ申し候はんといたはり情をそ加へられける去程に有馬入道仙岩は薩州に加勢を乞ひ本意を遂んと議しけるか先づ深江の城を攻落し味方の勢を籠置きなは隆信多勢を率し攻來るとも防くに不足あらしと思ひ一族天草郡の志岐民部大輔天草伊豆守島津原安德布津洞崎の輩を相催し同十二年三月中旬又深江の城に押寄る城には深江伯耆守父子を初として隆信よりの加番馬場横武一手になりて爰を専途と防戦ふ是より先に伯耆守兼て仙岩か謀及び近隣の風聞を一々に注進し深江の城を攻落されなは由々敷大事なるへければ急ぎ御出馬あるへしとを告たりければ隆信須古の城にあつて是を聞き去年政家を遣して深江の城を救はせしに薩州勢に勝とは云へとも仙岩か智なれば鼻に弓を挽ん事恐れありとて肥後より軍を班しける其親愛を打棄て又薩州へ内應し重て師を興す事甚以て奇怪なりさて又島津義久も肥後分領の會盟は昨日今日かと覺ゆるに間もなく有馬にくみするかや係る不義の者共を討こそ道の本意ならめ先づ有馬を踏潰し島津をも攻從んとて急に兵をを集めける鍋島加賀守直茂其頃柳川の城に在けるか急ぎ須古に馳來て隆信に對面し今度の御出勢をは御延引さかるへし有馬は小敵と申せとも要害無雙の堅城なり味方大勢なりと云へとも總軍を立へき所なし小敵をも侮る事なかれとこそ申候又一旦攻に仕らは窮鼠猫を嚙の怖れあり其上薩州より援兵あるよし承れば某發向仕らん五州の大守たる御身にて輕々しく向ひ給はん事甚以て然るへく候はずと諫めしかど

も隆信のへて聞入す有馬程の小城を蹴散さて置ゆゑ叛逆を企て度々薩州勢を招き入る幕下の者共の見こりにも成るなれば馬を出せよとて陣觸をそしたりければ直茂も今は力及はて止みにけり斯て人数も調りければ總軍を三手に分け一方は直茂を大將として山の壇より進ましめ一方は江上下總守家種舎弟後藤善次郎家信を大將として濱の手より指向る中路は是を大手として龍造寺隆信發す都合其勢四萬餘騎須古の城を打立て諫早に到り神代に馬を寄せ其より有馬に向はれける

島津家久肥前出張の事

去程に島津修理大輔義久仙岩か飛檄に依て一族老臣等と呼集て曰く龍造寺隆信と和親の好みを結ひ今又是を破ん事不信の謗を耻ると云へども此度援兵を差遣はさすんは仙岩忽ち討るへし窮鳥懐に入時は獵師も是を助くとかや且新納刑部を深江の城にて討せし事思へは無念の次第なれば旁以て救はすんはあるへからす去なから隆信は當時無雙の猛將なり所は自國の案内者勢も定て二三萬はあるへきを中々多勢を遣はさんより態と小勢を差向けて必死の軍可然時の方便は機に臨み變に應ずるものなれば將の心に任すとして中務少輔家久を大將とし伊集院右衛門大夫忠棟新納武藏守忠光を副將として猿亘越中守川上左京亮以下選兵精て三千餘騎を差向る赤星安房守統家は嚮に最愛の子共を隆信に殺されし其の鬱憤を散せんと思ふ折からなりければ時到りぬと悦んで二百餘人にて馳加はる斯て家久同月廿一日肥後の八代を出船して三角の脊渡を過る折柄にはかに大風吹起て逆浪天に漲りかへし廻溜激湍

はなはたしく萬里長堤の險灘なるかどわやしまる羅刹國にも墜るやすらんと疑れて同國郡の浦に吹やられ三日爰に滞留したりけるに二十三日の未の刻より巽風に吹變りしかは天の助と悦ひ眞帆に引せて走る程に其夜戌の刻はかりに高來郡淵川の浦に入津し有馬の城に使者を以て來著の由を告げれば仙岩大に悦ひ龍造寺數萬にて明日是へ寄來る由に候要害堅固に候ひぬれば是へ御越あるへし一所に籠り共に防ぎ候はんと思はんと使を添て返答しけるに家久某の意に應せられす使を返して船より下り熟々思慮を廻らすに敵の多勢に味方を比ふれば大海の一滴九牛の一毛對揚すへきにしもあらず我一分の働きを以ては奈何を功をたつへき神明佛陀の加護力に預らざらんに如しとて潮を結て身を淨め名も九州に高かりける豊前國彦山の方に向ひ懇禱稽首し恭しく伏て冀はくは今度の合戦事故なく敵を亡すへからんする擁護の眸を廻らし給へ若左もあらは末葉永く檀徒と成て靈神の威光を輝し奉るへし祈念冥慮に叶ひなは一の徴を見せしめ給へと五體投地し信心を凝して只何となく大慮を仰き見るに不思議やな樞葉空にひるかへり旋轉として降り來り直に首に落かゝる城に感應ありかたしと歡喜踊躍は淺からすやかて在所の者共を召て地の形勢を委く問ひ其後宗徒の者共に向て曰く味方僅の勢を以て籠城せん事然るへからす敵の多勢に取圍れ本國の通路を絶れなはやはか落城なからさらん今度に於ては十死一生の合戦を致さすんはあるへからすとして有馬の城より五六里計り東なる林の中に出張し中軍の旗を立東の海邊西の山際に一千つゝの勢を分つて三將三所に陣を布き左右の陣をは旗を卷せて物陰に隠し置き大將中務少輔家久

軍令を出して曰く龍造寺は去る良將なれば尋常の如き軍にては勝事更にあるへからず明日の合戦に如何に敵よりかくるとも味方の矢炮を放つへからず早討と云ん時つるへ放しに同時に打て折よくは二放しも放つへし放つと均しく弓鐵炮を打捨太刀を抜て切てかゝるへし玉薬も多く持事無用なり三放は打せぬとも千に一つも用ある時の爲なれば三放までは持せよとて其餘は悉く船中に残さしむ諸軍心を一つにし吾か馬驗を目にかけ一足にても其より先に進んで相働け敵と鎗を合せん時左右に心に移すへからず敵を切伏せたりとて首を取事あるへからず弱る敵をは打捨て自餘の敵に切掛れ必ず組討することなかれ下知を背く者あらは打捨に致すへしとて法令嚴重に云聞せ船の櫓及び楫等を皆盡く取放たせて遙の山へと運せらる是韓信か囊砂背水の謀に同じく諸軍に必死を示さるゝ處なり

森嶽合戦并吉田清内軍使之事

翌れば二十四日有馬に陣し居たりける佐嘉勢此の由を見るよりも薩州の後詰の勢は森嶽に打出たるそや敵の小勢何程の事かあらん一戦に打散してすてよやとて龍造寺隆信の中軍小河武藏守信貫納富能登守家理以下其日の己の刻計りに沖田曠を打過て眞一文字に討てかゝる此森嶽と云けるは島原の古城にて東は海邊濱を廻り西は高山嶮岨にして中路一筋ありけるか兩方は深田にて駒の頭も見えぬ程なるゆゑ勢を分へき様もなく只一行に押向ふ薩州勢は態と小勢の如くに見せ寂り返つて居けるか敵を間近く引受け時分は能そと云程こそあれ一同に鐵炮をつるへ放しに放ちける只一筋の狭道沓の子打たる如くに群りかゝる勢なれば

なしかは虚矢の有るへき眞先に進む兵とも百七八十人か程將基(載)倒をする如く犇々と打倒され續て掛る者共忽ち是に辟易して皆背をくゝめて進み得ず大將隆信遙に是を見て先手は何ゆゑ遲滞しけるそ急き見て來るへしとて使番吉田清内を指遣はさる吉田先手に馳行て何故に進み兼ねるそ急て攻蒐らるへしと大將の仰なりと云渡す軍監勝屋勝一軒是を聞き此所切所にして左右は皆深田なれば味方の進退自由ならず的になつて多く討れ候へは急に蒐らん様もなし但討死せよとの仰なるかと云ければ申にや及ひ候と云捨て馳歸る是をかし吉田か無功なりける故吾か心にて先手を進めけるとは云ながら隆信の運命盡ぬる處の驗なり勝一軒聞も敢す血眼に成て先陣の小河武藏守信貫納富能登守に向ひ大將既に討死を進め給ひぬる上は術も備も入り申さず只無二無三に攻蒐つて皆討死をせらるへしと云ければ小河納富云ふにや及ふ聲花なる軍して見せ申さんと云儘に采牌をふり士卒を勇め眞先に進ければ諸勢何かは怵ふへき勇氣炎の燃るか如く矢炮をいとばす兜鍪の鏝を傾け鎧の袖をゆり合せ手負死人を乗越乗越曳々聲を出して森嶽の麓まで攻寄る大將龍造寺山城守隆信は三陣に指つゝひて寄られけるが如何なる思慮か有たりけん後陣に軍使を遣して備へを操替られしかは跡へ先に入り替り備へなたちて亂れ合ふ

隆信旗本合戦并鴨打新九郎忠死の事

島津中務少輔家久是を見て折こそよけれ早蒐れよと大鼓を打せて下知せらるれば隼り雄の若者共面も振らす撃て懸り火出る計りに相戦ふ兼て相圖の事なりければ伊集院右衛門大夫

東の方の森陰より伏兵を同時に起し員を吹立攻か、れは新納武藏守忠光は西の方の森中より関を合せ香象の波を踏て大海を渡る如くの勢にて隆信の後ろ備へに撃て蒐り伊集院と新納か勢東西に相當り南北に馳通り取返して又蒐入り追立追立攻たりける程にいと、騒き立たる後陣の勢敵の勇偉に氣を奪はれ日に日あしの旗を北へ南へ漂ふと見えし後陣同時に崩れ立つ新納伊集院北る勢には目も掛す大將隆信の本陣に打てかゝる隆信の旗本にて三法師と號せしは馬渡賢齋成富立意高木泰榮四本鎗と名の高かりしは百武志摩守兼道成松遠江守信勝圓成寺美濃守江里口藤七兵衛なり是等七騎の輩は數度の武功を顯し勇名を九州に振ひし者共なりければなしかは少も疼むへき我々か運命も是迄にてそあるらん潔く討死して大將の馬前に骸を曝し厚恩を報すへしとて僅の勢を引まとい勇猛邊を拂て控へたる正中へ破て入り弓手に側め馬手に背て四武の衝陣摧堅七縦八横千變萬化大山も崩れ坤軸も碎けよと十文字にかけ破り八文字に馳通る去れ共後陣を敵に斷切れて入れ代る勢なければ大剛の者と云へとも其身金鐵ならされは盡く戦ひ勞れ此彼にて討れにけり龍造寺隆信も大薙刀を打振り蒐入蒐入數回戦はれけるか宗徒の近臣等多く討死しけるを見て今は早是まてなりとて馬より下り床机に腰を掛られける係る處に川上左京亮久堅其勢三百餘にて是こそ敵の大將より引つゝんて討取と喚き叫て攻懸る隆信の馬廻りの兵四十人計早晚まで命を惜むへき一業所感の我々か討死するを見よやとて驀直に成て相戦ふ去れ共味方戦ひ疲れ叶ふへき様あらざりければ隆信寵愛の兒扈從鴨打新九郎隆信の前に畏り敵の勇機盛んにして味方悉

く討死仕り助けの勢なく候へは御運も早角と覺え候願くは姓名を御免候へかし然らば某御一族と名乗討死仕候はん其間に心靜に御生害を遂らるへし某か父は陸奥守母は龍造寺家の胤棘にて候へは御許し給はるへしとを望みける隆信莞爾と打笑ひながら雙眼に涙を浮め手つから小刀を以て新九郎か前髪をふつと切り汝は早く雜人原に紛れ此所を落去て讎を報するの謀を巡すへしとろく落よとありければ鴨打こは仰せとも覺えぬ者かな政家公を始め進らせ御賢息多く御坐候へは本意を遂させられん事は程あるましきにて候早々許させ給ふへしと勇むる眼に泪をばら／＼とを流しける隆信も其志の切なる事を感じ此上は蒐も角も計ふへしとありければ鴨打大に悦て郎等八人相從へ川上か前にか出豊筑肥五州の太守龍造寺山城守隆信か一族龍造寺新九郎藤原の信村生年十六歳若輩たりと云へとも當家の手なみを顯はして汝等か武運傾んする時の最後の手本見すへしと咄と喚て蒐入れは郎等釘本竹本江口西島菅津以下我劣らしと蒐入て死狂ひに相戦ふ川上か勢是を真中にをつとりこめ火出る計りに戦て一人も残らず討取りにけり

隆信最後井江上家種勇戰之事

斯て川上左京亮久堅山城守隆信は何所に居られけるやらんと眼を賦り見る處に爽かによらうたる武者一騎床机に腰を掛ながら四方を白眼て居たるあり是こそ敵將隆信よと見てければ一散に馳來り大將とこそ見まいらすれ御首を賜らんとを喚りける隆信已何者なるを大將の首取る法を知たるやとありければ斯申は島津修理大輔義久か家人川上左京亮久堅と申す

者にて候大將の首をは取得ましきと思召し候か去らは手なみを御覽せよとて面も振す突てかゝる隆信血眼をくつと見開き大長刀をひらめかし躍りかゝられける程にさしもの川上其勢に氣を吞れ覺す後ろに引退く其隙に隆信扈從田中善九郎に介錯せよとありければ承るとて介錯し其刀を取直し己か喉に突立うつふしに成てを死たりける隆信今年五十六歳一度釋門を出て法衣を脱て甲冑を帶せしより以降百戦の功を全ふせられしかども一戦の敗軍に骸を路邊に曝されける哀れなりし事ともなり夫合戦の習ひ時の仕合せ變化不可計とは云へとも隆信四萬餘騎の勢を以て家久の三千餘騎に打負し事は後陣のつゝかぬ故なりと評する族ありとは云へとも其實は天運の然らしむるに依なるへし其故奈何にと尋るに去る永祿十一年戊辰六月隆信筑後を攻んとして加勢を彦山衆徒中に乞ふ衆徒異口同舌に演て曰く抑我山と云へるは十方檀信助成の力なるに依り天下安全諸檀繁榮長久の祈禱として年々四百八十の講席を勤め行ひ候なれば援兵の儀恩免に預り度由申けるを隆信大に怒て我催促に従はざる輩は豈是敵にあらすやとて多勢を率し押寄せ山の麓に陣を取る山内に少貳川さて今にあり隆信を少貳と云ける故なれば也衆徒は我山此時に到て亡ひん事を哀み嗟き命を鴻毛よりも軽くして防ぎ戦ひたりしかは容易く攻亡はし難しとて歸陣をなしけるか重て勢を差遣し攻たりけるに神奴防くに堪かねて大權現の御輿を肩にし筑前國上坐郡黒山山より西五里にあり四方七里の神領の内也其後亂世なる故に隣國より押領せられける事なりと云ける所を志し小石原山より二里まで走りけるに猶も敵兵圍みぬれば免るゝ事得かたくしてとある松樹の下にて神輿を降し奉り山の一臈押肌ぬき腹かき切て血を以て天に祭りて龍造寺家を調伏し

神輿を火にし者共も共に投して死にける御輿松さて今にあり斯る故にや龍造寺五州の太守なりしかども此一戦に身を亡しぬる事神罰の故と覺ゆる成松遠江守信勝大將討死し給ひしと聞よりも今は何をか期すへきと馬を飛せてかけ出る是を見て嫡子又兵衛尉郎等成松十郎兵衛同大善柄長左馬允小宮源右衛門以下數十人の兵共死を争て切て入り四方を拂ひ八面に相當り思ふ程攻戦て人手に掛んよりはとて父子同し枕に腹搔切て伏ければ郎等共も思ひ思ひに討死す隆信の次男江上下總守家種四男後藤善次郎家信は濱の手に向ひ戦ひけるか父討死と聞よりもこは口惜き事ともかな今は是さてなるそとて黒烟を立て切て入る下總守家種は九州無雙の大力なりければ鎧は鐵を以て厚さ五分にきたわせたるを着太刀は四尺八寸脇指は二尺六寸棒は深山樫の木を八角に削り手元計を圓めたるに鐵を以て筋金を伏せたるを誠にかろけに提て群る中へ割て入り向ふ者の眞向馬の諸足平頸當る所を幸にはらりはらりと薙倒すは天狗の所爲かと怪しまる敵も十方より取圍て射取んとは仕けれども鎧よければ裏かく矢もなく大剛の人なりければ近ついて一太刀合せんと云者もなく家種棒を打捨て大身の鎧の柄は鐵を以て延付たるを提け又敵陣にかけ入て雷の鳴落るか如く大聲をわけて馳廻られたりけるか馬蹄に鐵を踏立て働き得さりける程に田の畔に下立る薩州勢是を見て我討取んと一度にばつと取圍む家種からくくと打笑ひ用にも立ぬ蠅武者共蜂蠶の毒尾もなく又蚊蚋の利背もなしと眞先に進む兵三人一處に突倒し續てかゝる者共を左右の深田へ拂ひ込む時に後ろより参りさうと討てかゝるを意得たりとて鎗とり直し二人を一つに突貫き中にすん

と指上けくるりくると振廻し深田へ鎗を抛こみ猶も進む兵をかゝ纏て押伏せ首ふつと擦切り虚空に向て抛上ける其怪力たといひ十樊噲百鳥獲か出来て同時に討てかゝりしともたまるへきとも見えざりければ薩州勢身の毛もよたち四方へばつと馳散て遠矢に射たる計なり係る處に家種の家臣執行越前諸岡安藝等馳來りこは物か付て狂はせ給ひけるかや大將既に討死を遂させ給ひぬる上は御身を全ふましゝて本意を達せられんとは思召され候はずやと家種を誘ひ引き退き鶴田久地井上に家種家信を守護させ諸岡執行取て返し追來る敵の中へかけ入て主従五十餘人皆悉く討死して泉下に忠を盡しける志こそ優しけれ

江里口最後并朝重彈助武勇之事

江里口藤七兵衛は如何にもして主君の讎を報せんと頭の髪をふりみたし首一つ提げ薩摩武者の眞似をして龍造寺安房守信周と組て首取て候なり實驗の爲に大將の御前へ參候間開て通され候へどて大勢の中を押分々々行きけるに思ひどかむる者なければ家久馬上に在るを見てあはひ一間餘りに近付より件の首を抛かけ走りかゝつて扱打に丁と切る餘りに心早くして太刀間をや見過りけん家久の高股に鋒を切込む所を近習にありける兵共大に驚き十方より取圍む家久見てけなけなる勇士なり其れ助けよとありしか共早斷々に切碎かれ野徑の露と消れとも譽れば後世にぞ残しける隆信の舍弟兵庫頭長信も一向討死すへしとて思ひ定めて進みけるを一族下總守康房是を諫て落して後引返し討死す後藤善次郎家信の家人朝重彈助も死狂になつて戦ける程に敵に多く相當り濱の方へと驅出て見れば爽かに鎧たる武者

一騎從者七八人にて馳來る朝重願處の幸なりとて一文字に討て掛りたりけるか從者か放つ鉄炮にて横腹を打透さる去れとも是を事ともせず馬上の敵に走りかゝつて佩楯の外れをしたゝかに丁と突くつかれて馬より落る處を透す無手と引組て上を下へと柵合けるか終に朝重上になり我は是後藤善次郎家信か家人朝重彈助と云者なり御邊は誰と問ければ此の期に及んで名乗るへきにはあらねとも汝痛手を負なから斯剛強の舉動感するに餘りわれは我名をは顯はすなり有馬入道仙岩か老臣久野彈正と云者なりとて首を取へしと云せも果す搔切て追來る敵を追拂ひ徐々と引ける鍋島加賀守直茂は山の壇の大將にて猿亘越中守と戦けるか隆信既に討死すと聞より今は何をか期すへきを敵將家久を討捕すんは生て再び歸るまじきと猶も進んで蒐けるを老臣等大に諫め直茂の乗たる馬の轡を各々取て引退く猿亘か軍兵共是に氣を得て追かゝる鍋島平五郎茂里同大膳綾部右京南里助左衛門増岡權右衛門犬塚惣兵衛北島治部木下四郎兵衛中野隼人水町彌太右衛門小森源右衛門など云ける宗徒の者共返合て防戦す鍋島平五郎茂里勇を振ひて戦ける程に猿亘越中守か嫡子與次郎と云けるを討とは云へとも日は早や暮ぬ雨は降り出ぬ善悪も見え分ぬに敵兵前後を遮て此に顯れ彼に群り矢炮を放ちかけること雨の降より尙繁からしかは手負討るゝもの數を知らず

田澤成鍋島家臣并隆信の首送葬之事

既に見惠町を過ける時には士卒悉く敗走して主従わつか十騎計りに成にける漸々として直茂多比良の浦に着き船を求めたりけるに田澤大隅と云ふ海賊の大將來りて某か船に召れ候

へ送り進らせんとて一番に押よする直茂運は天にありとて頓て船にそ乗りける田澤は有馬家の者なれども痛しくや思ひけん柳川へと梶をとる中野式部是を疑ひ大隅かそはに居よりてあれに見ゆるは何の山此方は何と云所と通夜方角をさし若有馬の方へ漕行なは差違へんどの巧なり尙も心元なくて如何に田澤殿御邊の嫡子源六殿いまた妻女の候はすや若さもあらは某か娘を嫁せ申さんと云ふ田澤別心なき故に忝しと領掌して直茂へも禮をのへ船底より酒肴を出し人々にも勧めける大隅か直茂の家臣と成て仕へけるを主従の約の始なり程なく筑後の小防浦に着しかは人々を舟より下ろし田澤一忠なくんはとて肥後國口の津に船を浮へ敵船遅しと待處に薩州の船奉行阿久大炊と云ける者來りしを願ふ所の幸と頓て押寄せ相戦ひけるか大隅痛手を負ふと雖とも嫡子源六終に大炊を討捕て勝利をそ得たりける後藤善次郎家信は神代に屯して有馬勢の機に乘し來り侵すを追拂ひ堅く守りて居たりける其餘の勢は皆悉く引退く斯て島津中務少輔家久敵を討事四千三百六十餘級思ひの外の大利を得たるとは云へ共江里口か爲に痛手を負ひたる故に暫く島原に滞留あり其後ち八代へ凱施して隆信の首を義久の實檢に入れは義久情ある人にて即ち町田を使者として是を佐嘉へと送られける同四月上旬町田榎木津に着て斯と云ひ入たりければ龍造寺政家の命を請大隈安藝守葉次郎右衛門尉出向ひ先づ隆信の首を拜し生たる人に云ことく謹て申しけるは鍋島加賀守直茂旨趣を申含め是まで指越候夫武將の戰場にのそんて命を殞事古今珍らしからず候へとも此度の敗軍は兼て直茂か諷諫仕りしを許容坐さゝりし故にて候はすや去るに依て

味方若干討死仕候直茂も共に戦死仕るへき身の斯存命仕候ひけるは政家を補佐し速かに薩州に亂れ入り耻辱を雪んか爲にて候なり今御首龍府に歸り給はん事何爲にて候そやと云終り次に使者町田に向ひ義久殿の御芳情淺からず候へとも受納仕て何の益なき事にて候と云ひすてゝを歸りける町田すへき様なくして又首桶を昇さしめ八代に歸りけるに高瀬川を越んとしたりける時俄に此首重くなりて大磐石の如くなりければ諸人奇異の思ひをなして怖驚すること甚しく是只事にあらす先年島津と龍造寺と肥後を二つに分領せられしに此高瀬川を以て境とせられける故に隆信の靈此封疆を越しと思ふ心ならんとて八代に云ひ送りければ頓て奉行を指越し至阿彌陀佛と云時宗の僧をして願行寺にて送葬の儀式執行ひ墳墓を築れける

豊薩軍記卷之四終

豊薩軍記卷之五

稻富與甲斐相模守合戰之事

さて世の間の事の泄易きに至ては迅箭の天をすき衝風の草を刈るよりも猶疾なるか如しとかや甲斐宗運か卒しぬる事を深く包み藏すと云へとも終に其隠れなかりしかは天正十二年十月薩州の新納武藏守則ち稻富新助を大將として其勢三千餘にて御舟の城より一里西花の山と云所に出張せしむ甲斐相模守是を聞敵の心を察するに父宗運卒して今は敵する者なしと思ひ侮て僅の勢を差越つらん大將は稻富新助と聞く此度の軍に於ては父宗運か名をくたすまし阿蘇大明神も照覽あれ今日の合戦に敵を多く討捕すんは再び城へは歸るまじきと云て軍兵を相調へ兄弟三人同陣にて一千五百を二手に分つ時に藏人助兄相模殿は大將なれば後陣に控て軍の下知をし給ふへし我等先陣せんと云ふ三男四郎次郎か云く藏人助殿も相模殿に相隨て軍兵の下知をし給へ某先陣仕らんと云ふ既に争ひ出来て時刻漸く移りにければ相模守曰く面々の所存尤な、何も棄へき處にあらす更に三備にすへしとて一千五百を三手に分け各逞兵五百人を相從へ花の山の陣へ三方より押寄せ山をも撃く競ひにて曳々聲を出して討て蒐れば稻富か三千餘の勢二町計追立られ漂ふ處を猶しも急に攻懸りて屈強の兵其數多く討捕ける稻富かなふましとや思ひけん一千有餘の勢を繋て既に引んとする處を四郎次郎か五百餘人横合より突て蒐れば稻富陣を成しかねたるに相模守藏人助兩手を以て押かゝり勢にのりて攻たりければ稻富か勢またゝか討れて卒に引退きけり相模守は御舟に還

りぬ今度の働き最前の辭に違す勝利を得し事誠に父宗運か功を繼たる人なりけりと感讚せざるは無かりけり討捕る處の首級を小荷駄七十匹に付け白石大學兵衛を使者として豊後の國岡の城主志賀親教まで遣しければ親教是を曰杵丹生島へを送りける宗麟感悦不淺誠に相模守は宗運か基業を繼て父に劣らぬ者なりけるとて大に稱歎し實験をは義統に命られ使者白石大學兵衛を召出し去る天正八年四月二日饗野合戦に相良義陽を討捕し趣き此の般又花の山軍の様委く尋ね聞れて大學兵衛に鞍置馬一疋并に薙刀一振相模守へ左文字の太刀一腰感狀を添送られける其文に曰く

於花山之地合戦之次第并目錄委細往進之趣得_レ其意候其方以小勢討捕_レ大敵剩_レ頸五百餘到來令實験畢宗運以來每度被_レ遂忠戰被_レ勵大功之條神妙之至也因茲太刀一腰差遣候猶追而可賀之候恐々謹言

天正十二年十月廿日

宗麟

甲斐相模守殿

稻富與高森伊豫守合戰之事

爰に同國阿蘇郡に大友麾下の臣に高森伊豫守と云ける者あり數度の勳功かくれなく忠義尤も他に異なりける良將也先年同國南關小原鑑元か逆心顯れて騷亂に及へきを早速誅罰せられけるも此伊豫守か忠義に依し故にてそ有ける去程に稻富新助武藏守か計ひとして花の山へ出張し相模守と對陣して終に打負け引退き鬱憤更に晴やらす重ねて武藏守と相議し此

般は高森伊豫守を攻亡し已前の耻辱を雪んと欲せし程に新納か勢も少々加つて其勢都合三千餘同年十二月十三日に伊豫守か城へ押寄せ山の手陣を取て頻りに矢炮を放ち掛けたりければ城中よりも打出す姑くありて薩州方の先手の野郎七八百曳や聲して押寄せ塙裏に付と均しく早や乗越んとせし處を内より鎗長刀にて突落されて死るをは則是を足代となし猶乗越んとしたりける去れども伊豫守爰を敵に破られては云甲斐なしと諸卒を諫め緊く防ぎ戦し故残りすくなく討なされて引退けは後陣の兵又入替て攻立る城中も荒手を以て息をもくれす逐出し逐入られ罈本に火を散し命をかきりと攻戦たりし程に兩陣互に氣疲て相引に颯と引き人馬の氣をそ扶ける明れば十四日のまだ東雲も曙やらぬに惣軍勢只一揉にと寄來る城中勇氣を顯し防ぎ戦とは云へ共多勢に無勢殊に要害堅固ならさりければ追手の門を破られ二の丸まで込入たりしを浸浸として防ぎ退け甲の丸に引籠りぬ伊豫守思惟して先づ此般は降を乞ひ後日に謀を運し本意を達すへきなりと思ひければ矢留を乞ひ使者を以て武士の習ひの難^ニ黙止 一旦の勇氣を勵し敵對申せし事とも恐入候き已往の罪を赦されなは當城を相渡し貴命に隨ひ進せて宜く勤仕致すへしと云送りければ稻富則ち其意に應し圍を解て引退く其後高森伊豫守資財雜具を悉く並ひの里に持運ばせ城を開て出ければ稻富やかて入替りにけり次の日伊豫守自ら酒肴並ひに種々の土産を調へ從者兩三人にて來り昨日の恩を謝し且又一獻を勸め進らせ猶重ての約を固くせん事を冀ひ參上仕りし由申入ければ稻富悦ひ請し入れ饗應はなはた淺からず酒も漸く終りて後伊豫守打どけて強く攻られ候ひし時

は防ぎ兼たるなど云へは稻富大剛の者共を籠置れ候し故此方にも死傷多く御座候甲の丸を攻候は、終に乘取申すへけれども某か者共大半亡ひぬへきに足下の御芳志に依り其儀なしとを申しける其時伊豫守彼に才智のなき者なりと思はすへしとて態と浮々としたる顔にて島津義久公隣國より次第々々に秘計をめぐらし餘國の諸士に内通し一味同心ありて後豊後國へ御馬を出されんどの御巧なるの由承り及候勇士の習ひ一張の弓の弦にあまたの名を付け昨日の矢先に今日は又引かゆる儀にも候ひぬれば物の數にはあらねども稻富殿の御組に具せしめ給へど云ければ義久其儀は候はす肥州は隣國なる故に武藏守か計ひにて往々計策ありとは云へども眞實志しある士はすくなし殊に豊後國は宗麟公座すなれば思ひも寄らざる事なりと云ふ伊豫守曰く去る天正六年の冬日州高城にての戦に豊州勢多く討れ敵味方の損亡幾許多にて候や稻富曰く軍終て中務死骸を讚嘆して曰く武士の強弱は戦死に見ゆる物にてあり勝負は時の仕合なり豊州勢は悉く敵陣をまくらとし味方に向ひたるはなしと申され候又義久の下知として吊ひありける其時の沙汰として敵味方六萬六千餘なりとこそは申候なれ伊豫守大に感し能こそ尋ね候ひてかゝるいみしき金言を承る物かな我等ときは何となく死骸とはかり存すへきに左様に心を付けられては骸の上の面目にて候ひけると云終りて宿所に歸りぬ其後一族高森右京進と近付某城を明渡せし事定て未練と思ふらん只是彼を謀て討んか爲なり汝密かに豊後へ行き志賀道擇に我か旨趣を演へ加勢を乞て來るへしと云ければ右京進則ち岡の城へ到り志賀掃部助を以て達す其文に曰く

熊以使札得其意候抑此表之儀從薩州到方々諸士依内通被申通多分逆心之企相聞候國中侍如此之振舞不及是非儀也剩頃稻富新助方於某城以大勢寄來候間雖勵一二戰勇氣彼者多勢是者無勢之故乞降參下城仕有之事候聊以我等非臆病之儀爲亡彼之武略也且爲國家且爲雪吾耻辱以彼是御志預御加勢可忝候委曲使者可得御意候恐惶頓首

天正十二年十二月廿七日 高森伊豫守

志賀兵部入道殿

道擇是書を披見して家中七組頭を志賀掃部助後藤遠江守進肥前守中尾伊豆守阿南八郎原田伊賀守大森大炊助等を召寄せ今度肥州高森か城に薩州勢發向せしに付て伊豫守より援兵を乞ひ來る誰々を如何はと差遣して然るへきやと異見を問ひたりけるに七組頭いかはとなりとも御誼次第と申ければ去らは多勢を遣して薩州勢を悉く討捕しめんと議定既に相究りける處に道擇の嫡子志賀太郎親次生年十六歳進出で申けるは今度高森へ後詰として大勢遣はされん事然るへからす其故は肥後肥前の國までも薩州より謀て心を結ひなつくるの由其隱れなし今度高森を攻る事伊豫守になす敵にはあらず終には豊後を取ん爲なり某遊山の序に敵を討へき謀を慮るに山川の獵漁に相似たり譬へは猪を取には寝たる時に列卒をまわして鹿垣にたつ魚をは綱を遠くまわして次第々々に近く寄す始めより近くに置けば魚驚ひて多く取る事なりかたし薩州は豊後を取ん謀に大まわしの綱をまわすとはゆ今高森を攻る事

は網の障りとなる石をのくるにてぞあらん二三箇年の内に義久當國へ攻來らん時肥後に大勢を遣はされ自然討亡はされては味方の弱り行く末に大敵を待つ折節なれば人數を全なされんことを然るへく存し候なれと理非明白に申ければ父の入道顔色嬉けに吾も左様に思へとも薩州勢三千有餘も有ける由申來るに依てなり汝か云ふ所尤の至りなり面々も左存るかと思ければ七組頭一同に若君いまた若年に坐せとも加様の金言を仰せ出さるゝ事比類なき事ともなり成人の後は九州無雙の名大將とも成らせ給ひ候はんと感しける道擇曰く加勢二千程とは思へとも親次か諫に任せ雜兵共に一千五百人に相定めん大將には志賀掃部助朝倉土佐守大森彈正明早天に打立て高森勢に相加はり共にはかりて致すへし猶委しき事は使者其意を得てを歸りける高森への返翰其辭に曰く

預使札其表之様子令承知候而依薩州之内通肥州之諸侍被存疎意由是非之外候多年郡役等被免置忘重恩今更別心之企未練之至也甲斐宗運存生有之如此有間敷事候野心之輩之儀可爲御誼次第候隨而稻富方狼藉之刻兩日被逐合戰爲武略下城之由御尤存候順義之者御忠節之段借言上可仕候次加勢之儀被仰越候爲指儀御坐有間敷候得共申付候此者共其地所柄不知案内之事候間萬事可被加御下知者也恐惶謹言

十二月廿八日

志賀部入道道擇

高森伊豫守殿御報

斯て志賀の人々は思々に用意して曉告る鶏の聲は何くと白雲のたなひき渡る岡の城また夜

深くも立出る矢猛心や武夫の備へは整々録々として金鐵皆なる玉來タマキの宿を離れていと、猶駒もいばうる篠藏や騎て心の勇しく勝いる既にあらはれて寄せよ寄せよと云なみの浪野の原を打過ぎて行けは程なく阿蘇の山高根の煙一切衆生の罪にかはりて燃上る神の姿とどうとくも雲井の虚にれのつからまはし見上る邑の名の高森にこそ着にけれ志賀掃部助軍勢を傍に忍せをき右京進と相共に密に伊豫守か館に到りて評商す高森か曰く直に城に押寄せなは此方の死傷多かるへし夜半過る比をひに同時に寄せて一方をわけ焼討にするならば必敵開たる方より走るへし其時味方案内は能くまぬ搦手より押かゝり思ひの儘に討捕るへしとそ議したりける夜討ちにかくる事なれば豊州勢はもかり竹に角取紙を付て相驗の腰指物とし何そと問は其そと答へよと相詞まで約諾し一の伏には志賀の軍兵一千餘人の伏には高森か勢を置き次には又岡の勢後藤大學佐藤右京大塚和泉後藤市之助此等四人を先として其勢五百餘人なり伊豫守兼て用意仕たりけん投火炬投火矢等を持せつゝ十二月廿九日の曉方密に城に忍ひより一度にばつと投入たり城中大半草屋なりければ忽處々に火移りて四方八方燃上り烈焰天地を焦しけり城兵消さんとするに力なくもたへ苦む折節に関の聲を揚げたりければいと、鼎の沸か如く周章さわき立つ去れとも稻富屈強の勇士にて門を開て討て出る後藤大學是を見て血氣盛んの者なりければ早切かゝれと勇みけるを佐藤右京大塚和泉守曰敵一二の伏せの間に往かざる先きには必ず軍は仕給ひを今まはらくと制しつゝ五百餘人の兵を傍に忍はせ置きまつまりかへつて居たりけるか暫く時をうかゝつてすはかゝれよと

云より早く先陣後陣同時に起て中につゝんで只一揉に雌雄を茲に決せんすと初めの火の手の五百人も伏せ勢に相加つてを攻たりける稻富か兵共命を鴻毛よりも軽くして討るゝをも顧す主の馬前に蒐出々々必死と成て戦ひける去れとも前後より狭れし事なりければ叶ふへき様あらずして一千八百有餘人枕を並て討れにけり稻富今は爲方なく既に角よと見えたりけるかさすか武功の達人變化自在の者なる故わつかの勢を引縈ひ横に切て圍を出虎口の難をそ免れける岡方手負多しと云へとも戦死の者五六人には過ぎさりけり其後志賀の人々は高森に入城させ悦ひの凱歌を唱へ岡の城へと歸陣をなし志賀道擇の前に於て大森彈正軍さの始終を委細に演説す志賀掃部助申けるは此度の軍に大なる不覺を仕候薩州勢をは多く討しかとも大將稻富を討もらしぬる事を無念に存候なれ道擇それは苦しからず軍は必ずしも敵を討たる計りを勝と云にはあらず追散せしも勝にてあり高森か武略に依て大利を得たる珍重さよとぞ悦ひける其後伊豫守より使者到來して援兵の禮謝あり右の趣道擇より宰相義統へ委細に注進したりしかは感悦甚た淺からずして道擇并高森へ感狀をそ賜りける伊豫守時の面目世の聞へいよゝ美名を顯せり其後天正十四年の軍起つて肥後國には島津義久の舍弟島津家久亂入す其比志賀太郎親次より豊後の國へよひ越れ松本と云處に居らしめ翌年薩州勢引退て後肥後の國へ還住せしむ肥後國中に於て始終共に別心なく大友家に對し忠節を勵しけるは甲斐宗運逝去の後高森伊豫守一人なり誠に武士の鑑とはかゝる人をや云ならん

志賀道翁勇力并日羅來朝之事

志賀の家の曩祖を竊に考るに建久年中に近江國志賀の郷に安保アホと云ひける者あり其比大友能直豊後の國を頼朝卿より賜りて鎮西へ下向の時安保能直に従ひ下着し末葉累世を経て後柏原院(第五代之主)の御宇に當て志賀道翁と云者あり剛強無雙の大力なり人舉て目を驚かさすと云事なし豊後國志賀と云處に居住を成てありけるか大永五年乙酉の秋の末大力の望み有て同國緒方アサキ阿西の不動に丑の時詣をそまたりける此阿西の不動と申けるは百濟國の日羅上人第六番の建立坐像の靈佛にて其長八尺有餘なり堂の前五町餘りも有るらん大河流れて一搔淵と云深淵あり石泉漲り碎けて音冷しく怪岩峙ち立て佳景備れり不動の窟は魔所と云へり去れとも道翁丑の刻毎に彼の深淵を遊こし寶前に跪き頭を傾むけ他念なく丹誠を抽て肝膽くたく力乞感應などかなかららん一七日に當る曉隔子の内より大なる掌を道翁か頭への上に差覆ひけるを取て引とも動すして消失ぬ此告に力を得彌歩を運しかは二七日に滿る夜又右の如くに差掩ふ是をも執て引けるに思ひの儘に引動かしぬれば失にけり道翁諸願満足して深淵を游渡て歸りけるに蹈む所の大地忽に裂て宛も深泥を行くに均しく却て不自由に覺えける去るに依て力を申滅すと云へとも殘る處尋常ならず或時筑紫生寺の不動より東なる岩壁に指にて大木山と書すあたかも彫穿つか如し又堂の柱に圓なる石を押し込み置其堂破壊して今はなし岩壁の文字は今にあり時の人鬼志賀とを申ける大友修理大夫義長のとき天文二年癸巳に肥後國菊池義宗五萬餘の勢を率して筑後の國に出張す義長道翁

を指し向けらる僅か五千餘の勢なりしかとも件の鬼志賀向ふと聞て菊池肥後國に引還しぬ是則不動明王の威徳なり其後大友菊池和睦せり道翁嫡子しやうしゆん其子河内守親盛入道道種其子河内守親安入道道輝其子安房守親教入道擇其子志賀太郎親次數代武勇の譽あつて其名天下に隠れなく大友家譜代の忠臣として心變せず大友義鑑義統も志賀佐伯を以て股肱と思ひ給ひけるにや大庄數十箇所宛行ひ交りを厚くせられけるとを聞えける抑阿西の不動を彫刻し給ふ日羅上人來朝の由來を委く尋るに百濟國の人なりけるか内典外典に精博なるのみならず神變奇異を具足して芳聲の高きこと倭國に隠れあらざりければ敏達天皇紀押勝を遣して上人を招かせられけるに國王才を愛して徵に應し給はねは吉備羽島を遣して痛く督責せしむるに依り終に其意に應し給ひぬ斯て上人羽島と共に洋溟海上遙に渡りて敏達天皇十二年癸卯夏肥前の國に着津あり其より豊後國大野郡に到て暫く錫をとめ給ふ或時一刻計りの間に豊後の郡庄残りなく廻り廻りて諸所の堂塔伽藍村々の文字まで書あらわして見せ給ふ終に大野の郡の中に於て級岩翠嶂の靈城を七ヶ所擇み求て石佛の最新なるを建立ありける一番に大方と云る所に處々屏岩百尺はかりなるに巍々たる坐像の不動三尊を彫刻せらる後光の形ちあさやかにして雨降んとする時は火焰の色を増とかや岩の下には清冷の井を設け前には池水湛々たり中に一つの島ありて庾嶺の梅も爛熳と猶も色香の盛なる溪深くして半天の月も野水に移りては玉兔蒼瀾に浮ひ金魚桂花に遊ふらん峰の松風颯々として法音宣流の聲たへす川の激湍洋洋として長く無明の夢を覺す誠に舊染の塵を洗ひ無量の罪

をも消しつへし靈地の佳景辭にも演かたぐ筆にも盡しかたかるへし窟の内にも不動の像を彫刻して傍に日羅の壽影あり岩を穿ち柱を立虹梁を渡して大厦高堂を構へらる號して筑紫生寺泰山普明院今の筑紫山普光也と云へり二番岩屋寺三番法乘寺此の三所は四番光嚴寺緒方の庄知多に有五番大禪寺同所六番阿西寺同所七番栢寺同所後來村老傳へて云く七ヶ所は鬼神に命して一夜の中に成し給へるとそ何れも飭飾金を鏤めて丹青の妙術なる事神通妙用の手に依すんは如何そ是をなし得てん既に經營畢て後七ヶ所同時に供養あるに上人其身を七つに分各々導師となり給ふ如何なる權化の人やらんと見る人奇異の思ひをなし聞者希有の心を催す不思議と云ふも餘りあり是のみならず豊後の内諸所のあらゆる石佛も皆是日羅の作とかや其より幾程あらずして都に上らせ給ひしかは館遇の渥きと珍膳珍菓種々の饗應淺からず懸て參内ありければ叡慮殊にうるはしく往復問對ありにける時に聖德太子十一歳微服して館に到らせ給ひけるに上人太子を指て神人にて坐すなりと云て即ち起ち五體投地し再拜して半偈を説て曰く敬禮救世觀世音傳燈東方粟散國と云畢て身光を出されければ太子も亦眉間より光を放たせ給ひつゝ互に歡談し給ひて太子に白して宣く吾命久しからずして將に盡んと欲するなりとそ太子人に對して宣く日羅は元來聖人なり我南嶽に在りし時彼は則弟子なりしか常に日天を拜せし故に依り身光ありとそ宣ひける其後日羅攝州の劍尾山を開基し給ひけるか幾程なくして新羅人來て是を刺殺しにけり斯る權化の身なれども宿縁免れ難きにや刃の難に遇給ふ況や世人にをいてをやかりにもあたをなす事なかれ懼るへし慎むへし

薩州勢再肥後出張之事

去程に島津義久は龍造寺隆信を一戦の下に討捕て其威遠近に震ひければ是勢ひに九州を打從へ大友をも亡して年來の遺恨を散すへしとそ議せられけるこれにより先づ阿蘇か與黨及び隆信か殘孽を除くへしとて去年八月下旬より島津中務少輔家久に一萬五千餘の兵を與へて肥後國へ出張せしむ爰に益城郡小熊野の花の山と云所に小城あり先年相良義陽と甲斐宗運對陣せし時島津方より此城を構へ御舟を眼下に見をろして其剛氣を制せんとて絹脇刑部を籠置たりしに宗運一世の内は如何思ひたりけん此城を其まゝにして置けるか宗運卒して後嫡子相模守親秀堪へかねか程の小城を目の上に置いていつ迄氣を屈すへきとて弟の藏人助惟義を遣しこれを攻させけるに城中無勢なりければ一戦に攻付られ城を開てを落行ける其後は御舟より人數を少々入置けるに今年天正十三年新納武藏守先手として宇土の者を案内とし此境を打廻り地理を委く見すまして謀を設け先人數少々引分け稻富新助を將として此の花の山の城を攻させたりけるに案の如く御舟の城より人數を出し後詰して散々に攻戦ひ卒に稻富を追散し首級を多く討捕て凱旋せんとする處に武藏守兼てより思設し事なりければ五千餘人を引牽し潜に御舟へ押し寄せて鬨を作り勢猛に一人も漏すなど揉に揉てを攻たりける城中の勢は大半花の山へ向ひぬ僅に残る者共猛勢を引受てすへき様とてなかりければ相模守力なく和を乞ひ剃髮染衣の姿とあり宗立と法號し人質を出して降りぬ舍弟惟義は城へも還り入事を得ずして花の山より直に矢部の城へを落行ける斯りしかは田代堅志田矢

部津守木山の城々一戦にも及ずして皆降参をそしたりける阿蘇太宮司は數代豊州縁類にて無二の大友方なりとは云へとも家人等如斯に成ぬれば爲方なくて島津と和親をしたりける家久去らは此競を失ふへからずとて其勢二萬餘北地を差て押行けは合志には竹迫藏人親爲山本には内の古賀鎮房城を明て落行ぬ隈部か一家山鹿有動も縁を求めて降参す小代下總守大津山河内守は兼て八代へ内通し麾下に屬しぬ斯て肥後國一圓に従ひぬれば義久又八代へ出張し廳て豊筑へも打出んとす

高橋筑紫和睦之事

筑紫上野助廣門は近年兩筑及び肥前の内にて數郡を領し秋月種實と交り膠漆の如くにして大友に敵をなしける者なりしか當冬俄に心をひるかへして紹運へ和融すへきの由を云遣はす紹運をもへらく廣門もとより豊州齋藤か婿なり屋山中務にも縁類多き者なれば彼此の儀を以て後には變する事ありとも一人にても味方に來ると云へは士卒の心安する間彼か望に任すへしとて終に合体したりければ紹運の息彌七郎統増を婿に取りて娘を嫁はしめける如何なる故に今年心變りをしけると委く是を尋るに龍造寺筑紫は多年斷金の盟を結て尤親切なりけるか隆信戰死の後嫡子政家引替て廣門をは疎くし種實と交り淺からさりける故筑紫是を憤るのみならず政家行末も心元なく思ひければ高橋に心を寄せたるにてそありける是に依て秋月種實獨身となり唇亡て齒寒き思をなし薩州へ使を馳て降参をしたりければ豊前國高橋種冬長野三郎左衛門等も同く島津に屬しける義久彌力を得舍弟島津圖書助歳久

後左衛門尉
改號す 伊集院右衛門野村兵部丞を大將とし肥後の國の勢を授て筑後の國へ打入しむ筑後國中は龍造寺領内なりしかとも隆信討れたりし後勇氣も俱に衰へて數萬の人数を持なから合戦にも及はさりけるのみならず剩へ今年の冬舍弟有田藤五を質として薩州へ出しぬることを歎息けれ

使節下向之事

いでや其比天下靜謐にして萬民一に歸し畿内東國暫く穩かなりと云へとも九州の擾亂猶いまた止さりしかは關白秀吉公聞召し及はれ佐々内藏助蜂須賀彦右衛門尉を御使として仰出されけるは天下悉く予か旗下に屬する上は九州の者共も私の争ひを止め急き上洛すへし然らば本領相違あるへからず若し違背するに於ては征伐せらるへしとの事なり兩人台命を奉承し豊州に下着して大友に御教書を渡し國々の諸士等にも下し與へられける中にも島津義久へ遣はされける書の文に曰く

依勅定染筆_テ候仍關東不殘奥州之果迄被_レ任_ニ 綸命_ニ天下靜謐之處九州事而今鉾楯儀不可_レ然候條國郡境目相論互之存分之儀者被_レ聞召届追而可_レ被_レ 仰出_ニ候可_レ被_レ得_ニ其意儀可_レ然候自然不_レ被_レ相守此旨候者急度可_レ被_レ加_ニ御成敗_ニ候間此返答各爲者一大事之儀_ニ候有_ニ分別_ニ可_レ被_レ言上_ニ候也

十月二日

御判計

島津修理大夫殿

玄旨宗益添狀に曰く

豊後^ト與^レ貴國^ニ御鉢楯之儀^ニ付而關白殿御内證趣承^リ及通以^レ條數^ニ令^テ申候

一近年都鄙被^レ相^ニ靜亂逆^ニ大底屬^ニ靜謐^ニ候依^テ之禁裏儀御崇敬候則被^レ任^テ内大臣^ノ常職^ニ御預候

然者天下以^テ一^ノ叡慮趣^ニ彌御堅固被^レ仰付^テ南北東國被^レ任^テ下知^テ候

一九州之儀而今互^ニ御遺恨不^レ相止^テ所々御相論之趣其聞候然者先被^レ抛^テ萬事被^レ應^テ綸命^ニ和融

姿可^レ然候其時國々境目依^テ理非^レ可有^レ裁判^ニ由^テ面々以^テ御書被^レ仰下^テ候若於^テ無^レ御承諾^ニ者急

度可^レ被^レ及^テ行御内存候強^ク勿^レ論候御分別此節候歟先年太守可^レ被^レ仰通^ニ樣^ニ被^レ仰越^テ候間先内

證以^テ書狀^ニ令^テ申候依^テ御返事^ニ追々可^レ申參^テ也以上

十月二日

玄旨在判

宗益在判

伊集院右衛門大夫殿

義久此書を披見し大に欺^テ曰^ク猿^ト云^ヘる冠者めは尾州にありし時松下加兵衛之綱か草履
をと^リ其後信長と云ふ國賊に付纏ひ今斯る振舞を致すと云とも何ぞ上洛すへけんや當時近
衛殿の嚴命にたも容易は召に應せざる義久を何ぞ木下藤吉なんと云る奴婢雜人等か上洛
せよとは片腹痛き申條かな重ねて申し下すに於ては一々首を刎落し軍門に曝すへしとぞ伺
りける兩使も此上は強て伸ふるに益なしとて都に還り上りぬ九國二島に郡主城主百餘人あ
りける中に大友義統立花宗茂高橋紹運筑紫廣門是等四人のみ領掌をそしたりける其比筑紫

の者とも取々沙汰し申けるは以前尾州半國の領主織田上總助將軍に成て鎮西の士共旗下に
從ひ屬すへしなど云遣したりしか頼て其臣明智に討れぬ今の秀吉は極て筋なき者なるかい
つしか關白になり又我々を臣下とせんなど云ひをこす事の笑しさよ此遠國を征伐せんなど
いは能くも云ひ出せる物かな惣て上方は今日は主となり明日は臣となる手の裏を返す様に
てあるなれば秀吉も信長の如くに頼て亡ひなんする者をとそ申あへり又心ある人はいやい
や亂世には英雄出て天下を治る習ひ此秀吉は其器量寛仁大度の聞えあり久しく亂れたる世
なればなにか又治る時のなからざらん今の秀吉は目立へき大將をやと申す族も多かりけり

浪野十二口合戦之事

島津修理大夫義久豊後の國を攻んと欲して豫め豊州隣國の諸城主に内通を示し同年十月上
旬新納武藏守に大軍を授て肥後の國に打入らしむ阿蘇兩坂梨倉原小島等追々に馳加て同く
廿日豊後と肥後との堺浪野の原に陣を取り軍勢を十二口に配分してせめきたるよし志賀入
道道擇同嫡子親次聞と均く軍勢を浪野の原に差向ける此勢翌廿一日に臼井原と云處に於て
勢揃し敵と同く十二隊に配當し諸將各圍を取て口々をを堅めける先葎原口へは志賀掃部助
其勢百五十餘人大塚口へは進肥前守百餘人柏原口へは後藤遠江守百五十餘人大戸の口へは
中尾駿河守百三十八人野口へは阿南八郎百四十餘人菅生口へは原田伊豆守百五十餘人山鹿
口へは大森大炊助百三十餘人大利口へは朝倉土佐守百五十八人片朕口へは朝倉右京進百六
十餘人田尻口へは丹秀右衛門尉百五十八人平川口へは朝倉伊豫守百三十餘人瀬戸口へは中

尾右京進百十餘人總軍合て一千七百有餘なり何れも案内者なる故本道脇道ツ・ラテリ九折の難所鉄炮の掛處鎗の合所まで評談し此度の合戦は一所ならず互に勇氣の程も耻かしければ日比よりも猶しも大事なるを云て十二手共に一里半或は一里打出て薩州勢を待居たり肥後國の先陣坂梨小島倉原等是も案内者なるゆゑ十二口より押寄する兩陣同じ軍伍にて行替る事もなく既に矢合せ初て互に鐵炮放戦し後には雙方入り亂れ討つ討れつ組つ組れつ互に勇氣の力を出し揉立々々する程に薩州追るゝ時もあり豊州退く時もありける未の刻より申の刻終りまでの戦に薩州勢引く所を着討に勝利を得たる口もあり十二口の働き何れも優劣はなかりけり薩州方に討るゝ者六十三人中について混甲廿七級あり岡方の討死者雜兵共に二十八疵を被る者十八人なり同く十一月廿八日に薩州勢又大塚に打出る由聞えしかは岡の城より志賀掃部助同市之進を大將として新手を以て攻たりけるに一戦に勝利を得て高みに登り是を見るに薩州勢は山崎と云所へ引行きけるを軍勢進んで著討ツケに今一軍と勇め共掃部助合戦あなち此度に限るまじきと制止して岡の城へと引取りぬ同く十二月二日先月廿八日に大塚へ打出たる薩州勢山崎に出張す今度は中尾伊豆守を大將として家中坂田中角律原の者共を従はしめて差向けらる此勢敵の備へを見渡すに肥後口の切所を越へ浪野の近く打出て鎗戈霜を凝し旌旗風に吹靡し平々たる原野に陣をそ取にける岡の勢は種ヶ島三百挺を一面に並へ續て雜兵三百に鎗長刀或は爪なし長刀などの得物々々を攜へさせ是も同く一面に並ひ薩州勢鎗袋を揃へて控へたる所に靜々と押し寄せ矢比計になりしかは三百挺の鉄炮を一々

打掛る程こそわれ互に討てかゝる岡勢二陣三陣も同時に蒐つて入亂れ追つ返しつ爰を専途と戦ひしか終に薩州勢に敗軍させ勝鬨を擧て引取りぬ同く廿五日武藏守忠元市原の某を大將として其勢六千有餘にて山鹿口より亂入する由山鹿近所より岡の城へ告げ來る道擇聞て中尾伊豆守原田伊賀守に一千五百餘をつけて差向らる爰に岡の城より西に當て家中坂田の兩邑に三十六人の士あり山鹿口より注進ある由聞と均く岡の勢にも従はず魁して戦負け三十六人の内河野三郎同三助佐藤隼人助工藤右京進岩本新助己上五人討死す此等は皆己か心の剛なる儘に任せ驅引と云事をも知らず片趣の無き才覺なる故に依てなり其後原田伊賀守五百餘人を率して討てかゝりしか是も蒐立られて三町計り引退く中尾伊豆守は後陣に控へてありけるか味方の引には目もかけず六百餘人を前後左右に透間もなく打圍ませ徐々と蒐合す市原か勢兩度の軍には打勝ぬ逃る敵を追すかうて競イキひぼうたる事なりければ伊豆守も擬議せず切て入り縦横無盡に討立れば伊豆守も蒐立られて引退く處に伊豆守か鉄炮二百挺勝はこつたる勢の横間へ頻りに放ちかけたりける程に討るゝ者數を知らず市原か軍兵是に辟易して右往左往に引退きけるを始め打負逃たりける中尾原田か勢是を見るより力を得勇み進んで引返し兩將備を一隊となし勢ひに乗て討程に五町餘り追退け甲首十五級を獲其日の軍は終りにけり岡方疵を被る者佐藤右馬丞森次助河野主水大塚和泉守岩本左京進なりしとかや

河田入道休吒祈星事

爰に島津修理大輔義久家臣に河田大膳入道休吒と云ける神變奇異の軍鑑あり奈何なる智謀軍術にも及はしかたき堅城をは天火を祈り下して焼却し虚空を翔る翰をも忽ち大地へ落さしむ故に彼か勘へ向ふ處必しも勝利を得すと云ことなかりける去程に島津義久豊後の國を攻んと欲せられしかは預め休吒を召て豊薩兩州の運を勘へ見るへしとありけるに休吒曰く兩州の運は某存候なれば勘るまてもなし大友父子の星を祈り申すへし星の奇特次第に任せられ然るへく候はんと申ければ義久これに同せられける休吒則私宅に還て新に壇を飾り千種百味諸の珍花妙類異形を備へ眞言秘密の法無上靈寶神道加持と天に仰て悃祈を盡し行ひける宗麟は祿存星義統は破軍星に當りし故祿存破軍の兩星を先として當る處の星とに向い祈しかは忽ち奇特あらはれて甲の運則乙となりければ味方の勝利疑なしと喜悅の眉をを開さける斯て豊州にも角隈越前守と云ける軍監あり宗麟父子の星の怪しきを見て是は定て敵の爲に致す處の災か左なくは國家の大亂なるへし我今加様に見るからは轉し替へすんはあるへからすとて宗麟へ斯と申たりしかは運は天にあるなれば唯天運に任すへしとて聊か用ゐられさりけり誠に八陣の星を勘へ或は大將の當る星を祭んにはあかしと古人もこれを傳へしに宗麟近年邪説に陥り佛神三寶蔑如にし祭祀を事とせさりければ増て諫を容られす唯今の仰の趣き宜しからざる事なりと各申あひにけり

大友宗麟攝州大坂參禮之事

近年大友の武威衰へ島津は勢ひ強大に成りぬ此上は豊臣秀吉公の助勢を申受けすんは争か

本意を達すへきとて天正十四年三月下旬大友宗麟豊後國を出船し攝州堺の妙國寺に上着し卯月五日の早朝に大坂へ肩輿を回し宮内卿法印か許に着其日の午の刻に登城し七間の遠侍に伺候して尼子坊を奏者とし虎の皮百枚其外種々の珍物を献上せらる其後秀吉公御對面あり坐席は九間の間を三間一つに取放され秀吉公出御ありければ敷居を隔て御舍弟宰相秀長其次に宇喜田八郎秀家次に細川兵部大輔藤孝入道幽齋其次に長谷川藤五郎秀一其次は秀家の叔父宇喜田忠家なり客位には大友宗麟次には羽柴筑前守利家始名前田又左衛門尉其次は安國寺其次は宮内卿法印其次は千の利休始名宗易也殿下御膳は四方其餘は足打を用らる七五三の饗應にて通ひの輩は小刀に長袴を着す御前の配膳一人御酒二遍御菓子過後宗麟言上申されけるは大友は故右大將家の御時より代々九州の探題に補せられ豊筑肥六ヶ國を治め候し上は日薩隅も入道か幕下たるへき處に島津義久探題別揆の由を稱し薩隅二國を押領し日州にも手を入れ申し候間此方より制令仕候へは却て合戦に及候加之肥前龍造寺筑紫廣門筑前の秋月等も隣國の惡黨を催し恣に國郡を伐取り申候只今大友家に一味の者として立花左近將監宗茂高橋主膳入道紹運彼等二人計始終の約を不變度々軍功を顯し候ぬ筑紫廣門も舊冬より子細ありて某と和睦仕りぬ其餘悉く島津に屬し申候其故は去々年龍造寺隆信を島津へ討取り其勢ひに肥後筑後を打從へ秋月長野等も隨ひ屬し隆信嫡子政家さへ島津と和平を致し候へは自餘の小身の者共申すに不及候當年は京都へ攻上り無二の合戦を仕らんと用意はある由其聞之候渠を御征伐候は、御先を仕り候はんとを申されける秀吉公太た感悅坐て去年西國の

事共を開届ん爲め兩使を下す處に諸士一向に隨はず是は島津秋月龍造寺等か違背に付自餘の者共も彼等に隨身するにより上意を輕んずるを見えたり此上は急に征伐すへきなり去ながら遠國の者共別條の罪科なければ味方に參りたらん者には本領を宛行はん異儀に及ば一々征伐を加ふへし又中國の毛利と大友とは累年不快の由上聞に達しぬ此上は和睦を遂らるへし島津方へも今一往上使を下し返事の趣に依て軍勢を差遣すへし先隣國なれば毛利を渡海せさすへし右の趣立花左近を始め味方の者共に具に申聞さるへしと宣ひて鎮西の郡主城主大身小身國境の事まで御尋あり委細に記し留られて後秀吉公茶を金殿の間に進らせん是へと宣ひ入り給へは宗麟も跡に付てそ入られける美麗なること言語の及ぶ處にあらす柱楹壁天井承塵釘隠障子の骨に至るまで皆黄金の熨付なり釜風呂切合圓釜水指桶綴蓋つねの柄杓立柑子口建水合子茶入棗茶碗其外の器まで皆黄金にて遞火は銀を用られ莊棚一つは梨子地蒔繪彫畫たり庭上には緑砂を布はとし嘉木瀧叢蔚然として鄧林に入かと怪まれ珠玉を以て柱を彫金を以て瓦をつむ燦然として崑崙山に登るか如し誠に天人の歡喜花佛の無垢淨土なりとも是には不過と覺えける干利休をして茶を立てさせめられて後秀吉公宗麟も茶をすかれけるかと問はせ給へは宗麟畏て若き時より手前能珍器も數多所持仕候秀吉公さては一服宗麟へ進らせんとて自ら遊はさせ給ひて宗麟へ下され加之宗麟の家人四五輩召出されて賜り御機嫌太た不淺其より天主を見給へと宣ひければ各御前を退きぬ御舍弟宰相秀長卿も天主半作の時見たるまゝにてありけるに大友殿ゆゑ思はずも見物するよと

宣ひける此天主と申けるは昔はなき事なり信長の時安土に天主を建られ殿下又從て此大臺を經營ある九層にして高く聳へ天に近く地に遠し封畿千里を眼下に瞰し目を驚かす壯觀なり下より三重目には杉の櫃十四五計り御小袖或は綾或は紅なると云書付あり一階の下は皆倉庫種々の調度を置れたり五重六重目には長刀あり是を一々見せさせ給ひて殿下四方を指し爰は何れの國彼は何と云在所と教へ給ひて其より天主を下り廣間にて御茶を賜り茶碗數多にて供の者までも召出され一間の如くに御覽あり其後隔心なき間秀吉か寢所を見すへし伺候の面々も苦しからすとて伴ひ奥に入給ふ寢所の臺長さ七尺計り横四尺計りにして高さは一尺四五寸猩々皮を布き枕の方には黄金にて色々の彫物あり御座は九間黒漆の笈の具足櫃金物は皆黄金其上に御太刀あり違柵梨子地黄金の金物なり其次に六間の寢所あり是も臺は右に同じ唐織錦の夜着蒲團山の如くに積上げた二間に名物の葉茶壺何れも金襴の袋に入れ置れたるを秀吉か秘藏の壺を見すへしと宣ひしかは宗易宗及宗薰紹安仰せを蒙り四十石松花佐保姫撫子百島五つの壺をとり出す堺の納屋宗久を始め御前伺候の面々前代未聞の御機嫌かなと感しける此外京に雙月近江に捨子淀に白雲と云ふ茶壺を置せらる何れも秘藏ある中に第一四十石を寵せさせ給ひしかとも宗麟に是を下され夫より奥に伴ひ入らせ給ひけるに殿下の衣裳又は女房の衣服を雜へて衣桁に掛雙へたり又納戸の様なる内に黄金多くありけるを是は半遣なりと宣ひける侍御の給仕の人々を見るに十二三四の女童の容顔尤美麗なるに様々の装ひをさせ態を修めて要紹にそ並居たる其次の間には幸藏主と云へ

る尼東殿と云へる女房候しける爰にても御茶下され御秘藏の脇指一腰拜領し御前を退出せられける其より直に秀長卿の方へ參られければ秀長は御普請の假屋に居給ひけるか大にもてなし宗麟罷り立れにければ秀長手を取て何方も御心安かるへし内々の儀は宗易公儀は秀長に任せられ候へ悪き事はあるへからすとて諸人の中を手に手を取て送り出て給ひける其より法印か許に立より妙國寺にぞ歸らるゝ此度宗麟面目を施し御暇を賜りて急き豊後に歸國し右の趣國々へ觸送られけると云へとも殿下の仰を用る者はなかりけり爰に紹運宗茂對談あつて九州數十ヶ年の間互に干戈を動すと云へとも更に功をなす事なし宗麟今度秀吉公の御出馬を招き奉らるゝ上は我々も薩州の先驅を被り勳功を抽て兩家興立すへしとて立花よりは薦野參河守入道賢賀に立花の氏を授け同姓となして上せられ紹運よりは村上志摩守を名代として六月の始に上京せしむ世上の人は關白の出馬何れの時にか有んすらんと手遠き事に嘲りしか後に思ひ合すれば間近き事にぞ覺えける

能呂傳右衛門事

關白秀吉公より大友毛利和睦を遂げ四國靜謐ならしむへき由仰下されたりければ違背すへきにあらすとて兩家合體の御請をぞ申されける薩州島津へも大友と和融を致し申すへしとて仙石權兵衛尉を以て仰遣されける一向に隨はす剩へ仙石か使者能呂傳右衛門と云けるを歸さすして押籠置きけるか其年の極月に殺すへきに極り密に是を亡して何となき体にもてなし湯屋にて先づ澡浴を致さしめける浴も半ならんとする比はひ預り人の某太刀拔もつ

て入來るを傳右衛門元來きたゝかなる者の心飽まで早かりければ盟を取て投付し程にあをのけに打倒し直に屏を踏破り突と出て一散に走り行く誰かは争て止むへき疾きこと夸父か目を追て虚空を翔るも斯やらん早や十餘里はかりも逃のひぬ比しも十二月の半はなれば天寒く地凍りて朔風凜々たりけるに一重の衣たに縈ねはいと寒風身に入て肌をさす事及の如し奈何はせんと思ひしか去る事ありとてある川水に飛入姑くありて立あかり足をばかりと走りけるに後には混身あたゝかにして吹風とても寒からず兎角して豊後の地まで來りしは不思議なりける事共なり

薩州勢豊筑出張并殿下西征御催之事

去程に筑前の秋月長門守種實は高橋筑紫を攻亡し我身の害を免んとて薩州に使を馳て出勢を相催す島津義久大に悦ひ舍弟兵庫頭義弘伊集院右衛門大夫忠棟を大將として肥後筑後の勢二萬餘騎を相添へ筑紫上野助廣門か領内へと差向け豊後には島津中務少輔家久を大將として新納武藏守入木院祈答院肝屬本田等に薩隅日の勢三萬餘騎を従はしめ豊後堺に差遣す仙石權兵衛尉及び大友父子是を聞き島津仰に隨はさる由京都へこれを注進す秀吉公是の上は急に誅伐すへしとて國々へ觸遣はされ急き西國へ渡海して立花高橋筑紫等を救へしとありければ黒田勘解由孝高宮木右衛門入道先手として長州赤間か關に着く吉川駿河守元春小早川左衛門佐隆景も長州時枝まで出陣し爰にて勢を待揃んとて姑く逗留したりける程に長門周防安藝備後備中石見の勢次第々々に馳集る長曾我部以下の四國勢は豫州今張の浦にて

船を揃へ豊後に押渡らんとを催しける此時秀吉公より大友へ下し賜る書の文に曰く
 先月廿八日之注進狀今月十日於京都令披見候今度就宗麟上洛帶條目申遣候處其方輝
 元合體由尤神妙之至候然者島津事同心無之由無是非候此上者可加征伐候就夫長曾我
 部父子並四國勢爲先手申付候今月廿日出船之等候其國著岸次第仙石權兵衛等令相談諸
 事無越度様可被相計候毛利吉川小早川爲中國先手立花高橋等可助成由申合黒田勘
 解由宮本入道差下候右兩人渡海之後一左右次第輝元中國衆不殘出陣固令下知候其上秀
 長秀次率備前播磨丹波美作紀伊淡路之勢下向候右兩人可有下著候條彼是人數待請候
 程者聊爾働無之様專一候逆徒退治不可有程候諸事可被任御本意之儀案之内候猶増田
 右衛門安國寺可申候也

七月十二日

秀吉朱印

大友左兵衛佐殿

豊薩軍記卷之五終

豊薩軍記卷之六

鷹取勝尾落城并高橋統増危難之事

斯て六月下旬薩州の大將島津兵庫頭義弘肥後の關山へ打出たりしかは伊集院右衛門大夫野
 村兵部丞は早筑後の高良山に着陣し七月七日筑後川を打渡り筑紫の領内を燒拂ひ勝尾の南
 なる鷹取の城へ押寄る此城には廣門か一族筑紫左衛門尉を籠置けるか茲を破りそこなはれ
 ては云甲斐なしと士卒をいさめ防ぎ戦ひたりしかとも寄手は屑ともせず矢石を怖れず攻立
 て終に城中に乗入ける程に筑紫左衛門尉終に討れにけり嫡子新助春門は大力のものなりし
 か川上左京と引組指差へてを死にける此川上は去年有馬にて龍造寺隆信を討たりし者なる
 か故ありて義久の勘氣を蒙り浪居の身となり有けるか今度先陣に交り出討死したりけると
 なり鷹取既に亡ひしかは直に勝尾の城へ押寄せ攻動す事雷霆の如し城兵も爰を最後と防ぎ
 しかは暫は支へて見えたりける去れども寄手多勢にして荒手を入替々々々攻鼓を打て攻入
 ける程に筑紫か一騎當千と頼みたる赤澤大九郎小川伊豆入道信覺友清左馬大輔など云ける
 者ともみな悉く討れにけり大將上野助廣門は甲の丸に引籠り爲方とても有らさりければ自
 害をせんと思ひ定め日來舞樂を弄し故冥途の旅の思出一曲の囃を成度由寄手に是を云送
 りければ哀れ優しき望みなるかなかれか心に任せよと暫く軍を止にける係る處に秋月種
 實筑紫と所縁ありける故様々扱ひたりしかは廣門降人と成て出にける義弘大に悦ひ園部の
 小松へ引下し其のち筑後の三猪郡大善院に遣し一間なる處に押籠め置き多の番等付をきて

稠しく守らしめにける是を見る者痛しや昨日までは廣門と世に喚し人なるに今日よりしては狹門と成りけるよとそ笑ひける此事實滿の城へ聞えければ筑紫か者共大に驚き心細さは限りなし近日岩屋へ押寄せなど沙汰しければ大將もなき此城殊に勢とても微なりければ周章尤も甚し如何はせんとて懼れわなき膽を冷してうろくどあされたる體なりければ中々持支ふへしとは見えさりけり紹運の與力に吉野源内と云ける者當城にありけるか此體を見て是を願ふ折からなりと思ひ岩屋の城へ密に人を以て統増殿を實滿へ越しめ給へ係る時節を其儘に棄置んも本意なき事に存候なりとそ告げたりける紹運かれか云處其理なきにあらずと云へとも筑紫か者共心中計り難ければ卒爾にも成かたし先其趣を窺ひ見て來るへしとて陣九郎兵衛と云者を使としてを問せらる筑紫か者共申けるは統増殿の御事元より廣門縁者なり登城あるに於ては争か疎略に存へき主君と仰き奉り候んとそ答へける陣九郎兵衛立歸て其趣をを報しける去れとも統増やうやく十五歳なれば心元なく其上筑紫は表裡の家なれば此事如何かあるへしと諸人の異見を問れける或は他に譲りて口を閉或は己を顧みて辭を出さゝりける處に伊藤外記進み出某存候は百貫に買ひたる鷹も驚に闘せて見よなど、申せしことこの候へは只々御手を放たれ御覽せらるへう候て如何あらんと申ける紹運汝か云處我心にかなへり實滿若し敵城とならば當城たもち難かるへしとて則陣九郎兵衛北原進士兵衛同傳之允中鳥采女等を先として屈強の勇士二十人に與力の輩相をへて同く十二日の酉の刻に實滿の城へとそ遣しける係る處に薩州寄手來り廣門既に降人となる上は其臣僕たる

者共何そや残り止て籠り居へき謂れなし速に出て降禮をなし城を明渡すへし左なきに於ては踏つふし滿城を血に成すへしと匂りければ從來臆病未練の者とも忽ち心翻て統増を討ち薩州へ降參せんとそ議したりける紹運此由を傳へ聞誰をしてか遣し統増か危難を救はしむへしと姑く思惟をめぐらして伊藤源右衛門をそ遣はしける此源右衛門と云けるは先年北原鎮久逆心の時忠功を成すと云へとも其後實滿落去により紹運の前も遠さかりしかは日來心にうらみを懷き何方へも立忍へしと思ひしかとも同名外記に諫められて止りけるか今又撰ひ出さるゝ事武運の冥加と勇み進む相伴ふ者には高橋山城伊藤外記三原右馬助今村五郎兵衛有馬伊賀小中美濃など云ける日來勇士の譽れを得たる屈強の者共十人に與力の者共引率し我先にと實滿へ馳登て見れば多の兵とも神樂堂の門を關て居たりし故内へ入へき様もなかく如何はせんとさしもの伊藤案し煩ひ居たりしか帆足善右衛門と云ける士一子を質とし紹運へ出し置ける者あるを是幸と呼出し我々是へ參せしこと餘の儀にあらず統増殿の御供し歸るへしとの仰により御迎の爲に來りたり急て爰を開けられよと云ふ去とも帆足一人か計ひとても成りかたければ默然として居たりける伊藤此由見るよりもさては御邊も質人を捨られける哉と云ければ帆足も今は奈何とも岩手の浦の荒海に子を捨小舟やる瀬なく流石に帆の手取兼て何れ心を澳つなみ立わつらうて居たりしか姑く其へ御待あれ宜く計ひ申さんと聽て内に立入けるを暫し待つ居れりとも何とも答への有らざりければ有馬伊賀と云ける大力の勇士またるしまたるしと云より早く門の闔に手をかけて曳や曳やと押たりけるに

關貫中よりはきと折れて扉は左右へを開きけるすは打入れと云程こそあれ神樂堂へ走り行て見れば筑紫か家人等共多く並居て何事やらん評商して居たりける處へ伊藤案内もなく突と入り統増殿の御迎の爲に來りたり何れも氣遣し給ふなど云より早く筑紫入道良甫を取て押へ太刀を胸に押し當て汝等早くも心を變し統増殿を討ち進らせ薩州へ降んとは巧みけるよな今一言云て見よ異議に及は、一突と四方を礮と白眼しは身の毛も彌立てすまじ、偏に鴻門の會の時樊噲項羽を睨みしも是には過ぎしと見えにける三原高橋今村も思ひ思ひに取て伏せ虚言吐なは刺殺さんと怒る氣色眼に顯れ勇氣炎の燃るか如し城兵旗崎新右衛門我々か誤り臍を嚙に益なし此上は如何様にも仰に従ひ申すへしとて人質を出し様々詞を盡しければ伊藤も此上はとて人質どもを請取上宮へ上せ置き統増を守警してこそ居たりけれ

十時攝津守岩屋城使節之事

立花の城主左近將監宗茂^{立花入道}實父高橋紹運の方へ十時攝津守を使として申遣されけるは島津近日當國へ發向する由承り候定て彼れは大軍ならん味方僅の勢を以て防ぐに其利なかるへし如し大軍に圍れんより彼に先んし討て出命限りの一戦を遂らるへきや又岩屋の儀は近年取荒されさせる要害の地にもあらず實滿は勝れて地の利堅固なれば彼に登城あつて天の時たらん折をも御覽せらるへうもや候はんとと諫めらる紹運攝津守を近く召て宗茂の云はるゝ所尤理ありと雖とも退て按するに誠に味方を敵に比すれば大海の一滴九牛か一毛なり去れとも軍さは勢の多少によらず將の心におり敵大勢なればとて争か無下に討るへき詮

なきかゝり軍せんよりは敵を待ていさきよく防戦し勝負を運に任すへし又實滿籠城のと縦ひ鐵壁の城に大軍を以て籠りたりとも人の口調はすんは久しく持ち難かるへし運強き時は死地に入ても利を得運弱き時は生地にも有ても遁るに處なし節に當て死するは勇士の本意とする處なれば當城を枕として討死を遂へきなり多年の居城を捨て逃たりなんと、後代に嘲哂せられんは實に口惜かるへし實滿に籠るはとならずは其よりは立花こそ勝れたる要害なれば安否一大事の軍さに兩將一處にあらんは謀の拙きに似たり道雪と某し値遇淺からざりしかは我は縦ひ切腹すとも宗茂さへ恙なくは大慶たるへし薩州の大軍寄たりとも十日支へぬ事はよもあらし紹運命をかきりに戦ふ程ならば寄手も二三千は討つへし島津勢鬼神たりと云とも三千の兵討れたらば重て立花へ押寄せ手強き働き成りかたかるへし殊に立花名城にて勢に不足もあらざれば敵何ほど攻るとも廿日の内には落へからず彼是三十日過る間には中國の助勢も渡海すへきなり然らば宗茂などか運を開かれさらん此旨能々申へしとありける處に屋山中務少輔進み出此儀に於ては宗茂の諫に従せ給ふへし當城の事は最初より某に預け置れし事なれば御跡に残り恐れなから御名代に切腹仕候はんとを申ける紹運聞も敢す中書一人死たりとて引取へき敵にもあらず其上汝か如き忠臣を益もなき所に何そ一人殘し置へきやとて聞入す終に攝津守をを返されける十時立花に歸て右の趣き委細に演説したりければ宗茂は云に及はす何れも是を感賞して皆たもとををらるはしける暫くありて宗茂涙を押へせめての事に援兵を遣すへしとて家臣をあつめさても島津の大軍近日岩屋に押寄

るの由味方は無勢殊に助けの兵なければ紹運の死近きにあらんか年比何れもの志し忘るべきにあらず我運を開かは兼ての勤勞などか報せざるべきや我も亦敵の爲に命を隕さは共に黄泉の誓を同ふすへし今岩屋の危きこと旦夕に逼れり何くに於て忠を盡さるゝも某しに對して其功相同し然れば兩三人岩屋に到り紹運の先途を見届けらるゝに於ては尤大慶たるへしと有ければ並居たる兵共皆感涙を促し我々仰付られよ某に命せられよと争ひける宗茂大に悦ひさのみ大勢は無益なりと其樞縁を以て吉田右京森善兵衛大石下總同七右衛門同七兵衛三原隼人後藤新五兵衛同太兵衛甲斐勘解由同新助井手七郎左衛門星野源三郎同出雲西山織部日高甚八青木九助原田次郎若杉藤九郎泉原右京本田右馬助工藤彌兵衛野村彌助神品彌三郎香椎勘助麻生外記竹廻五郎兵衛など云ける究竟の勇士二十餘人を遣はしける岩屋落城の日此の者共比類なき働きして一足も退かず皆討死をそしたりける

島津勢圍岩屋城井城中持口定之事

去程に島津方は先岩屋を攻落さすんは寶滿落居も叶うへからすとて七月十三日觀世音寺太宰府へ押寄る其外秋月長門守種實舍弟高橋右近大夫元種同長野三郎左衛門尉種信隈部城宇土星野草野原田問注所城井以下肥筑の大名與力して其勢五萬餘騎岩屋の麓二三里か間は尺寸の地も餘さず軍勢山野に充滿たり斯て寄手の大將より莊嚴寺の快心とて辨舌達せる僧を使とし岩屋城へ申越けるは今度此の表に發向せしむることあなから紹運へ對しての弓箭にあらず筑紫廣門表裡を構へ諸郡を押領し我意を働き候により誅伐のため出張仕ける處に廣

門當家に屬する後彼の家人共を招き寄せ息統増を籠置き相支へらるゝ條其謂れなし廣門抱へ城なれば速に此の方へ渡さるへしとを演たりける紹運云く今度薩州より遙々大軍を出さるゝ事御苦勞千萬の至りなり依て寶滿岩屋立花三箇城の儀は紹運宗茂秀吉公より代官として預下さるゝ旨御朱印を賜りぬる上は更に相渡すへきの儀なし是非に懇望なるならば秀吉公の御朱印を賜り其の後渡し候はんとを答へらる薩州の大將此由を聞達も此の城弱々とは渡すまじきとて明れば七月十四日より仕寄を附竹束をつき寄せつき寄せ攻近つく城中にも持口を定むへしとて紹運軍勢の配分ある先虚空藏の臺巽の方は福田民部少輔に同兵右衛門同右馬助同新右衛門合原因幡川上水之助鬼木左馬助水城喜助平子田兵衛長尾左京河崎左衛門同次郎兵衛以下十餘人を相添是を守らしむ坤の方は屋山中務少輔を大將として同羽右衛門帆足備後同新三郎今村入道永澤同主計同喜助同彌五郎同右馬允同六兵衛陣三九郎國分主計同三助長田大藏窪山内藏助同久助木野大學荒河隱岐同伊豆仲九郎井上主水以下百餘人にて相守る南追手は更原右馬允中島隼人原口紀助伊藤宗右衛門更原七郎同次郎三郎松延勘七河端勘助石橋彌助伊藤市之丞凡十餘人にて堅めたり百貫島より西一方は三原入道紹心同和泉を大將として三原入道宗久伊部東市正麻島孫太郎市川玄蕃富本入道忍孚馬渡入道龍虎軒小川右衛門同宮内中島治部染川但馬同傳兵衛仲刑部同三五兵衛築瀬三郎(川)同新助村田三郎轟三助中島四郎同與次郎以下凡百餘人山城戸まで持つゝけたり山城戸は弓箭入道了以同平内か持口にて此手に屬する者共には同苗次郎三郎大町備前中願寺和泉同孫太郎

光行源次郎幡崎隼人同長門山本右馬允稗田四郎三郎平山何右衛門以下七十餘人なり東松本は伊藤八郎を守將として赤坂入道運鉄田原入道運澤行徳右馬允同次郎三郎伊勢民部田中安藝同四郎兵衛藤織部同和泉同左馬助山下九兵衛同刑部大石七兵衛園木空之助小島忠次郎岩橋内藏之助以下八十人にて秋月役所まで持つ、けたり秋月役所の攻口には高橋越前を大將として縁藤式部同彌九郎高松次郎同勘解由同六郎同治部福島主計土岐良甫伊部九華同孫三郎以下相従ふ者共五十餘人なり風呂谷は關内記同勘七兵衛土岐大隅長松加賀同掃部以下五十餘人にて守たり水の手の上は萱島左京村上刑部左衛門得淵備前同内藏之助椋島善助茂松兵部同團助淵の上兵右衛門以下守兵六十八人なり二條には萩尾入道隣可同大學を將として同彌吉兵衛野上右衛門木村右衛門田中主馬戸坂市之丞千重七郎同隼人此等は筑紫か家來なるか證人に出て其儘に居留する以上三十餘人本城甲の丸には大將高橋主膳兵衛入道紹運金鉄の兵百五十人にて扣へたり其外立花よりの加勢二十餘人都合七百六十三騎小勢とは申せとも楠菊池か再來したる程の九州第一の良將に相従ふ者共當時まれなる武功の達人義を鉄石よりも堅くし命を鴻毛よりも軽くして一場必死と思ひ定めし事なりければ七月十四日より十餘日か間強戰數ヶ度に及へとも持口一所も破られず同二十六日の早天より薩州勢楯持楯かつきつれ邑城まで攻入たりしを城中静まりかへつて音もせず態と邑城を破らせ大勢を思ふ圖にをひき入て屋山中務か役所より鳥銃震電雷イシロヤを放ちかけ其外大石大木を轉しかけし事なりければ同時に寄手數百人壓に打れて死てけり疵を被むるもの數を知らず

高橋紹運與新納藏人問答之事

寄手の勢は是に怖れていや、高橋か舉動凡人の業ならずと背をく、めて進み得ず係る處に寄手の方より武者一騎進み出暫く矢止を乞ひ城中へ物申さんと呼びける良有て櫓の上より某は麻生外記と云者なり如何なる御用の候やらんと答へける其時彼武者馬を乗放ち城近く歩みより某は薩州の家士新納藏人と申者にて候さても紹運は此十箇年の間度々の籠城に諸人に情をかけ所々の合戦に武功を顯さるゝと云へとも家運衰微の大友に一味ある故功を立らるゝ事もなし一張一弛は武士の習ひ張て不弛文武は爲すとかや申候なれば時に隨ひ降參あれ島津に於て某宜く吹舉仕り候はんとを申ける外記答て是は新納殿の詞とも覺えぬ者かな紹運へ申達するまでもなければ某直に返答申候はん何れも鎮りて聞給へ夫盛なるは必ず衰へ生るは必ず滅す始ある者は終あり古へ源平兩家の天下に權を争ひしより以來盛なる家の衰へさるや候公方を始め武衛細川島山吉良一色赤松山名上杉千葉宇都宮武田今川土岐佐々木七肥椎名神保越前の朝倉江州の淺井出雲の尼子周防の大内肥後の菊池等に至るまで名を得たる大家ことく減亡致し候大友家は頼朝公より豊前豊後を賜りて罷下りしより以來名字斷絶これなく殊に此三代は御紋を賜はりて九國の探題職なり近年不幸にして合戦に利を失ふと云へとも大友なればこそ今に一兩國も治め候なれ島津家の事も略承り及び候に十年以前は根占肝屬本郷北原ネウラキモツキか士卒鹿兒島まで亂入し一郡をたに治め兼られ候ひしか近年卒度世に出られ候今豊州少し妻手に成しとて左様の廣言は鳥なき里の蝙蝠粘なき山

の勲とやらん今こそ左は宣ふともやかて秀吉公御進發わらは島津の滅亡も幾程もあるへからす凡主人の盛なる時は忠を勵み功名を顯はす者はありと云へとも衰へたる時心を變せず一命を棄るをこそ忠義とは申すへけれ旁々は薩州落魄の時は主を捨狹間をくゝる覺悟とこそ見え候なれ當陣五萬餘の諸卒孰れか百年の齡を保たん仁義を守るを人とせり守らざるは禽獸に均しと辨舌明に伸ければ新納も理の推ところ至極して重て詞はなかりけり麻生外記とは名乗つれども是を紹運なりけるとは終に其隠れなく誠に文武の良將とは聞えつるか當機の智謀口才までも達したる大將かなと感しける

岩屋城軍事

其日の晩景に薩州の兩將より又莊嚴寺を以て申けるは此間八箇國の勢を引受け數日持支へらる事比類なく覺え候又此の方にも邑城を乗崩せし働き雙方の武功勝劣あるへからす今は和睦致さるへし寶滿岩屋三箇城の所領等は相違あるへからす八箇國の寄衆の覺之にて候へは實子を一人質として賜はれば當陣を引拂ひ向後豊薩州の和平を紹運調義あつて成就の後質人を返し進らせ九州一統にして兩家心を合せ中國へ押渡り京都へ攻登り天下を掌に握り太平を歌ひ候はんとを申越ける紹運答て三城並に采地五六郡の事は元より持分なり質人の事は思も寄らす殿下の御用に立ん覺悟に候然れば秋月事表裡計りにて諸家を惱まし豊筑肥の間に横行し九州亂逆の張本なれば彼に切腹させ其の上此度の出陣殿下又は大友に對しての確執にあらず廣門を治めん爲なりと神文を賜はり候はゞ如何様にも申談すへし左なき

に於ては殿下に對し大友への届に當城を枕とし討死仕り候はんとを申ける島津も是上は是非に及はず兵卒いか程損するとも攻落さては争か引退くへきと明れば七月廿七日の寅の刻より寄手の總軍勢切り岸の下まで詰寄せてまだ東雲も曙やらぬに四方同時に攻上る城中も兼て待設けたる事なりければ今日を限りと討て出互に作る鬨の聲矢叫鉄炮の響劔戟を交る音千雷頭上に落ち六種震動するか如く兒童婦女の輩ハ肝魄を失へり城兵元より身を塵芥よりも軽くして命を惜まず戦へは寄手の死傷數を知らず一陣二陣戦負けて引退けは荒手を以て入替々々手負死人を乗越踏越息をも繼せず攻近付く城中小勢なりければ入替る者もなく終日の戦に腕ゆるへ氣つかれて大半討れける間一番に福田民部少輔か役所を討破られて伊藤宗右衛門か役所に攻懸る伊藤も息の有ん限りは得こそ透すましとて三人張に打番ひ矢種を不惜射たりける市田雲齋辻治右衛門河端勘助中島隼人石橋彌助など云へるものもどても存ろふへき身ならぬは聲花ハナカなる軍して名を後世に留めよと我劣らしと切て出て半時はかり相戦て伊藤を始め皆ことごとく討死す是を見て屋山中務伊藤八郎か役所の者共百餘人にて渡り合ひ火出る許りに戦ひけるか是も僅に討なされ二條を差て引退く風呂谷百貫島より山城戸までの城兵等も今日を限りの合戦なると思ひ定めて居る處に寄手一面に攻かゝり討とも射れども物ともせず先陣疲れば後陣の荒手を入替々々攻たりける山城戸の弓削平内爰を破り損はれては叶ふましとて櫓に登り差取り引詰射たりしか弓手の手先を敵に射られ今は是をてなりとて弓を彼へなげすて櫓より飛て下り向ふ敵に走り蒐り走り蒐りて終に討

死したりけり百貫鳥を固めたる三原入道紹心は辭世の歌を堀柱に書付置是も同じくかけ入
ていさきよく討死す高橋越前伊藤九華は秋月役所を守りしか精兵の手利にて矢束解て押亂
し散々に放ち掛けしは只降雨に異ならず矢種盡れば鎗ひつさけて突て入り追つ捲りつ攻戦
ひ勇猛を振て討死をそしたりける城中諸口の守兵等残り少なに成ければ一所に集り拒かんと
二條を指て引こもる

屋山太郎次郎討死并野邊櫓合戦之事

寄手はいよ／＼氣に乗て勇み進て攻登る二條を守り居たりける萩尾入道麟可嫡子大學同彌
吉兵衛木村新右衛門爰は我々か持口なり娑婆の置土産に花々しき軍して黄泉の旅を急ぐへ
し是を冥途の首途現世の立振舞に手なみの程を見すへしと聲々に喚て我も我もと驅入けれ
はあれ討すなど云儘に士卒同時に突て入り千變萬化命を惜ます攻戦ふ暫か間に敵味方の手
負死人六七百人出来れり城兵元より思ひ定めし事なりければ驅出々々戦て討つ討れつする
中に深手を負て忽ち腹を切もあり今一度大將へ最後の暇乞せんと詰の丸へ登るもあり或
は先立進らせて冥途の郷導すへしとて直に討死するもあり或は陣屋に立歸り妻子に別れの
盃して其後切て出るもあり或は係る折節に妻子の顔を見るときは却て不覺も有なれば見さ
らんには如しとて攻口を一足も退すして討るもあり或は敵と差違へ或は日比睦ましかりけ
る朋友と契て指違ゆるもあり思々の最後の體譬て云んかたもなし中にもいと哀れなりけ
るは屋山中務か一子太郎次郎とて生年すてに十三なり未だ満さる月の顔せ雲間を分て出る

か如く艶かなる容色は源氏の君のたくひなき姿を唐土人の見て光の君と云けるも斯やと思
ふ許りなる美麗の少年ありけるか諸方の口々こと／＼破れて敵亂入ぬと聞よりも父の先
途を見届けんと太刀をつ取て走り出る母は驚きこはそも如何なる事をやと襜を取て引止る
をもろくも袖を引切てかけ出たりしか父の中務早討死すと聞よりもはつと許りに胸ふさか
り亂るゝ心のやるせなく生ては争て歸らしと一文字に討てかゝる敵もさすかに花の姿と志
の剛なるとをや感しけんあへなくも打散さす太郎次郎は元來思ひ切たる事なりければ走り
かゝり走りかゝりて切ほどに寄手は猶もやさしくて生捕んとそしたりけるを人手にはかゝ
らしと散々に切て廻れば今は爲方なきぞとて終に取こめ失ひける軍散して後までも母は彼
の帷子の残れる袖を持傳へて忘れ形見とを悲みける去程に諸方の寄手亂入て野邊櫓に攻近
つく討殘されし兵共櫓に籠て進退自由ならずりければ手々に鎗の柄短く切り無二無三に突
てかゝる氣に乗たる薩州勢なしかは少しも猶豫すへき切れ共突ともひるますして我先にと
を進みけるに餘りに手繁く切立られて怵へす發と引退けは新手替て又込入りぬ込入れは追
出し必死と成て戦ひける程に或は組て勝負をするもあり或は指違へて死するもありける城
兵心猛しと云とも今はこと／＼く討れて朱に染たる兵共僅か五六十騎に成にける大將紹
運三浦式部江淵右衛門黒岩隼人を近つけ今は早や是まてなり汝等は奥に行女房共を忍ばせ
よ其餘の者共は表に出て拒くへし我高櫓に登て切腹せんと思ふなりとぞ下知せらる入道の
近習に居ける者共には森満彈正今村彈正同心慶坊同刑部中島左馬助同大炊助北原内藏助同

外記同治右衛門同彌六兵衛同八郎加賀備前同彌四郎築瀨與吉兵衛吉野左京内田出雲同内膳久保木工助同助右衛門廣田宗祐上村刑部野口右衛門原伊豆入道同越後横小路市之助同勘助橋本善兵衛岡松酒右衛門加藤雅樂助古野大學同八郎綾部山城佐藤善之丞八尋源助花田宮内以下金鐵の兵を前後左右に相從へ思ひ切たる勢ひ決然としていさきよし

岩屋落城并紹運最後事

然る處に隼雄の寄手百騎はかり野邊櫓を打越へ詰の丸へ切て入る悪き奴原が擧かな一人も通すなど同音に鬨を作りて縦横無碍に驅立れば寄手許多討れて逃出る去れども息を續すなど又二百騎許り切て入るを猶もものとも思はずして千雷萬鼓天地も崩れ首も碎る計りに八文字に打破り十文字にかけ通る必死の鋒するをにしてさしもの薩州勢當りかたく谷底へまくり落されたりしかは多勢の寄手氣を吞れて半時はがりは進み得ず紹運は其間に味方の手負死人を一通り巡見し死せる者にもことごとく手をかけ涙を流して謝詞をのへいまだ息の通ふ者には手つから薬を口にをし入れ禮を厚くし通られけり古へより良將多しといへともかゝるためしを未だ聞ず紹運の士を愛せらるゝ事平生斯の如くなれば此數箇年の籠城に方々にて忠義を拙て危きを見て命を輕する輩幾許多といふかすを知らず此般も大軍を引受開運の頼みも有らざる籠城に千騎に足らぬ家の子郎等聊か變する心なく皆身命をなけりちし事古今の間楠正成湊川にての生害より以來類なかりし事共なり係る處へ寄手の大勢又鬨を作て攻登る紹運莞爾と打笑ひ汝等は夫れにて見物せよ討死したる者共の孝養のため軍

して手向となさんと云も敢へず大薙刀を振廻し多勢の中へ割て入り向ふ者の眞向逃る者の母衣附胸切立割車切暫時か間に十七人まで薙伏せ其身も深手負ぬれば今は早や思ふ程軍もしつ心靜に自害せんと高櫓にかけ登り腹十文字に搔切れば吉野左京介錯し直に其太刀とり直し己も腹を搔破り紹運の死骸の前に畏てそ死たりける紹運今年三十九歳誠に弱年の昔より弓矢の隙なく一日も身を安する事なかりしか今年如何なる運の極めにや有けん岩屋の城の苔の露消て空しく成ぬれ共譽れば千載の後にを殘しける相從ふ者共も同音に念佛し或は腹切或は指違へて同じ枕に伏たりける念佛の高聲なるに驚き寄手我先にと攻登り此體を見て天晴大將やけなけなる勇士共やと感聲暫はしは止さりけり江淵三浦黒岩は紹運の命をうけ奥に行んとしけれとも役所の合戦急なる上敵味方の死骸上加上に打重り軒とひとしく埋りければ通るへき様もなく兎角戦ひ居る内に敵の多勢に取籠られ三人共に討れし故内室は敵の虜となりける寄手其夜は太宰府に陣をとり翌日諸手諸卒の實檢ありけるに隊將たる宗徒の士二十七人まで討れ手負死人凡五千三百餘人にを及ける紹運の首を實檢に備へければ敵なからも惜むへき良將なりとて兩將床机を下て禮拜し岩屋の向ふ二日市の山上に是を葬らる島津は慈仁を專とせし故敵味方の討死したる冥福追修の爲にとて秋月より佛心宗の茂林和尚と云けるを招請し梁武の時より成初ける大施餓鬼の法筵を形の如くに執り行はれける卒都婆の頌に曰

一將功成冠九州

戰場血入染川流

殺人刀矣活人劍

月白風高岩屋秋

晋の文公は介子推か爲めに封綿山祭之唐の太宗は散帛遺體を斂めしむ勇士の殊恩に預る事古者も今も替らさりけりと各これを感稱す其後紹運の軀をは立花宗茂岩屋の本城に葬り斂めらる今に至て岩屋二日市の兩山共に相對し首塚軀塚とて二墳壘々として年々春の草生す哀れなりし事ともなり誠なるかな大友家に於て立花道雪高橋紹運とて車の兩輪鳥の兩翼ある如く爪牙股肱の譽れあつて忠臣の節義を守り智勇兼備へて諸人其威名を怖れつるに斯る生害に及びしことは偏に大友父子武運傾きぬるの驗なり

高法統増同母宗雲尼成擒事

去程に薩州勢同廿七日に岩屋の城を攻亡しやかて寶滿の城へ押寄せ使者を以て早々城を渡すへしとそ責たりける此城は筑紫と高橋と寄合持の城なりければ互に心を置合て異議區々にして調はさる處に伊藤源右衛門曰く昔越王戰にまけ吳王に降りたりしも再ひ會稽の耻を雪き頼朝平家に羞かしめられしかとも終には六十六箇國被補惣追捕使の例も有れば只天の時至んを待つにはあかす兎角統増殿の御身の上一日にては恙なくまします様に存れば何れも一旦下城をなし浮世の體をも窺ひ見候ひては如何あらんと申ければ此義尤然るへしと既に評議相極りて寄手の方へ統増未だ幼年に候ひぬれば立花へ登城いたさせ給はらば和睦仕り下城いたし候はん若左もなきに於ては當城を枕とし討死仕り候はんとそ云送りける薩州方に相議しすかして下城を致さしめ道にて奪ひ取るへきにまはなしとて立花へ登城ある

へきと子細なしとの神文を認め送りたりければ謀とは思ひも知らす何れも下城に極りける時に伊藤源右衛門曰く我等は當城に残り留りて切腹すへし紹運への届と云殊には城中一人も止まらずあけ退たりなと嘲哂せられんも口惜ければなりと云北原進士是を聞て御邊只一人には切すまし我も同く切んと云ふ中島采女正曰く兩人の申さるゝ處尤なりと云とも退て愚按を回らすに不可なり奈何となれば左様に望まるとて誰かは然りとせん左あらん時には主君の届には有らて却て障りと成へけれ死を極るとは安く生を持つことは難し統増殿幼稚にましまして然も開運はかり難き時節死して名を残んより命を全ふし御途を見届られんこそ死に百倍の忠節たるへし紹運も岩屋の苦の下にて左こそは悦はせ給はんと曰杵か昔を引き程嬰か百慮の智を盡して諫ければ兩人聞得思止りけり斯て人々統増に相從て出ければ待設けたる薩州勢其まゝ是を打圍み立花へとは送らすして武藏村を差て行くこは心得ぬ事共かな神文は奈何にと云へは薩州の習ひにて戰場にては空誓紙も有なれば此方へ御入候へとあらぬ方へと誘れて行や野徑の叢より雉子一つ飛立て横切に行處を統増の近習に在ける今村五郎兵衛四尺六寸の太刀を拔追様に眞二つに切て落す加程に希なる勇士共數十人附副たりしか共多勢の敵を奈何とも爲方なくて囚れとなり急げは程なく八月朔日吉松と云處に着にける統増の母宗雲尼も同じく囚となり北關と云處迄に送り越れて居られけるを其比龍造寺民部大輔政家は秀吉公に志を通し薩州に手切の爲め筑後三池郡に出張し在々所々を放火し郷民を掠劫して居ける處に立花宗茂より宗雲尼の事一向に頼み申されければ堀江入道

覺仙大木兵部少輔を北の關へと遣はしける程に有あふ者共切散し難なく奪取てを歸りける
 政家悦ひ肥前に歸り立花へと送られける斯て八月中旬秀吉公の先鋒黒田勘解由宮木入道
 長州時枝を立て豊前國柳浦へ押渡り吉川小早川も追々渡海したりければ山陽道の軍士毎日
 引も切らす着陣す是を見て立石小倉に在ける敵ともこらへず岩屋を差て引取りにける此節
 秀吉公より大友立花高橋へ下し賜へる御教書數十通の内一二を寫す餘は省略せしめ記さす
 對黒田勘解由宮木入道七月九日之書狀到來候抑九州之事帶條目豊筑薩へ加下知候所
 に義統輝元令承伏和合之儀馳走尤神妙候然而島津至筑紫領内相働于今在陣之由無是
 非候此旨最前義統注進候條則毛利小早川吉川等越關戸義統令相談急度可及行之由
 申合黒田勘解由宮木入道差下候定而不可有油斷候此上敵不逃散者輝元注進次第追々
 差遣人數其上秀長秀次を始可相働候條彼凶徒等可加誅伐候然者兩人事依忠節望等
 之儀可申付候味方中申談聊無越度様調議專一候宗麟義統茂江具に申遣候間可得其意
 候也

八月三日

秀吉判

立花左近將監殿

高橋主膳入道殿

八月十日之書狀加披見候島津九州之逆徒等をめしつれ其國境目まで罷出之由たとひ彼
 惡黨合戰をいとみ申候ともかまひなく堅固の覺悟可有之候四國中國之勢追付可有者

岸候條其間聊爾之働無用に候

一筑紫領内にも島津勢相働候由立花高橋筑紫等無勢之儀に候間猶以合戰不仕籠城堅固に
 相守御勢を可待請由彼等方へも可被申越候其上吉川小早川可令渡海由先日申遣候
 黒田勘解由宮木入道もはや可有着岸候條其程は敵たとひ取かけ候共合戰可爲無用候
 上方勢段々指越候輝元も可有出馬由申遣候秀長秀次出陣以後には致出馬逆徒等一々
 可列首候少も如在に不_レ思候間可屬案利儀不可有程候右之人數著陣候而可及手立候
 必_レ龜忽之働不可有之候
 一敵罷出候而及長陣候は、可退屈候不引取様かけとめ可召置候段々人數差越一人も
 不殘可討果候此趣黒田宮木仙石方へも申遣候各々令相談無越度様尤に候猶安國寺可
 申者也

八月廿五日

秀吉朱印

大友左兵衛殿

立花宗茂追討薩州勢事

夫れよりも薩州の兩將寶滿岩屋の兩城をは秋月種實へ相渡して立花の城へ押寄せ使者を以
 て申しけるは今度此地に向ふこと宗茂に對し曾て遺恨の子細なし今九州悉く薩州探題の下
 知に従ふ所に當國岩屋立花の兩城我意を立らるゝに依り是を制せんか爲め罷向ふ所に紹運
 其旨趣を用ゐす強て楯をつかるゝ故力らなく城ををとしいれ候なり當城も此儀納得し降參

あるに於ては隣交の約を堅くして人数を引とり候はんと扱を掛たりければ宗茂聞て返答にも及へきにはあらねども一通りの道理を云ましきにもあらずとて岩屋寶滿當城の儀は秀吉公御朱印を以て預り候へは島津の下知に従へどある條更に心得す紹運既に義死を遂候上は某も立花の岸根に軍勢を引請紹運追善の爲めに一合戦仕り其後にこそ申談し仕り候べけれどと答ける其より兩度まで手を替へ様々嘸ひしかども中々返答にも及はさりけり兵庫頭今は早攻亡すより外はなしと議定したりけるか京勢の先鋒豊前柳か浦に著陣せしと聞えしかは酷暑の折から岩屋にて宗徒の勇士廿七人討死し残る兵も多くは手負なりければ此勞兵を以て堅城に攻かりなはなとか大半討れさらなましひなる事を仕出し夜に紛れて引んより軍を止めて歸らんにはあかしとて近所の在家に火を放ち八月廿四日に陣を拂て引退く是偏へに紹運岩屋の城に於て粉骨を盡されし故今立花のたすけとは成にける宗茂薩州勢の引退を見て足輕をかけ急に追拂へ今度島津に城を圍れ紹運の弔ひ合戦をもせず引次第にして術もなしと云れんは無念の事なるへしと有ければ隼雄の若者共我逸増に討て出聲を揚げてそ追かくるさしもの島津勢後陣以外の外に崩されて取次に成て引處を得たりや賢しと鯨波を作かけ透間をあらせず追つめ各手柄を顯しける中にも綿貫與三兵衛一番に鎗を入れ究竟の兵を討取ぬ味方小勢なりとは云へども兵練琢磨の功ある者共多かりければ驅引の機變を知り大軍にも恐れす退口に付てあふなけもなく勝利を得たりける是宗茂の雄偉常ならさるける故とを聞へし

宗茂攻高鳥居城并齊鞆彌事

明れば八月廿五日立花の軍士討て出同國糟屋郡高鳥居城に押寄る是には島津より立花城押のため筑後の星野中務大輔吉實同民部少輔兄弟を籠置ける此城昔は宗像か持たりしか久しく開城と成てありけるを此比俄に拵へ構へたりければ塙櫓等堅固ならず去れども東北は容易登り難き切所なり西は大手南は二の丸にて此二方地下りにして一町はかりも有んに竹木所々生たりける宗茂人数をかさに廻し若杉山に旗本を備へ薦野三河守同彌助小野和泉守を先陣の大將として其勢五百餘人十間飛より攻寄る搦手は毛利家の援兵二百餘人須惠村の谷道よりを攻登る城中に籠り居たる三百餘人の兵共鯨波を合せ矢炮を頻りに放ち掛け防ぎ戦とは云へども寄手は是を事ともせずして塙下まで必至々と詰寄たり中にも丹半大夫谷口喜右衛門小田部新助沓掛掃部一番に塙際に付けるか小田部は右の眼を射られ半大夫は鐵炮にて胸板を打通されて忽死す宇の美善四郎臼杵新七薦野三河か從者安部新助宮下喜太郎も此所にて討れにけり續て安東津之助十時傳右衛門立花次郎兵衛同三大夫池邊龍右衛門十時但馬内田因幡由布五兵衛三河か手の者横大内新五郎安武六郎清水伊右衛門など攻登り難なく塙を押破て城中に亂入る中にも小野理右衛門と云ける者真先に驅入て役所に火を掛けたりければ城兵等を見てのかすましきと追詰たり理右衛門唯一人なりければ叶ふましとや思けん塙の上より城外へひらりと飛ぶ三丈計りの嶮岨にて然もくいせ多き林の中に落けるか何の疵をも得ずして危き難を免れにけり斯て陣屋に火移りて猛火いよ／＼さかんに燃

上り寄手は續て攻入れれば星野か兵圖を失ひ烟の中に迷ひふためきける處を此に追詰彼に
 関を作りかけて頃刻に變化し射伏せ切伏せ息をも續せず攻戦ふ大將星野中務大輔吉實は
 櫓に登り諸軍を下知して居たりけるを立花次郎兵衛鎗ひつさけ走りかゝつて突ければ鎧の
 上帯を突切り二の鎗を突かんとするに急に奥へ逃入けるを十時傳右衛門續て追つめ突伏た
 り民部少輔今は早是までなりとて陣頭に進み出大音聲にて名乗ける是は吉實か舍弟民部少
 輔と申者にて候當城持ちかたければ唯今最後の戦を挑むなり我と思ふ者あらは出て太刀
 打し人に見物させよやとを匂りける時に小早川隆景より十七騎の援兵の内より小男なる武
 者一騎かけ出是は安藝の國の住人横山與三と申て生年十七歳に罷成候戰場に出事すてに七
 度高名六度今一度の望にて此度當城へ趣きしなりいて去らば某か手並の程を見せ申さんと
 て走りかゝるを民部少輔何程の事あらんと大太刀振上げ冑の正向破れよ碎けよと丁度討を
 受流してつと入り何の手もなく仰けに押伏せ其儘上に乗かゝつて首掻切て差上げる城中殘
 らす討れにければ寇火は滅す人なき儘に役所々々に移り行き姑蘇城一片の煙とこそは焼上
 にけれ十時傳右衛門は吉實が首を取しかも首帳には立花次郎兵衛と記されよと云次郎兵衛
 聞て是は思ひも寄らす某は突損しぬ正しく討取たる人こそ高名なれと云ければ十時いやい
 や獵場と戰場とは同例なり初手を本とするそとて辭讓しけるを宗茂聞て兩人の志を感心し
 昔日陸奥の軍に由利八郎伊達泰衡生捕し相論和田畠山西木か國衛戸か首を争ひしよりは聞よかり
 ける事ともかなとて兩人共に褒美に預り感狀を賜はりける去れば齊の景公夷儀城を攻し

とき東郭書と云ける者先登せしかば鞆彌これに續て進む後に景公鞆彌を以て先登とせられ
 けるを鞆彌か云白幘にして狸の裘を衣たる者第一番に進む臣は是に従ふと云へり景公これ
 を尋ねられけるに乃ち東郭書なり景公大に感して孟之反不伐とは二士の事なるへしと稱美
 せられしも今の二人に異ならず高鳥居既に落城したりしかは直に岩屋へ押寄る此城には秋
 月より桑野新右衛門と云けるに僅の人数を相添て籠らしめける處に寄手の内より件の理右
 衛門白晝に忍入り櫓に火を放ちにければ城中大に驚き騒ぎ如何はせんといはつる處を透さ
 す関を作り掛て攻入ける程に城兵一支も支へずして皆悉く敗北せり小野か計策あらすんは
 少しは隙も入へきに早く火を掛たりける故兩城忽ち手に入事誠に類なかりし働きなり是に
 依て關白秀吉公より宗茂へ感狀を下し賜はりける其文に曰く

去月廿七日對安國寺 黒田勘解由宮木入道書狀并首註文今月十日披見今度其表島津相働
 味方之城二三箇所も手もろく相果候處其構之儀も無心元思ひ輝元元春隆景其外人數追
 々指遣候處に立花城無別儀相抱候さへも忠節無比類思候處に去る廿四日敵引退候刻足
 輕相付け敵多討取儀手柄之上重而高鳥居東西攻破城主星野中務大輔同民部少輔を始其外
 數百人討取首註文到來誠以粉骨のだん中々不申及候此以後之働大事に候條卒爾の戰無
 之様に可被仕候尙人數追々差遣其上輝元元春隆景兩三人一左右次第令出馬九州逆徒
 等悉く可列首候條得其意尤に候然者爲褒美新地一稜可申付候間突鎗高名仕り忠節
 之輩に可令支配候彌成勇候様に可申觸事專要に候委細安國寺黒田宮木三人可申也

九月十一日

秀吉判

立花左近殿江

立花左近將監對三人注進狀於大坂令披見候今度薩州勢出馬し味方の城數二三箇城責め落すに付立花之城無心元存候處相怵るさへ我等に對し忠儀甚布存候且高鳥居切崩星野中務大輔同民部少輔始數百人打取首帳到來天下之覺不過之候誠九州の一物に候何の國にても一廉新地可宛行者也此趣立花初同家中の者共に能々申聞自今以後卒爾の働無之様に可相達也

十月三日

秀吉判

黒田勘解由殿

宮木入道殿

安國寺へ

廣門襲五箇山の城井田原爲奪統増事

筑紫上野助廣門は筑後の國大善寺に押籠られて居たりしか薩州勢歸陣に付て廣門をも本國へ引越へしと沙汰する由を傳へ聞き若も彼地へ下りなは争か運を開くへき然らば某が世に至て家を失はんも薄情所詮有無の二つに懸て此處を忍出舊臣等を招集め秋月勢か五箇山に籠り居たるを攻取り來春殿下の御進發を相待つへしと思ひ立て竊に計策を廻し人數を集める程に七八百人も有と聞えければ時至りぬと悦てやかて合圖を究め番兵等を忽ち三人切

殺す思ひ寄さる事なりければあはて騒く其間に馬に打乗り策を揚て一散に馳行き久留米の城に使者を以て御通し有るへきやと云せければ只知らぬ體にて候はんと云ふ其より筑後川を打渡り龍造寺の領内に入しかは政家案内者を出さる處に舊好の者共馳せ集りて一千餘人に及ひしかは廣門氣をひて直に五箇山に押寄せ城番坂田藏人板並大炊を始として皆悉く討取り何の手もなく乗取て堅固に城を守りける薩州方の者共紹連の後室をは肥前勢に奪れの廣門は逐電しぬ彌七郎統増を取逃しては叶はしと本國差て急きけるか肥後の國高津加にて姑く滞留しける其間法華寺に押籠置さきひしく是を守らせける係る處に高橋舊好の者共何とを奪返さんと密に秘計を廻らしける中にも田原河内と云者穀商人に出立て船を轉して肥後の國松橋と云處に到り五六日も居ける其内に法華寺へ斯と申入ければ統増に隨從(順)したる者共の悦ふ事は限りなく伊藤源右衛門曰く表は警固稠しき故裏の方なる壁を破り夫婦の人を夫より落し某は残り止りて番兵等若あやしまは乳母子の中將を統増と號し刺殺し伊藤命を限りに防ぎ戦はんと議定して合圖の時刻を待けるか待期過て程も餘りに久しければ人を出して見せけるに路にて行逢たりけるに互に敵と心得太刀を抜散々に討合て彼者共は行方知らず逃失ける漏箭頻りに動き難人曉を唱る比にも成しかは其夜の巧は徒らに成るのみならず壁の破れ目藪の切れ目定て是を見出すへし如何はせんと案し煩ひ居たりしか納所の順芳と云ける者を近付右の趣委細に語り一向に頼みければ唯何事も某に御任せ候へと世に頼しう領掌して番の者共見出しけるを種々陳防に及ひぬればさて止ぬやかて藝州

に引越し祈答院に押こめ翌年までを居にける

豊前の國所々合戦の事

去程に毛利吉川小早川黒田宮本以下豊前の國門司小倉立石に著岸すれば殿下御旗本の目付も段々に下著したりける上方の諸軍勢雲霞の如くに充滿たり土佐國長曾我部土佐守元親も先鋒を承り四國勢を引率し九月十二日に豊後の府内に著陣し仙石權兵衛尉秀久と諸どもに大友義統に力を合せ仙石は淨土寺を本陣とし元親は瑞光寺に陣を取りにける然りと云へども年内は合戦を致すへからず來春早々進發し一々征伐すへければ其まては島津勢の引取らざる様に掛留むへしとの上意なり去れども豊前には敵城多き事なりければ毛利輝元渡海次第手寄の城を一二箇所攻落し首を盡く切り掛へし然らば逆徒等恐怖して豊筑肥に降參の者多かるへしと度々仰下されければ小早川左衛門佐隆景黒田勘解由孝高先づ豊前筑城郡宇留津の城に押寄する此の城には賀來の新外記と云者籠り居たりしを息をも續せず攻立て黒田の家臣母里太兵衛尉一番に乘入りければつゝいて栗山四郎右衛門後藤又兵衛井上九郎右衛門野村太郎兵衛久野四郎兵衛吉田六郎大夫同又助大野小辨林太郎右衛門以下喚き叫て攻入たり中國勢も同じく攻入りける程に忽ち城を乗破り皆悉く討取り夫より同國京都郡香春の城を攻落せば是れに怖れて馬ヶ嶽の長野三郎左衛門降を乞て孝高に従屬す小倉の城は隆景の手に入り又高祖の城主原田五郎右衛門尉信種も小早川に攻落されければ筑前にも彼の原田を始め降人となる者多かりけりさてこそ筑前豊前豊後の通路安心くを開けにける

黒田勘解由孝高計策の事

去程に黒田勘解由孝高は御目代として御先に下ると云へども必ず殿下の御下向までは戦はずして相待つへしとの仰なりければ如何にもして敵を味方に引入んする計略もかな有へきと思惟を凝しけるに九州の輩は皆田舎武者にて未だ秀吉公の威光を知らず漫りに我意を立ると見えたり其磧礫に翫て玉淵を窺はざる者は未だ驪龍の蟠れる處を知らず其敵邑に習て上邦を觀する者は未だ英雄のやどりし所を知らずと云けるは理り也先一術をなし見んとて武功の者を兩人撰み殿下の威勢を云ひ聞せ味方に參りたらんに於ては本領相違あるへからず小身の面々は俄に島津と手切して味方せらるゝと聞えなは指當て其身の幸となるへければ内々志を屬し奉り殿下御下向を待て速かに降禮あるへき由を云ひ含め其趣を廻文にも書せらるゝ是は若不慮の事ありて此文落散る事ありとも敵を欺く謀にして味方の煩ひにあらすとして使者に是を渡さるゝ間使は貝原市兵衛久野勘助なり貝原は小倉より海邊を経て筑前肥前を過ぎ肥後の國へ趣けば久野は豊前より筑前に入り秋月に到り筑後を経て又豊前の諸所を打廻り右の趣を云ひ聞せ廻文を相渡す去れば向士密に御味方に參るへき由内通せしゆゑ殿下御下向の後速かに馳參る者多かりけるは皆是孝高の智術より出たる處なり

豊薩軍記卷之六終

豊薩軍記卷之七

柴田紹安謀叛并帆足市彌太諫言事

孟子曰自暴者不可與有言也自棄者不可與有爲也言非禮儀謂之自暴也吾身不能居仁由義謂之自棄也仁人之安宅也義人之正路也曠安宅而弗居舍正路而不由哀哉といへば茲に朝日嶽の城主柴田遠江入道紹安は大友譜代の家臣にして日比は忠貞を勵しけるか忽心をひるかへし終に其身を亡してわらひを後世に止めける如何なる所以に依けるそと委く尋ね問ひけるに只聊の事にてそ有けるある時柴田郎等の帆足市彌太と云けるに向て曰鳥津義久國々の手つかひ又は内通あるに依り豊後を背き薩州に心を寄する輩多し付ては我も亦君に對て恨むる事のなきにしもあらず柴田名字は橋氏として敏達天皇^{三十一代ノ主}より五代の孫梅宮大明神の流れをくんで尤も堆かし今その末葉區々に分れたりとは云へども當國に於て柴田の姓頭たるは某なり然るに庶子の禮能は太守の御寵愛あさからざる故により我々を蔑如にし幕の紋に至るまで惣領式の五のかゝりに三ふさ橋を付け恣に振舞我々は外様の者と成し事口惜き次第なり禮能への恨は太守へ歸する處なればこの鬱憤を散せんと常々思ひ居たりしかとも折を得されは打過ぬ當國の威光も既に衰へんとし薩州は彌増に日々隨て盛なるなれば豊後も終に薩州へそくたりなん御旗本の諸城主も定て氣を替ん乎左あるに於ては我々は人よりさきに薩州へ内通に従んと思ふは奈何と語りければ市彌太志はし默然として深く思惟し申けるは當家數代君恩をあつく蒙りたまひて今又逆意を思ひ立ち

給はん事不義の至り御運の末かと存するなりたとひ如何なる恨みましますとも御恵みにかへられてあかるべく候はん次に豊薩興廢の事は末への事なりければ目前に計りかたし大職冠より十八代の後胤能直公當國に御下向ましくて義統公まで二十一代星霜四百年に及び興亡幾回か地をかへ候といへ共御威光今に至て更に減少ある事なし其上主君に向て弓を挽もの古來榮ふるものを承はらす秦の趙高は咸陽に刑せられ唐の祿山は鳳翔に亡ふ是皆君を襲ひ奉る天罰立處に被る吾朝にも其例多し申上るに及はす只今大友家の威勢ある内は義久國中の諸城主を謀り候とも用ふる者はあるへからず重代の君にたに謀叛ある人を何そ薩州に用ひ候はんや韓信に眞王の印を授けられしかとも項王亡ひて後高祖韓信を亡はされし事末代の鑑箴なり薩州の内通は皆謀と思召せ縦ひ大友家滅亡此時にあらは亡を俱になさるへし我家をたてんと欲して主君の國を傾けんとする御企返す返すも然るへからず殊に大守もたのもしく思召れ候へはこそ諸將多き其中に薩州の押へとして當家に命せらるゝ事生前の大幸誠に武士の面目也其上名將の御目利をむなしくなされ給はん事本意なきことに候はずや巧を弄して拙と成すとは是なるへし只此の事に於ては思召とまらせ給へと辭を盡し諫めければ紹安大に怒て主君を戴くへしと云異見をはなしつれとも汝も我を背くそとて敢て聞入れさりければ市彌太忠言耳に逆ふ世の習ひとて涙を流し居たりける紹安汝か云處其理なきにはあらねども日比の鬱憤を散すへきは此節なり我かく思ひ定めし上へは重て諫る事なかれと云ひ捨て奥に入る市彌太は獨り居て今こそ左様にの給ふとも後にそ思ひ知ら

せ給はんとて我屋に歸りぬ係る企ある事を宗麟ふられさりければ柴田を薩州押への大將として野津院中の侍に柴田等意同五右衛門久土知大藏同立蕃井上主税助羽津久主殿助稗田上總守臼杵兵部丞同掃部御久里隼人佐小川内右馬助中村左京進吉岡立好同助次郎同左馬助生野内藏丞同帶刀龜山右馬助同立蕃奈須五郎兵衛竹下右京進岩屋內藏助廣田下總守此等の者を相とへ朝日嶽の城に籠置る

島津家久豊州出張事

茲に豊前國時枝左馬助宮城數馬并に城井長野福島等謀叛を企て大友方の小給人をかたらひ従はざる者をは押寄て討果し杯して騷亂斜ならざるの由都甲備中守久志野彈正忠より豊後の府内に注進す此時諸國心を變せし最中なりければ大友一家の輩まで如何なる逆意か有らんすらんと心中計り難ふして如何すへしとの下知もなく誰向はんと云出す者もあらさりければ義統旗本を以て一揆を退治すへしとて豊前國京都郡幕の嶺へと進發ある仙石長曾我部も大友に力を合ん爲なれば見棄にも成かたしとて同豊前に發向す係る時節をうかひける柴田遠江入道紹安を初として大友家の功臣志賀入道道雲同道易村綱宗歴戸次立三同鎮連一萬川紹傳麻生常陸入道紹和等やかて密かに薩州へ内通し此處に乘しいと御出馬あるへしと告たりければ島津修理大夫義久大に悦ひ乃勢を相催し日を定て發せしめんとす大友宗麟此由を聞き急ぎ豊前へ飛脚を馳て義統仙石長曾我部へ早々歸陣せらるへしとを申遣はされける比は天正十四年十月二日島津義久軍勢の手配調て一手は兵庫頭義弘を大將として二

萬五千餘騎の勢を授け肥後通より發せしめ一手は中務少輔家久を大將として二萬餘騎を相とへて日向路より向はしむ此勢梓山を越て宇目の内へ打入由朝日嶽へ聞えしかは籠り居たる者とも定て先づ當城をを攻へきなればとて防く術を取々に各々評商したりけるに柴田はなにといいいたすこともなくこの染ぬ風情なりすてに薩州勢の先手は放火し近きぬ紹安元よりかゝる時節を思設しことなりければ外聞すへしと事を託せ己か手勢ばかりを牽して打出けるか其儘に寄手の勢に馳せ加はる殘る者共是を見て大に驚き怒氣天をついて憤激し紹安反逆する上はいさ追かけて討取んと進む族も有しかとも俄の事にてあるあひた擬勢をしたる計りにて爲方盡はて今は早せめての事にと青山に足輕等を出さしめ鉄炮をつるへて放たしめけるに薩州勢は鉄炮の一つも打返さずして三重の郷へ押通り松尾と云ける山を本陣として其後柴田紹安をは中書の人數相とへ井田天面の城に籠置れぬ是一つには新參の紹安なりける故により心元なく思はれて目付の爲の故なるとを夫れ三重の郷松尾山と云けるは元來藥師如來の道場にてそありける抑藥師如來と申奉るは東方淨瑠璃世界の教主にて十二願を建給ひ衆病悉除し醫王なり十二神將同心加護し七千の夜叉晝夜隨順して魔軍怨芥をはらひ坊閣の繁榮を守り給ふ就中手裏の一壺に拵苦與樂の三藥を納め給ひしは壽命久存の妙藥なり經曰以諸法藥救療三苦顯現道意と云へり係る尊き靈佛の鎮坐まします處なる故に松尾山廣福寺と號す高山聳へ風景備れり東の方は溪深く奇石峙ち滑かにして鳥ならては翔りかたし西南北は岸高く松樹葉茂して楯の如し家久是を根城と定め尾崎手崎に櫓を

上げ多くの守りを付置外聞夜廻り宵折ホトの聲喧く夜を驚す用心尤嚴重なり

栢野城和睦事

去程に島津中務少輔家久は豊後國大野郡三重郷松尾山に陣營を結ひ是を本陣と定めて兵を分ち諸所へ差遣はすの由其聞えかくれなかりければ同郡緒方庄の武士軸丸藏人同大膳一黨近邊の郷民百姓等を驅催して二百餘人栢野に城郭を構へ再將籠り居たりける此栢野城と申けるは四面悉く岩壁巡りて北に大河の流を帯ひ只一口の要害にてそ有ける係る處へ十月中旬薩州の白坂式部伊智地民部少輔川上大炊助并に高知穂三田井正利の家臣弘呂木左京進老戸民部少輔此等を宗徒の大將として其勢一千餘にて栢野城へ押寄る待設けたる事なりければ城中よりも討て出互に鉄炮防戦して相引に颯と引人馬の息をそ休めにける夫戦は勢の多少によらず將の謀に在とは云へども實は寡は衆に敵せざる習ひなれば城中僅の勢にて楯籠り大敵を引受援兵とても有さりければ頼む甲斐なき身の有様往末の程覺束なくなましいなる軍を爲し城を攻落されんより一旦敵に和睦して隙を窺ひ岡の城主志賀太郎親次に竊に示し合せ重て素懷を達せんと既に議定一決して薩州勢に使者を立降參を乞しかは薩州勢も此上は互に申談すへしとて即ち川上大炊助一組來て城を請取軸丸一黨彼是同城にて日を送りける

佐伯太郎惟定討薩州使者事

島津中務少輔家久謀を廻らし佐伯太郎をすかし味方に來らしめんと欲し同廿三日に玄西堂

と云けるに勇士十九人を相そへ佐伯の内切り畑と云所まで差遣はされければ在所の者共榭ツキ牟禮の城に是を注進す佐伯太郎これを聞て一族佐伯右衛門大夫同大膳同久左衛門高畑伊豫守同理兵衛同勘左衛門泥谷肥前守栢江兵部丞沙月小兵衛泥谷大和守杉谷兵部丞同帶刀等を先として三千餘人を召集て曰我今若年たりと云へども思ふに薩州は父及び祖父叔父の怨敵なり其上大友家に對し別心すへきにあらされは和談手切の返答か左なくは使を討て捨るか二つの間を出へからす面々如何か思はれけるそと有ければ安否第一の議定なる故何れか然るへからんと衆議區々にして未決處に惟定の母障子を開きするくと出て曰最前よりあれにて委細聞けるに惟定の所存尤至極せり何そや敵に従はん敵若大勢來らば各々防ぎ戦て叶はぬ期には討死し惟定にも切腹せよ我も自害を遂なんと面色かはり云れければ理の推處至極して皆尤とを同じける是上は使者をすかして招き寄せ道にて是を討へしと衆議一決し去らば誰をか切畑へ差遣はすへき高畑伊豫守か曰杉谷帶刀を用へし此人もとより謀計あるのみならず辨舌巧なりければ然るへからんと申すに付帶刀にそ定りける斯て杉谷帶刀は彼地へ到り禮待する事太た厚く肅々然とそ持成しける時に玄西堂の曰我々是へ參上仕しこと餘の儀にあらず島津家久今度當國へ發向仕るに付惟定公の盛徳内々承り及はれ好みを結ひ度由にて某等を差越し候此旨仰せ上げられ御承諾あるに於ては某等に至るまで大慶是に過く可らすと十九人の士諸共に皆一同にそ述にける杉谷聞て其仰せをこそ内々冀ひ候ひし所なれ惟定若年なりければ家中何れも申談し大率内意相究り候然る所以は薩州の大軍に佐伯

勢を比ふれば九牛か一毛蟻螂か斧とかや誰か家久公の鋒に向ひ干戈を争ふことを得ん斯の如きの御使は天より賜へる所の幸佐伯の家永く繁榮すへきあるしなり昔年佐伯より島津家へ婚姻を結ひし例も有なれば彼是以て昵近を願ひ候なり昨日までは籠城の用意とて塀柵の構へ仕りしか明日は左様の所をも御目に掛ん更に淺間なる事にて候也と云了りて席を退珍膳菓肴の美を羅ね酒を勸て饗應し態と時刻を移ん爲那邊道邊と獻酬して宴も益々酣に盃しはく傾きければ日影もつれて山の端におちいりなんとそしたりける杉谷申けるは爰は賤き民家にて見苦しく候へは今夜の御宿は是より十餘町を隔て龍護寺と申すに惟定申付置候いさゝせ給へと誘へは只々御返事をは是にて承り候はんと云けるを兎角勸て伴ひ出暮に及へは民家より松明を出さしめ前後に振立て帯刀は跡押へにぞ打にける去程に番匠か淵には此者共を討んため廿餘人忍ひ居て今や今く待居たり兼て合圖のことなりければ帯刀大音聲を揚げ爰は危き峻路なるに松明の持様こそは悪けれと怒て馬より飛て下り大松明に火を移し前後左右を輝す其時伏兵同時に起て二十人の者共を十九人まで討捕ける中にも甲斐宮内と云ける者番匠淵に飛入けるか水練の達者なるにや有けん危き命を扶り難なく逃去失にけり翌日首帳を白杵丹生島に披露しければ宗麟其忠貞を感賞あつて袖判を加へらる

判 今度島津中書和談之使差越之處於番匠淵悉討果す首帳令披見候誠に無二之御覺悟感悅之至也則加袖判者也

- | | | |
|--------------|----------------|-----------------|
| 首一 使僧 柴田左近討之 | 首一 新色三郎高畑理兵衛討之 | 首一 新色黨 高畑勘左衛門討之 |
| 首一 沙月兵左衛門討之 | 首一 依諍論討捨 | 首一 江口源次郎討之 |
| 首一 矢野大炊助討之 | 首一 泥谷左京進討之 | 首一 泥谷左吉討之 |
| 首一 護進寺侍討之 | 首一 津井太郎右衛門討之 | 首一 高畑次郎左衛門討之 |
| 首一 奈須右馬丞討之 | 首一 泥谷志摩守討之 | 首一 柏江兵部討之 |
| 首一 泥谷左京内侍討之 | 首一 河野三左衛門討之 | 首一 孫三郎討之 |
| 首一 沙月小兵衛討之 | | |

天正十四年十月廿三日

爰にいかなる者かあたりにけん番匠淵にて惟定和談の使者を討たりしを一首の狂歌に讀なして家久の本陣松尾城の東の手崎に立にけり
カキを使を打すみ曲は番匠淵コレサタム惟定るは深き忠臣

宇目朝日嶽の追手にも同札をそ立にける家久是を見て土持次郎九郎親信か諫を納し故に依り加様の事の出来て世の人口に及ひけると悔まれける其後家久佐伯堺に於て土民を一人生捕置しを召出し佐伯太郎惟定の軍中の成敗を問れけるに彼者答て太郎惟定と申けるは生年十八歳にて候か士を憐む事ふかくして日夜城中を周廻し常に酒飯を送與へ殊に寒夜を防ん爲めには暖酒を手から盛り懇意を盡され候家久それはさもあんな勢は如何程ありけるを下郎は勢の多少は不知先下け針を討程の上手の鉄炮三千挺御座候とを申ける家久三千挺

の筒はものゝかすならず山田土佐入道匡徳今惟定の家にあり彼は一騎當千とも云つへしとありければ諸人は是を聞て世人の思ふ所とは拔群替りたる氣宇なるかなと稱嘆せり

高尾城合戦事

其比大野郡緒方庄に堀中務鶴原因幡守江民部少輔沖津道閑藤井左近と云ける者を先として二百餘人の郷士ありけるか薩州勢押寄る由を聞よりも俄に高尾と云ける處に要害を構へ追手には馬場を通し其旁を虎落竹にて垣を結ひ柵をふり惣外かには土手を築き塀をぬり又其外にも竹虎落の垣を結廻し弓鉄炮を矢挾間に配當し敵寄來らば續け討にと用意し居たりける處に十月廿七日島津家久の侍大將伊集院美作守野村備中守白濱周防守相良民部其勢三千餘にて押寄せ高尾の麓を打圍み刀鎗戈鋌を並へしは稻麻竹葦の如くなり去れども急に攻んどもせず使者を以て當城の儀は和融を致し好みを結ひ度候承諾あるに於は互に質を取替すへしと云送りける堀中務丞藤井左近江民部少輔阿南但馬守古庄刑部少輔等議定しけるは寄手は多勢味方は無勢奈何に矢猛に思ふとも叶ふへからず先今度は敵の望みに従ひて降人となり時節をうかひ重て本意を遂へしと即質を出しければ敵も質を遣しける既に和平調ひ向後心安からんと安堵の思ひを成處に薩州勢如何なる思慮か出來にけん高尾より出し置たる人質を忽に殺戮す城中よりは是を見てさては和談は偽りなるをとて冲天の怒を成しやかて薩州よりの人質を城外に引出し情なくも生なから大竹に指貫きて立置き是上は味方の一人敵の三人五人にも當る程なる働して切死すへしと激發したる折節曳や聲し

て押寄る城中には兼てより敵を間近くをひきよせ討伏んどの巧なれば外かはその城戸をは態と堅めすして矢一筋をも射出さす静りかへつて打たりける程に寄手は是を幸と喚き叫て攻上り矢掛り近く成りけるを時分はよきそと弓鉄炮を土手の挾間より頻に放ち掛けたりける沓の子を打たる如く群り立たる勢の中なれば二騎三騎つゝ射落ともあた矢は更になかりけり先陣多く討るれ共後陣は是をもどもせず猶も喚いて攻上れば城中よりも切て出討つ討れつ爰を先途とせり合ひ戦ふ度毎に尸は積て累々たり第三度の戦ひには城兵坂の半途に出義を鉄石よりも堅くし命を鴻毛よりも軽くし必死となりて戦へいさしも勇みし薩州勢こらへす坂を引退くを猶しも進て勝にのり走り下り走り下りて雄氣を勵まし戦ひけるか元來對揚すへき勢ならねば此彼にて討れにけり寄手は彌いさみを成し四方八面より攻上り火出る計りに戦ける薩州方は多勢にて討るれども勢すかす城兵は命限りに戦ふ故毎度に勝利を得るといへともまたいまたいに減少す去程に阿南但馬守も衆に抽てい毎度に勇剛を顯はしけるか深手を負て引き退き目もくれ心も亂れて息もはや絶々と成にける此但馬守に男子なく只一人の娘をもてりかしつかれて深窓にありし時よりも心操優にやさしく貌も世に勝れ紅顔翠黛言にたらず艶にあてやかなるけるか早や十七歳になりけるたらちねの寵愛淺からざりし故此度の籠城にもどもに籠りたりけるか父痛手を負て早や浮世のことも頼みすくなく覺えけるに絶入り伏沈み泣啼かかれなけきけるかやうく父の手をとりて此年月何となく暮せしも父上の世にいましける故にこそかやうに長り侍き今別れ進らせて誰を便に

存へき同しくは死出の山三途の川とやらんをも共に仕へまひらせてこそ思出とも成へけれ
と云畢て白練の鉢巻し括袴を着父か帯せし太刀を佩ひ敵の群り居たる場へかけ出たりける
其有様誠に思切たる體にそ見えたりける其容貌の美麗にして優にたへなるよそはひ華薬夫
人の花の面欺く程の姿なる故いかなる島の夷なりとも心まよはてあるへき我生捕んと馳向
ふ元來思定しことなりければなしかは少も臆すへき先に進む兵の高股を切て落し續てかゝ
るを真向二つに分割は二人はあへなく果にけり其後十餘間をり下り戦ひけるを尙生捕んと
せしかとも兩三人切伏て小高き處にかけ登り太刀の鋒を呀て真倒に落貫れてそ失せにける
剛なる女の有さまやと見人聞人其志を語り傳へて皆哀感を催せり其後荒手の五百人一度に
瞳と込入はとも死すへき此命いつまで生て何かせんと死を争ふて敵陣へかけ入く戦
へは堀藤井阿南も終に討死して頼む方なく成にけり俄に拵へたる要害なれば堀の壁もかた
からす搦手より寄る勢に堀棚共に破られ前後より挿れて何れを防く様もなく命かきりに戦
ひけるか巳の刻より始て黄昏までの合戦に終に陥れられける翌日栢野城に和談し俱に籠て
居たりける緒方の者共薩州勢と相共に來て死體を聚め斂るに高尾は二百餘人にして薩州勢
の討死は一千有餘とみえにける此日岡城よりも援兵あるへかりける處に島津兵庫頭義弘朽
綱に在て八山木原表へ諸勢を出すの聞えあり定ててたてのあるへき間さしをくへきにあら
すとて所々の勢を驅集め騎群表へ出張すへき用意ゆる高尾の加勢はなかりける去るに依て
落城す是皆天運の極る處に依るなるへしさて伊集院美作守は和談を破るのみならず士卒

を多く討せしこと君に對して不忠の至り我一生の不覺なりしと後悔の聞えありしとかや去
れは世俗の諺にも禍は下より上に通すと云へり其比緒方の庄をは堀中務軸丸大膳兩人して
を領しける然るに栢野城は軸丸領地にありけるか近曹藤井左近か下人と軸丸大膳か下人と
口論を仕いたし其理非の落着に隨て堀と軸丸不快となる去るに依て今度の合戦起りしに軸
丸領の栢野に籠城せんは詮なき事と思ひ俄に高尾を要害とし今かく亡ひ失にけり高尾は高
きのみにして地の利宜しからす兩人心を同して栢野城に籠りなは要害堅固の地なる故定て
恙なかるへきに僅の意趣によりてなり古人も小不忍則亂大謀とは斯ることをや云らん後
人は是を鑑て心有へき事ともなり

稻富片ヶ瀬原出張事

志賀太郎親次か籠り居たる岡の城と云けるには薩州勢豊後へ亂入せしかとも寄來ることな
かりしに爰に稻富新助と云ける者去々年肥州花の山並に高森の城に於て云甲斐なき負軍を
し義久の覺も疎々しく無念骨髓に徹り鬱胸今に晴やらざるにや一族郎等五千餘を引率して
岡の城邊片ヶ瀬原に出張す親次是を聞て老臣等を集めて曰く我先祖より當郡を領して代々
敵をなひかし城をほふることありとは云へとも未だ敵に致されず然るに今薩州の奴原館の
邊境に亂入すること存外なれ暫もさしをくへからす急き馳むかつて蹴散すへしとて輕卒三
百餘人に鉄炮を持せ追手口滑瀬の橋の邊りに向はしめける此所に兼てより河邊に堤を築き
矢隙を明け置たるに三百挺の筒を伏せ鳴を靜めて居たりける斯とは知らず稻富か先驅の足

輕五百人橋の邊りに到りけるを時分はよきと足輕大將下知すれば待設たる三百挺つるへ放しに打掛る更に佗矢のあらざりければ死生は知らず討る、者許多にそ及ける案に相違やしたりけん片ヶ瀬原の難所の坂を我先にと引上るを岡の者共口々に稻富殿こそ先年肥後の國高森か城に於て志賀の勢に追立られ這々の體にて逃られたりけるか漸く其勞止て又今度も逃らるへき爲の御出かたとそ言ける稻富終に引取しより以來岡の城へ薩州勢の寄來ることなかりけり

野津院諸所合戦并宮千代丸兄弟事

去る十八日の比なりけるに薩州勢野津院へ押寄る由聞えしかは廣田大膳臼杵掃部助同内記兵衛鎮實同又兵衛尉廣田彈正左衛門同内右衛門同新助同喜右衛門堀民部丞同隼人佐井上左馬助同兵助岩屋道閑等を大將として同所川登なる王子の城に行き上り今やと待ける處に白濱周防守尾合伊勢守兩人を大將として寄來る城兵元來待設けたる事なりければ矢先をそろへて散々に射たりけるに敵は押寄せたるのみにて一味の望みなる故へ敢て戦んともする事なく只一向に和を乞て三日三夜に及ひぬれとも耳にも更に聞入す剩へ悪口して討取れ討とれと計りにて矢炮を放ち掛ければ力ら及はずそれよりも中村岩瀬と云に引退く城中の兵も王子を去て八戸に移陣し居たりけるか薩州の隊將鎌田筑後守と云ける者川登の留村に陣營して有る由を十一月二日臼杵内記兵衛鎮實聞と均しく押寄せ筑後守を討取りぬ其後薩州勢恩塚刑部左衛門伊智地丹後守兩人を大將として其勢五百餘人にて吉岡原に出張したり

けるを臼杵内記兵衛廣田喜右衛門尉わつか二百餘人を以て押寄せ勇猛を振て攻戦ひ敵陣を揉崩し終に兩大將を討捕て勇進て引退く爰に岩瀬の要害に柴田御久里奈須利光宗立とて何れも勇士の譽ある究竟の兵とも籠り居たりける處に薩州勢押寄せ攻動す事をひたし去れども要害堅固と云殊に兵練琢磨の剛の者共楯籠りたる事なりければ多勢の敵をこどもせず得物々々を提げ出大勢に割て入り追つ返つ討れつ或は矢炮を放ち掛け火出る計りに戦ひける薩州勢の討る、者惣て九十八人内利光宗立か手に掛て甲首八級をそ獲たりける去れども寄手は多勢にて入れ替く戦へは城中次第に勢盡て終に落城したりける討殘されたる者共は己か武勇を顯はして死を遁れたる者もあり足弱なりける老幼は皆生捕とそ成にける中にも柴田大藏か二男宮千代丸とて生年十三歳に成りけると及ひ其妹を生捕て大將の見參に入れけるか幼稚の小冠者なる故に侮てや繩をもかけす尋常なる有様なりければ大將間近く召しけるに寄ると均しく懷中より小劍を抜て走りかゝり一刀に刺通し忽ち痛手を負せける左右に候せる郎從等驚き騒げと甲斐をなしかて宮千代丸を刺死せば妹も亦懷中より劍を抜て即坐に彼の士を突殺し忽ち兄の敵を討つ前代未聞の行跡なり於是郎等又妹を殺しけり幼稚の身として比類なき働き千英萬雄譽へを取るに物をなし誠に青々たる一寸の松の中に棟梁の姿ありとはかゝる事をや謂ならんと惜まぬ者こそなかりける去程に薩州勢岩瀬の圍に籠り居たりける處に野津院の侍中村左京進同與右衛門同善四郎久土知刑部左衛門同縫殿奈須右馬助土屋主稅助竹中飛驒守荒瀬隼人佐等忽ち野心出來て大友方を叛き敵と一

處に楯籠る暴惡の程こそ淺ましけれ八戸の圍に有りける者共かくと聞より大に怒り同月八日吉良宗伯同傳右衛門尉臼杵内記兵衛廣田大膳堀民部井上左馬助是等を宗徒の大將として岩瀬の圍へ押寄せ叛逆の輩及薩州勢に至るまで悉く討捕にけり

堅田合戦之事

島津中務少輔家久は佐伯か使者を討しことを大に怒て惟定を攻傾け首を見すんは有るへからすとて土持次郎九郎親信并に新色黨を大將として日薩兩州の勢二千有餘を指向られける此勢十一月三日に佐伯の内轟と云所に着陣し翌早朝に岸河内を放火して堅田の城村まで押寄たり是より佐伯か居城榑牟禮はそのあひ二里にて有りけるか放火の烟を遙に見て敵寄せたると思ひ寄らす是は如何なる誤ちにて出来したる焼亡やらんと申あひてを居たりける爰に日向國伊東三位入道の家臣山田土佐入道匡徳と云へる軍鑑伊東亡ひて後ち今惟定の家に據て有りけるか此の體を見るよりも是は失火の煙にあらす敵の致せる放火なりいさや此方も軍卒を堅田中山峠まで打出すへしと云ければ惟定元來勇敢猛威の若大將にて去らは彼へ馳向て暫時に蹴散し捨へしと早打出んとしたりけるを匡徳制し止めて曰く當城への寄せ口は野津因尾切烟の三所にて何れも忽かせにさしをくへき處にあらすさりぬへからんする侍に仰付られ然るへし且又一將を堅田に遣し防かせられ何れの持口にてもその弱からんする方へ御勢を添られて君はいつまでも在城あり謀を廻らされ然るへく候はんとを諫めける惟定是の議に信服し只左も右も面々の意見にこそは従はめとて匡徳と相はかりて長田右近

沙月主税助に三百五十餘の兵を添へ大坂本に差向て野津口を堅めしめ沙月大藏泥谷將監に三百八十餘を従はしめ番匠河原に陣せしめて切畑口を支へしめ角末土佐守管將監に三百五十餘を屬て中村に到らしめ因尾口を防かしむ次に堅田の先陣には佐伯大膳正惟末高畑伊豫守二番は佐伯久左衛門惟澄高畑新右衛門三番は惟定の舍弟進士統幸若輩ながら望むに依て長田天樂を相添る三軍に相従ふ士は泥谷左膳沙月兵左衛門泥谷左京進津井太郎右衛門矢野大炊助泥谷志摩守高畑勘左衛門杉谷帶刀同五右衛門高畑利兵衛河野三左衛門沙月與三右衛門高畑刑部奈須右馬丞泥谷肥前守廣末與三左衛門衛藤主水同彦右衛門寺島大學同助兵衛平井内記泥谷左吉岡部宗全是等の者を先として惣軍一萬八千餘久部と堅田の堺中山峠に打登る土佐入道匡徳は堅田三十六人を相従へ遊軍と成て敵味方の強弱を如何と計り居たりける去程に薩州より土持次郎九郎親信新色治右衛門親秀其勢二千餘人にて先陣は城村後陣は沙月邊に扣へ川に添て長蛇の陣をとる爰に佐伯勢の中に泥谷志摩守とて剛勇不敵の兵ありけるか匡徳に向ひ御軍術理に當り尤も然るへからんとことを覺ゆれ又某も存する旨のあるなれば申て見候はん今日は殊更朝霧深く立をひ咫尺の内も分ち難し此紛れに城村の敵に押寄せ候は、定て沙月江頭に引取ん其時味方の一勢を城村の山際を廻して宇山の古城に旗を立泥谷へ人數を出しなは敵は栢江に引退くへし其時二手も三手も同時にかゝつて一人も餘さず栢江の入江に追込たらんは意地よき合戦にてそ有らんと云ふ匡徳聞て御邊の軍法も其理なきにあらすと云へとも夫れは血氣の勇なり變動は常になし敵の轉化によるといへり軍は敵

をはざるとても味方を討せずして追散らすを全勝とせり。敵を沙人に追込んとせば潮に溺れて死なんよりは討死せんと思ひ定めんは必定然らば潮は敵に勇氣を添るに似たり。城を攻るに一方明ると云事も此理にて候也。兎角軍慮の事に於ては某しに任せらるへしとて終に志摩守か計を用ひす去程に佐伯方には敵を泥谷へ追拂はんには如はなしとて議定を成し勢を分て合圖のとまで委細に示し岸河内へ向はしめさて又一手堅田の先陣佐伯大膳正高畑伊豫守兩人は城村の八幡山へ打て出先の足輕鉄炮を進むれば薩州勢も歩卒を以てあしるふ其後先陣相かゝつて沙月河の邊にて暫しせり合ひ戦ふ處に二番備への佐伯惟澄高畑新右衛門も同く進んで突てかゝれば薩州勢たまりえず沙月川を打渡して江頭に引退く後陣の佐伯統幸長田天樂も城村の上寺田より勢を廻して宇山の古城に打登り馬印を押立る先陣猶も進て蒐れば薩州勢取て返し暫し支へて火出る計りに戦ひしか泥谷の尾崎を打廻て長池の邊に控へ居たるを佐伯の二陣三陣同時にかゝつて死生知らずに攻戦ふ泥谷左膳十八歳にて甲首二つ討捕れは同志摩守高畑利兵衛沙月與三左衛門泥谷肥前守江月左吉矢野大炊助高畑勘左衛門以下各分捕高名したりける兩國の兵とも又池長を引退き一所に成て寄するを待て居る處へ佐伯方の先陣後陣同時に突て掛り入れ替へし追つ追れつ爰を専途と戦ひしか兩陣互に颯と引き人馬の息をそ續きにける佐伯方に討るゝ者御手洗源四郎泥谷新次郎木下内記手負は十三人なり土佐入道匡徳は遊軍にて波越峠に居たりしが敵普坂の峠に引退かは幸ひ若し黒澤道に掛り日州三河内へ退きなば岸河内への味方の勢に示し置たる兼ての合圖相違しては悪から

なんと思ひ時に至ての事なりければ軍兵の指物を少々集めて紙を取合せ角取紙の刷牙を拵へ又波越の觀音堂に入て白布の新き斗帳のありしを申請け刀刃(尋)段々壞の要文をさも頼しく觀念し差物として何れも絞り足輕鐵炮四五挺程波越の山際を廻し竹角口へ打出て、在家の物かけ藪の見越に立置き西風にひらめかせ敵普坂まで引來らば鐵炮を打て狼烟を立て貝を吹よと合圖を示し土佐入道匡徳波越の峠にて狼烟を揚しかば宇山の古城にありける三番備の佐伯統幸長田天樂是を見て須波掛れよとて長池口に押寄る波越に扣へたる浮武者共は横合より突て出先を遮んとしたりける兩國の兵共さすか軍慮に長せし故變化忽ち機に應して敢て戦んともする事なく西野の在家に引退く匡徳か勢入替り追かけ追かけ戦へは踏止まりては姑く戦ひ戦ては引程に終に普坂の在家まで引退く竹角口の者とも時分はよしと兼て合圖の狼烟を挙げ鐵炮數挺を打鳴し貝を吹立たりしがは兩國の勢此の邊にも大勢あると心得て竹角を妻手に見て普坂峠に差かゝる佐伯勢得たり賢と瞳と掛つて互に鉄炮防戦す時に薩州勢の中よりも赤糸威の鎧を着たる武者一騎坂中に馬を乗放ち金の團扇を持って下知する處を高木越前守坂下の棕の木陰を楯として鐵炮にて眞直中を打通す敵兵是に怒りをなし坂を下りに押掛つて東風西風火花を散して戦ひしか日州勢數十人匡徳か手に討れて峠を差して引にけり佐伯方にも疵を蒙むる者多かりける是は普坂の戦なり岸河内へ向ひける因尾の士には柳井左馬助杉谷兵部丞同源四郎柳井兵庫助同雅樂助同彌右衛門三代勘解由稗田右馬介栢江新左衛門近藤久右衛門等を先として其勢二百餘人路の險難なるにより皆歩立に

成て押向ふ日州勢は樺か畑の峠に陣營して居たりけるか其日は朝霧深く降れ、ひしに放火の烟立交り十餘間より外は物の黑白も見え分ぬ程なりければ峰には大勢控へ居るとは覺えしかども未だ敵とも味方とも更に見分たさりければ因尾の兵籠に打寄り大音聲にて只今此山上に陣をなして候ひしは不審誰れなるらんと問ふ霧の内より日州三城の勢外庄狩野助今日の大將承り是にありとを答へけるさては敵と云まゝに矢炮を飛せて攻立る日州勢も歩立に成り抜つれて上より落し千雷萬鼓天地も裂よと呼てをめぐりてか、れはさしも武勇の因尾勢忽ちに追立られ鬼ヶ原まで敗北す去れども杉谷兵部丞近藤久右衛門三代勘解由と云ける者三人蹈止まり兵部丞鐵炮を膝臺にのせ真先に進んたる兵を眞倒に討伏る日州勢是に少し辟易して狐疑する處を又玉藥を合せ膝臺にてたむる處を日向國の住人新名九郎元近よつ引てへうと射る杉谷か左の高股に矢柄半はにすはと立つ其矢を抜にいとまなく又鐵炮をとうと放ては此度、矢つはあやまたす兜蓋の前立に日の丸打たる武者を打ふする時に又矢一筋來て刀の鞘に中り止ける近藤久右衛門も究竟の勇士を討浦ぬ係る處に初め敗軍したりける因尾勢皆ことごとく取て返し爰を専途と攻戦へは日州勢打負て我先にと逃行を猶も頻りに追かけて普坂の峠に押向ふ普坂にありし兩國の勢大に驚き爰に姑く止りなは敵に後ろを障られて惡かりなんと坂中の軍を止て引登り日州勢と一つに成り周章上を下へとさはさしか兵練琢磨の功を顯はす者と云ひ且多勢なる故に漸く長瀬原まで引退く佐伯勢も著登りに岸河内の勢と一つに成り跡を慕て追かけ追かけ討にける爰に矢野美作守と云者惟定の勘氣

を蒙り籠居の身となりありけるか今度の合戦に高名し歸參を遂へしと意口の駒いさみ進んで先驅を心としたる折節高屋か瀬の渡にて大の男の羽織の紋に金泥にて大文字に一足不去と書たる者を目にかけ鎗ひつさけて走り掛りまはし戦ひたりけるか矢野は老武者なる故に渡りの飛石にけつまつひてとうと伏を起しも立す乗かゝりて首を取り徐々と引く處を矢野か嫡子大炊助遙に是を見眼前にて父を討せ其敵を討すして争てか引は返さしと一文字に馳來り無二無三に討てかゝり終に彼の一足不去を討捕て父の首を金文字の羽織に包み敵の首を太刀に貫き引かへす比類なかりし働きなり斯て佐伯の先陣後陣列を分たす入亂れ揉立揉立攻戦ふ日州の片大將新色治右衛門尉扇の馬印なりけるを高畑伊豫守か勢頻りに追つめたりしかは即ち爲方なくてありけん捨て逃行しを立歸て伊豫守是を差あけ招かせけるに日州勢治右衛門こゝにあると思ひ此の物際彼この茂みを押分、出來て聚る處を佐伯勢をつ取つ、み微塵になれと攻立て新色又左衛門を沙月源兵衛尉打取にけり其より大越と云所まで追かけ行は日も早や西に傾て黄昏に向んとす匡徳百歩に三舎と云ふ事あり去來引取んと云ければ諸軍同時に勝鬨を取行てを歸りにける斯て榎牟禮の城に於て惟定首を實檢しけるに泥谷左膳申しけるは昨日堅田長池にての合戦に某か中間甲首を獲たりしを同名志摩守左様なる首を下臈か捕ては忽ち罰を蒙る物を我に渡せと云て理不盡に奪取候なりとを訴へける惟定聞て去れば彼の志摩守は血氣の勇のみにて武道一偏なる故に其餘の作法は皆ゆるし置く譬は綾羅錦繡は勝れし衣服なりけれども雨を防に至ては藁薦こそ功をなす志摩守は戦

塲の藁の薦にて有そとて座興となして笑ひければ何れも興を催して是非の議論は止にけり
 其後高木越前守を奉行として首及び軀を集て普坂峠の三處に埋め金剛寺に於て吊ひあり塔
 婆を書て建にける其文に曰く一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀、金剛般若
 の偈を寫す銘の文字は戦塲の尸と共に朽ぬれとも朽せて殘る今の世に普坂峠の三塚とて永
 くも跡をそ止めける抑今度土持次郎九郎佐伯討手の大將を被りしこと其故なきにしもあ
 らす彼の親信か父親成は日州半國の領主にて豊後の幕下なりけるか謀叛の企てあるにより天
 正六年戊寅三月に大友是を征罪の時佐伯惟教先陣にて土持親成亡にける其比次男親信は薩
 州に退去して死を免れ遺恨今に晴やらず去に依て佐伯表の大將を島津家久に請ひ向ふ尤も
 武士の志し斯あるへき事ともなり又片大將外庄狩野介と云けるは日州三城の内日知也ヒチヤの城
 主なり三城とは鹽見日知也門川の三つを云へり去る天正六年の冬日州高城軍の時には宗麟
 に從て島津義久と對陣し今又心ひるかへり薩州方に與力して却て大友方を攻む去れば聖人
 世に存て道を教る代にたにも仁義を知るは少なるに況や時今戰國にて彝倫の道に信もなく
 昨日の味方今日は又敵と成りゆく人心の轉變したる世の有様歎息かりけること、もなり

因尾の土民穴圍之事

其比因尾の穴圍に陰れ居たりし農民等敵の押寄せ來りしを許多討取たりける由如何なる巧
 を成けるそと尋ね問けるに其比因尾の士たる者は薩州勢を防んとて惟定に相從ひ柵牟禮の
 城に楯籠りぬ其餘の残り居たりける在々所々の百姓等は其まゝこゝに居たりなは如何なる

憂目に逢もやせんと各々栖家を立出て身を奥山の岩の穴恙なからん例しにも斯る自然の天
 工の有もやすらんと頼しくて賢くかこひ入もあり又穴圍も敵に搜し出されなは遁るへきに
 しもあらず只深山に分け入て何所へなりとも先きより先き足をはかりに往んとて雲を隣り
 と山又山深くを隠れ入るもありける彼の穴圍と云けるは因尾井の上と云ふ處にあり麓には
 大河流て河邊より七町か間は羊腸たる嶮難にして容易く登り難し行當りには一面の石壁あ
 りて上には層巒翠を聳へ佳景尤備れり高きこと十餘間もあるらん窓を明たる如くなる岩
 穴ありて内は左ながら平々と石を疊みし如くなるを土民等とも見計ひ穴の口まで繼橋或は
 綱を木にかけ置て傳ひ登れば自ら空に懸てさゝかにの蛛のふるまひいとあやうく是や誠
 に西天に度索尋幢の國ありて溪谷通せざる處繩を渡して相引て渡ると云しも斯やらん登りて
 繼橋綱を取ぬれば惟鳥ならては翔りかたし穴の口を板にて圍ひ矢狭間を明け板の外には數
 多の石を釣り雙へ或は竹の燒剛ヤをし或は釣弓などを拵へ置き敵寄せ來らば一番に綱を切て
 大石を落し掛んと巧みける如何なる勇猛剛強の士なりとも左右なく攻近くへき様もなき遠
 矢に射取ん様もなく誠に自然の要害なり去れとも心に任せぬは岩の滴り少くして僅に一兩
 人の喉をうるをす程なるゆゑ大なる樽を集て水を湛へ猶天水を曳んとて岩を穿ちて溝をし
 つらひ兵糧戰具等まで用意してこそ籠りにける案の如くに薩州勢七八百人因尾表を放火
 し濫妨狼藉せん爲に此の山際彼の岩間木の根をつたひ草を分け谷峰こへて搜せしか一人の
 生捕を案内者として此の穴圍を破らんと先きに進て百餘人圍の麓に寄せ來るを持設けたる

右の綱二三十計り一度に切て落したりしかは忽ち微塵に打碎かれ或は手足を痛ましめ悶へ苦しむ折節に圍の内より同音に閔を囁とそ作りける其聲山に響き谷に答へて高天も落やすらんとをひたし薩州勢大に驚き逃よと云ふ程こそあれ跡をも見すして逃行て再ひ來らざりければ危き難を免れにけり百姓等か戦場の出立は甲籠手喉輪を指革の衣服を二重にし所々に筋金菱金を入れ厚革の股引臙當をして鈍長刀爪なしなんと用意せり爪なしとは長刀の如くにして先きを一文字に作る或は二尺或は三尺柄も二尺五寸又は三尺計りに拵へ人も竹木も切る金合にして是は屏柵を破る道具なりさて又嶽王松の岩左ユヒラ筋なんと云ふ筋を左りに付直して通る程なる峻道の峻しき山を頼にて逃入りたりし者共は搜し出され害せられ或は生捕れにければ谷の埋木諸共に花さく世にも逢すして子のなる果を哀れなりける事どもなり狼烟漸く立去て鯨波も静かなりければ各家地に立歸る時の地頭の沙汰として穴圍に籠り居たる者共は一城堅固に持たる同前なりとて給人是を褒美し或は山に隠れ居て死を遁れたる者共は兼てより逃設したりける臆病者として悉く在所を追ひ拂はれにけり夫れ兵戦之場に屍を立るの地に必ず死せんとすれば則生し生を幸せんとするときは則死すと吳子か云ける辭の末實もと思ひ知られたり

虚無僧金沙事

茲に金沙と云虚無僧あり越前國より九州に渡りて筑後横岳と云處に虚無本寺ありけるに逗留しそれより方々徘徊して卒に佐伯に到りけるに薩州勢打入る折節なりければ思はざりしに

惟定の城内に籠りける有時金沙中の村と云處に所用ありとて行けるに道にて薩州の野郎共に行逢けるか金沙か老の肩にて負たる物を目にかけ頻りに奪ひ取んとす金沙は齡七十に及ふと云へとも元來劍術の達人にて討てかゝりける野郎か太刀を木刀にて打落すかさす太刀を奪ひ取り群りかゝる者共を縦横無盡に打立て二十四五人討伏せ残る奴原追散し尙山深く引て入る去れとも野郎立さらて此彼に入來る金沙は山中不案内にて間道なんとあるともなしとも白波の又寄せ來る事もやと身を巖窟の内ひそめて柵牢禮の城より外聞なんと來りなはそれに隨ひ城中に行んと思ひ待ぬれともそれさへ絶てなかりけり初より米一粒をたに貯へされは日數をふるに隨て彌飢にそ及ひける早離速離の海岸山に放たれて飢寒の愁深かりしも斯やと思ひ知られたり去れとも日比修し得たる四句の偈を唱へ掌をなめしかは則ち藥となりて飢渴の苦み更になく只何つまでも此處に居はやと思ふ心にて二十八日の日數を経て城中に歸りける其後薩陣引退けは城中の軍民萬死を出て一生に値ひ籠を出たる白鷗の雲中に歸る心地して喜悅の門を押開き思ひ思ひに在住すれば金沙も因尾と云所に往き杉谷兵部丞か許に於て去年の冬山中にて四句の偈の徳用により渴命を繼たる事共を物語したりけるこゝに杉谷同姓の者柳井の家を繼し法體の紹院と云る能書あり博識多才の者なりけるか金沙か言をつくく聞き昔も斯る例あり周の穆王寵愛の童子慈童と云ける者帝の枕を越へたる科により臣下怒て酈懸山に流す穆王流石に餘波をしくして四句の偈を慈童に授けさせ給ふ慈童山中にて忘れもやせんと思ひ岩間の菊の葉に是れを書く其葉上の露を嘗

れは味甘露の如し不老不死の薬となりて八百餘年まで猶少年の姿あり魏の文王のとき膨祖と名を替へ出たと語りければ金沙聞て相傳の時其儀も承り候か四句の偈に心を入れたる計りにて故事を忘失仕り唯今存候は何までも山に居て仙人に成るへき物をと語りける

津久見四浦合戦事

梅牟禮より東北の隅四里許りにして津久見と云ける所に四浦あり其浦々を兩人つゝして領しける鳩の浦には鳩兵部丞同源助久保伯には加島中務同右馬助深浦には加島三河守同主殿助越知浦には紀主馬助同九郎など云へる此等の者共久保伯と云浦に城郭を構へ俱に籠りて居たりけるに十一月上旬の比島津中務少輔家久使者を差越るゝこと數回に及ふとちが浦と云ける入江の沖に舟を寄せ御城へ物申すへし當國とても行末へなどか恙なきこと候はんや只時宜に隨ひ世に應じて義久に御同心あるへしとの使にて候なりと云ふ時もあり或は島津右馬頭よりの使者にて候なりとも云ひ又或時は家久の士尾合伊勢守か使なりと云時もありける城中より答へには幾回御使者賜るとも和親は叶ひ候ましと云ひ放ち重ねて使來りなは物も言はせず討殺せ先つ鉄炮の試みにとていつも使の舟を寄する處の沖に樽を浮へ城よりねらひ打けるに十に八九は當る程なる鍛練にて今や今やと待つ處に小船一艘漕よせ扇をあけて矢留を乞ひ島津家久の使なりと云終らざるに加島三河守種か島に二つ玉を込て姑しかためて放ちけるに矢盡少もあやまたす眞直中を通して舟底へとうと伏す思ひ寄らざる事なりければ俄に周章甚しく櫓械を直して逃んとするを鳩源左衛門も鉄炮にて又一人討伏

る其隙に城中よりあますましきと追蒐て十餘人乗たる者の首を取る其後使者は來らざりけり同十三日島津家久下知として兵船二百餘艘表に楯をつき比べとちが浦の入江に來り各々の舟より下りて同をんにときをつくり矢玉をとばせて攻轟せは城中よりも鐵炮にて互に打ちかう其ひゝき卯の刻の初より辰の刻に到るまで鳴やむ隙もなかりけり城中には物陰にありて討るゝ者少く薩州勢は露はなる故死傷許多なりければ暫く息を續んとて麓にさつと引退き舟の簀板を楯と成し或は竹木を束ねなどして又押寄る城兵鉄炮鍛練なるものともなれば大筒數多に薬を増し音すさましく打掛る楯の板もたまらはこそ手負死人猶彌増に出來にければ堺と云處に引退き其日の大將より福島の日州の在名なり肥前南五里に在光泉坊と云山伏を以て矢留を乞ひ討死したる者共の死骸を給り候て取斂め度由をを述にける城中にて思慮なき族は一向に渡すまじきと云けるを鳩兵部丞加島三河守紀主殿助同九郎是等四人か云けるは敵の望みを叶へすは是を深く憤りて夜を日に繼て攻へきなり晝こそ此の方利を得るとも夜は鐵炮放たれまし戦ひ數日に及ひなは玉藥等も盡き兵糧をも籠る事なりかたかるへし其上彼は多勢味方は無勢なりければ望みを叶へて引すへし引退きなは速に宗麟公へ言上し援兵並に玉藥等を申請ん左あらん時には當城いよゝ堅固ならん此儀は如何にと申ければ皆尤とを同しける其時使僧の光泉坊を追手の門へ呼よせて鳩兵部丞立出死骸御所望得其意候心靜かに取斂めらるへしさて今日の大將は如何なる人にて候や聞まほしきと大將の仰せなりしと問ければとも終に名乗らで死骸をはこととく取集め堺と云所に塚を築き塔婆を書て建にけり其文

に曰願以此功德普及於一切我等與衆生皆共成佛道斯て薩州勢界に陣營したりけるを城中より是を見て中にも二人大將と覺しき者の有けるを此處より鐵炮にて討へき者は誰ならんと云處に加島左京亮某打て見るへしとて種か島に矢倉を仕かけ且しねらうて居たりしか鳴ると均く一人とうと討伏る此鐵炮にや怖れけん忽ち陣を引にける其後曰杵へ合戦の次第委細に注進したりしかは宗麟感悅淺からず此度の恩賜重ねて申付へきなり薩州勢先きの遺恨を報せんため術を替へ勢を増し又寄せ來る事もやあらんとて鐵炮二百挺玉藥兵糧等まで賜りける去れども再び來らざりけり是四浦の者の勳功なり

志賀太郎謀攻栢野城事

同月四日志賀太郎親次家臣原田伊賀守中尾伊豆守を召て栢野の城に籠り居たる薩州勢の試に軍兵を炭燒腰か城に打出し小勢の體に見せ鐵炮を放たせよ敵兵討て出すんは士卒を引て返るへし我れ思ふ子細あればなりとて委細に命し中尾原田に大森大炊助後藤遠江守進肥前守を相添へ一千有餘の兵を授しかは則彼へ到り二手に備て一手を以炭燒腰城に伏置き先陣より足輕鐵炮二十挺進ませつるへて放たしめたりけるに城中より矢一筋をも射ざりければ重ねて鐵炮三十挺岩陰尾陰を楯として頻りに放ち掛けしかとも城兵は己か用心のみにして鳴を靜て居たる故次第々に鐵炮を腰か城に引取ける中尾伊豆守申けるは敵もし戦ふことなくんは兵を引て歸るへしとの君命なりと云へとも近々と攻寄せて一戦もなく引取んは餘りに甲斐なし一攻めせめて見んと云ふ後藤遠江守云く君命を背ても義の宜きことあるを

は權道と是を云ふ去れども時によるへきなり此の栢野は要害地の利に叶ひぬれば容易くは落へからず然るを強て攻んとせば味方許多討るへし此の意を以て遠矢を掛け勢の多少を見せずして威し計りとは宜ふらん只仰に隨て歸らんには如しと云へは殘る三人も是儀に同じ腰か城にて関をわけ岡の城へと引きにける其後十二月二日志賀太郎親次又栢野城へ向はしむ大將には志賀掃部助後藤遠江守進肥前守千五百餘の勢をつけ親次法を出しけるは軍勢を三分にして一隊を以炭燒腰城に置き旗指物等を多く建てさせ二隊は栢野城の東西の山の尾に張り備へを堅し守らせなは必ず三日の内に落城すへし戦て士卒を亡すことなかれ承るとて三將彼に馳向ひ命の如くに陣を取る去れとも城中より矢一筋をも射出さす翌日は十二月三日白坂式部少輔伊智地民部少輔高知穗三田井正利の家臣弘呂木左京進老戸氣部少輔四人より使者を以て今度此表に出張仕ること必しも親次殿御一人に對して敵する弓矢にあらず島津義久命せらるゝ故なればなり冀くは和睦を遂互に申談度由城中何れも其旨趣にて唯今降禮申上候はんとを述にける志賀掃部助是に對し其儀にて候は、親次へ申聞せ御返事をは此方より重ねて申入るへしと使者を返して岡の城へ達せしかは太郎親次予か察する處に少も違はざりけり敵既に軍門に降らは諸軍を引て歸るへしとの事により各歸陣成しにける孫子か秘せし不戦して敵を屈すと云けるも斯る事をや云ならん斯て岡の城よりも甲斐上總守を使者として和融あるへき御望委細得其意候向後心安泰に時光を送らるへしとありければ城中の兵共網裏の魚の忽に免れ出て深淵に息突き流す如くにて悦ひあうこと限りなく翌日

弘呂木左京進來て禮謝をのへにける此左京進は豫め高知穗正利より折々岡へ使者として來りし者にて有ければ親次懇意なる故に城中是を遣しける斯て翌年三月に豊州在陣の薩州勢悉く引退きける刻み同く廿一日に弘呂木左京進白坂式部兩人相共に岡の城へ來て今度の恩を陳謝しねんころに暇を乞ひ栢野城を去りしかは親次よりも後藤遠江守を以て大塚までを送りける雖^レ攻^レ敵國君請逃者扶^テ莫殺之雖^レ圍^ニ敵城敵將望降者扶^テ莫誅之と云へり誠^ニに弓矢の禮讓は正しくすへき所なり

利光勢討薩州先驅事

斯て島津中務少輔家久は利光宗魚か籠りたる鶴か城を攻落し直に府内に打入て大友義統仙石長曾我部を攻従んとて十一月廿五日に野津院の内細口村と云處に陣を移し實相寺太郎右衛門統國^{始の名は吉良勸解由}と云ける者近邊の郷民等を驅催し三百餘人にて武山の城^{細口より東二里許りにあり}に籠り居たりけるを軍兵を差遣して討しめたりけるに統國一戰に攻亡されて卒しぬ其日利光鶴か城に使者を以て和融いたさるへきや否や許諾あるに於ては人質を出さるへしとを申遣されける其比利光越前守鑑教入道宗魚は筑前の諸士謀叛を起して騒亂斜めならずと聞えければ大友父子より壓へとして三千九百餘の兵を與へて筑州名護屋^{立花城の北二里餘りにあり}へ遣はさる留主に居たる輩には宗魚の嫡子彈正統久同平助宗魚の舍弟成大寺の住侶豪永與力には高橋左近武士には村上三郎右衛門とて共に弓馬の道に達して力らよの常に超へたる者を始めとし上尾京都牧朝見徳丸但馬帆足黨池永板井淵橋本今村加藤原高畑桑畑岡部渡邊首藤佐藤衛藤

の一類を宗として兵僅に七百餘人男女老少驅集て三千餘人に過さりけり斯て城兵議定して云く寄手は多勢味方は無勢何にと猛く勇む共叶ふへき様更になし先づ此度は敵の望に隨て質を出して降をなし時の到んを待つより外は有るへからず然らば誰をか出すへきとて未だ決せざる處に牧宇之助と云者進み出某つねに君恩を厚く蒙り報するに處なきことを常に思候ひぬれば恐れながら姓名を御免し賜て御賢息と偽り人質に出へき由をそ申ける程に僉議一圖に極て宗魚の末子右馬助と名乗らせ敵の方へと出しければ則これを請取り百騎ばかりの中に打圍み其夜の應當村と云けるに守警してこそ居たりけれ利光入道宗魚は薩州勢豊後の内へ亂入し諸所に軍兵差遣し城々を攻動し我か本城へも近き中押し寄せなんと聞よりも夜を日に繼て馳歸り大友義統豊前の幕峰を引退き同國龍玉城に入られたりしに參謁し斯と申入しかは義統出て對面あり座定て後互に懇意の物語り酒を出して勧めらる宴も閑ならんとする比はひ利光威儀を正して云く今度の合戦察するに勝利を得ると難かるへし只討死と思ひ定めて候なりと申ければ義統なこりを惜まれて種々に是を饗應され夫より辭して別れ駒に汗して打はど同廿六日の暮に及びて入城したりければ寂しかへつたる城中も今は忽ち賑々しく七千有餘の勢と成て轍魚の水を得たるか如く籠鳥の雲を凌ん勢ひにて悦ひあうと斜ならず係て互の物語取集たる言の葉の搔^本ともなとか盡さらまし右馬助か忠貞まで残らす演説したりけるを熟々と打聞て敵人質を取からは和融に疑ひなしと思ひ打解居んは必定ならん去來や旁々其虛に乘し急に押寄せ打散さん右馬介討れんとの哀と云へ共さしをくへ

きにしもあらずとて其夜則押寄せ先鯨波を揚げたりける案の如くに薩州勢人質を取り心をゆるして前後も知らず臥たる折節なりければ関に大に驚き周章さはき立悶へ漂ける處を散々に切て廻る比しも廿六日の目刺も知らぬ暗き夜に方角とても知らざれば落行くへき様もなく只茫然たる計りにて皆ことごとく討れ右馬助も討死したりける同廿八日先手の野郎百人計り鶴か城を巡見せんとて來りしか竹中村の百姓一人生浦彼れに案内致させ利光村の様子委く尋ぬ彼者偽り云けるは利光村と申せしは鶴か城の麓にて平かなる事社の如し西は大河溶々として深きを帯ひぬ若し彼の所へ御越しあらん時城兵打出て叶ひ難も候は、川を渡つて逃れ給へ某淺瀬を存すれば最安候はんと實を交へ云ければ謀とは夢にも知らず先きに押立利光村中まで入り來るを城中よりもこれを見て高橋左近村上三郎右衛門兩人を先として其勢三百餘人一度に唾と蒐出中に取こめ餘さしとこそ攻たりけれ叶へき様なかりけり兼て期したる案内者一番に河に入る元より所のものなりければ水練は達者なり流れの早き川浪を眞一文字に渡りつゝ己か在所へ馳歸る野郎共相つゝひて岸を下りて見てあれは深淵藍を引か如し藤甲の軍なちねは容易くも超かたく跡には大勢追かくる是非なく川に飛入て浮ぬ沈ぬする處を皆悉く討捕ける中にも二人取て返し高橋左近村上三郎右衛門に走り掛つて無手と組を一々取て伏せ首かき切て棄てけり此所にて九十六人討捕城下に首を掛置ける敵四人討漏され川を渡つて歸りしに二人は路にて寒へ死す兩人は辛き命を助り本陣にこそ歸りけり薩州勢の兩度の先手許多討れたりしかは慢りにくゝや思ひけん容易もかゝり得ず川上の

瀬を渡つて五十騎六十騎程にて城の要害を檢閲する處に城兵も或は三十或は四十許にて川上を隔て付まはるに牛盜と云ける淵の岩上に五六人居たるを見てあるもの一人川邊に出て嘲哂し云けるは時今冬の天にして寒風はけしく身に入て堪かたき事恰も刃を刺か如しかゝる折節川に臨て悠々と徘徊しけるは奈何なる故にて候や察する處此間討れし人の爲めにとて流瀧頂などをし手向んとての意ならん殊勝と申さんするなれども逆も軍は成り難く剃髮染衣の身と成んと思ふ心の有るにより斯る業などあるやらん淺ましめ次第やな薩摩の國の習ひかと様々悪口したりける敵は大に怒をなし推參なる雜言かないて物見せんと鐵炮を丁と放てはあやまたてかしこにとどうと打伏せ胡録をたゝひて同音に咄と笑ひ城兵等かはるかに控へ居たりけるに死骸を取とを叫りける去れども取んと云者なし敵はいよゝ、嗤ひ去らば指圖を致すへし黒皮の鎧を着白猪の鞆に赤き團扇を持たる人出て死體を召さるへし是れ乃ち高橋左近なり元來こらえぬ血氣の勇者敵に詞を掛られなしかは以てためらふへき飛て出るを味方の者の度々の軍に不覺を取り負腹いんため偽引討取んどの巧なり彼かてたてに乗り給ふな棄てをかれよと止れども敵に辭を掛られて出ぬ法やあるへきと走りかゝつて振かたけ立歸らんとする處をあれ討とれとて鐵炮を頻に放ちかけ、れは雪の飛より猶去けし玉箭三つ身に中り又一つは頭をすりとをり一つは刀の鞘にあたり一つは右の横腹にあたり止りける年老て下もにさかり皮肉に在りしをほり出したりしとかや去れども剛の者なりければ是を者とも思はずして元の陣處に歸りにけり薩州方には先手の者共許多討れたりし

ことを無念にや思ひけん先陣の勢の中より雋雄の若者共五百餘人先度の恥を雪んとて十二月三日に押寄る由其聞えかくれ無ししかは馳向て遮よとて其勢三百餘人城より西に當る影木村と應當村の堺なる殿島と云所まで打出たりけるか未だ敵にも逢さりければ埋伏してや居るたらん影木村まで往て見よとて歩武者二人遣しける案の如くに敵大勢居たりけるか二人を見つけ討とらんとしたりける程に二人は取て返しつゝ味方の勢の中へ馳入ける敵は猶しも追來る味方も進てかゝりつゝ筒井と云ける僅の川に渡し合せ面もふらす命を惜まず入亂れて戦ける薩州勢は先日之恥辱を爰にて雪んと互に勇み恥かしめて引なとこそは揉たりけれ城中より打出たる者共も爰を破りそこなはれては云甲斐なしと一向に必死と成て戦ける去れども多勢に無勢と云ひ只一條の道ならて驅引自由ならさりければ城兵了に戦ひ負て引退く其中にも唯一人敵に後ろを見する事味方の恥とや思ひけん殿島に踏止まり追くる敵に渡し合せて無手と組む暫は推つ推れつして大汗出して揉合しか倒れて其儘起あかるへき様もなく互に引組たる手を離さす川の深みに落入て二度上らさりければ其名誰とも知れさりし城兵は小筒井川を打渡り石切坂に引上り跡を吃と見てあれは川にて後陣の引兼しを石切坂よりあれ討すなど弓鐵炮を放掛け引んとす薩州勢はことゝもせず梨尾山の麓より横矢を頻に打かけて色めき立つを三丁計り追歸し漸く城に引取ける是處にて原源之進を初めとして敵味方二百餘人を討れにける

星河城没落并柴田紹安最後事

諫言其理に當て是を背く人をは天道必ず惡み給ふ仁義當時不用則武運不長久さても柴田遠江守入道紹安と云けるは數代大友家の恩下に秀て其身の大身なるのみならず一門榮へ一類廣く武勇の譽いやましに今此時と誇りしも傾く時節や到りけん油盡ぬる燈蓋の消なんとして暫又輝き出る朝日嶽薩州方の押へとて君より是を預けられ藩籬の將と備りしか奈何なる天魔の所業にや忽ち叛逆を思立薩州方に一味をなし朝日嶽の城を出て井田天面の城に移りて居たりける其本城なりける野津院の内星河と云けるには紹安か妻女並に子息左京進舎弟次郎柴田等意其子五右衛門同八郎田北彦三郎赤峰玄蕃蘆荊大膳工藤尾張守等其外薩州勢少々相加り土民百姓等を驅催して籠り居たりける佐伯太郎惟定此の由を傳へ聞安からぬことゝもかな其儀ならは一時に急に攻亡し柴田に物を思はせよとて十二月四日軍勢差向けゝる大將には高畑新右衛門先陣を蒙り追手へ押寄せ後陣は谷々峰々に居て同時に関を嚙と作れば城中も同じく関を合せける此星河の城と云けるは四面共に岩壁めぐり峨々と聳へて極て高一天の星斗を摩する程にして只一口の道なる故攻め登るへき様なかりしかは偽引出して討んとの謀にやしたりけん急に攻んとすることなく足輕鐵炮のみ出して態と時刻を移しける城兵等これを見て小勢なりとや思ひけん城戸を開て七百人谷を下り岩根を傳ひ出來て鎗にて突てかゝるもあり岩陰木陰を楯として矢炮を於ち掛るもあり互に且しせり合て戦處に先陣後陣同時に蒐て息をも繼せず揉立揉立戦へは城中究竟の兵共百餘人討れにけり殘る者共是を見て争か以て怵へき甲の丸へと引上げるを猶しも跡につき從て込

み入らんとそ揉たりける斯る折節佐伯の高畑新右衛門か領内中村の辨指又四郎と云ける者
 梅牟禮の籠城の砌りには如何なる恨の有るやらん給人を違背して一村擧て驅促し潜に柴田
 に一味して此星河城に籠りしか是を非なりと思ひけん今又心を翻し蘆荻大膳諸共に柴田を
 背き城中を走り廻て役所く火を掛たりしかは猛火熾に燃上る寄手の兵これを見て是れ
 は定て城中に反り忠の者ありて内より起ると覺えたりいさ此弊に乗取んとて同時に関を作
 りかけ喚叫て攻上り搔楯逆茂木乗越乘城込入りける程に内外の敵に度を失ひ薩州勢を初と
 して足弱等に至るまで残りすくなく討なされ或は辛き命を祐り落行たりし者もありける紹
 安か嫡子左京進二男次郎妻女并柴田等意其子五右衛門同八郎等は皆生捕と成て佐伯の方へ
 と引れ往く星河落城したりし日杉谷兵部丞は外聞せんとて因尾方を巡見したる折節落人あ
 るにゆきあひて追詰て二人討とれば井上の百姓甚右衛門と云者も一人討て皆星河の首帳に
 を記されける其首帳を惟定より臼杵丹生島へ出しければ宗麟感悦不淺即ち感狀を送られけ
 る其文に曰

今度謀叛人柴田紹安一家楯籠星河城刻早速攻落首帳并書狀令披見候切々御手柄之段
 感悦不淺候生捕以下之事重而子細可申付候恐々謹言

十二月四日

宗麟

佐伯太郞殿

柴田入道紹安は天面城に居たりけるか遙に星河の城の兵火の難にかゝるを見て大に驚き我

か一心の過にて妻子一家の者まで憂目を見する歎息さよ今は定て殺されてや有らん生捕に
 もや成るやらんと先非を悔とも甲斐もなく共に胸をそ焦しける此の逆心を翻し妻子を助け
 宗麟公へ深く忠功を盡さんと思ふ心の出来て何とそ潜に城を出逃歸らんとする氣色を薩州
 方より付置たる輿力の者見ると均く家久へ加様く告たりければ即ち使來て府内に陣を
 替へしと云其時市彌太紹安に向て當地を出さしむること餘の儀にあらす道にまちうけ討ん
 とのたくみならん預め某か諫めを納れしは爰の事御承引ましまさす御心中一つにて一家の
 人々悉く滅亡に及ひぬる事誠に是非なきともなり主従の契りも今宵はかり明朝某一番に
 討死して御目に掛申候はん其後は如何様とも御心任せに遊はし給へと辭を放て申ければ紹
 安兎角因果歴然の道理なり汝か云處最も至極せりと云て其後は默然として物をも言はず居
 たりける既に其夜も曙ゆけは府内の方へと志し麓をさして下りけるに市彌太か云しに違は
 す薩州勢麓に待うけ討てかゝる紹安譜代の侍共爰を一世の最後そと命を惜ます相戦ふ中に
 も帆足市彌太一番に進出能武者二人討捕て大勢に手を負せ終に討死したりける是を初めて
 紹安及び相隨ふ者共に至まで皆ことごとく討死す薩州方の討死も十八人に及ひける此紹安
 と云けるは日來は忠貞の志を勵し智勇相兼ね數度の戦功陰れなかりし者なりけれとも家門
 傾廢いたすへき時節や爰に到りけん忽ち心翻て市彌太か諫めを用ゐす容顏美麗を盡したる
 最愛の子供を初め一家從類残りなく其後佐伯西正寺に於て生害にそ及ける目も當られぬ事
 共なり此等の事を見るに付け心あるへき事ともなりさて又郎等の市彌太と云けるは柴田相

傳の侍にて其身僅の者なれども合戦に出る度ことに譽れを成さすと云事なし晝は終日武を嗜み夜は通宵文を學ぶ諸藝を深く心にかけて假初にも雑話せず人の善悪かんかみて自ら是を行んとす諸人の羞る勇士なれば戦死の後惜まぬ者はなかりけり

豊薩軍記卷之七終

豊薩軍記卷之八

丹生島合戦事

斯て家八は鶴か城を攻んと欲して思へらく直ちに是れを攻めたらんには定て宗麟後詰の勢を差遣すへし討て出さる如くにせんには如しとて白濱周防守野村備中守兩人に騎士百五十餘兵共に二千餘人を與へ差向られければ同五日に丹生の島へ到て平清水に陣をとり兎居島まで詰寄する元來壓への爲めのみなれば岩陰木陰を楯として扣へて居たる計なり爰に町架の傍に柳の大木鬱然と絲を亂して有けるを前に當つゝ其陰に大軍並居て城の形勢を窺ひ居たる折節に先年南蠻國より渡りたる國崩と云ふ大震電雷城中にありけるを宗麟武宮武藏守親實と云ける勇士其長八尺力量諸人に勝れたる者を召して汝是を仕り彼等に膽をつふさせよと有りければ命に應して藥を込事一貫目大玉の其外に兩五六錢目の小玉を量て二升こめ追手より三町四五反計りと勘へて彼の石火矢を放ち掛る名にし負たる國崩しの鳴渡りたる其響き山に徹り海に答へて夥しく柳の一の枝より上を救と打切て群り居たる勢の上へに落かいりける程に是に壓れて死するのみならず又大小の飛丸に當り許多亡ひ失にけり去れども屈する景色なく喚てかゝり古庄葛西と戦ひしか大半討れて引退く白杵美濃守鎮尙同嫡子市兵衛尉統辨柴田禮能同嫡子十郎先陣を蒙て平清水に討て出兩三度驅合せ難なく先手を追退け引返さんとせし所に薩州方の伏兵等思もよらぬ町口の民家より討て出真中に追取こめ散々に攻ければ禮能争か叶ふへき終に馬より突落されて討れにける美濃守も難叶や有けん

川を越て遁れにけり柴田十郎は二百餘人を引率し薩州勢に驅合せ雌雄を爰に決せんとて互に打掛り太刀の鏗音矢叫の聲鳴止む隙もなかりけり餘りに手痛く戦ける程に譜代恩顧の郎従二人討れぬ去れ共敵を追退け自ら討取る敵の首を馬上にくいり付引返さんとせし處に父の禮能討死せしと聞よりも大に驚き猛き心も弱々とは奈何にせん口惜やと深く哀み居たりけるか涙なからに敵の首を郎等に渡し汝は急き城中に是を持參し注進せよと云ければ此御使をは餘人に仰付られて某をは御供に召具し給へと言しかども我も追付引取ん事急なればと云棄て駒の首を引返し大勢に割て入り此に討伏せ彼に追詰大わらはに成て切て廻り即時に父の敵を討ち終に討死したりけるを惜まぬ者こそなかりけり薩州勢は夫よりも切通とて岩を穿ちて只一條の道ある處に引退く爰をは吉岡甚橋統増手勢百八十組付共に三百餘人を率し利光彦兵衛吉田一祐など云ける者どもと備て居たりける處思はずも行きかゝりしかはなしかは以て猶豫すへき鐵炮さきりに放かけ後には討てかゝり詰りく追つめ討つ不知案内なる薩州勢深々と入來て爲方つき果たる折節吉弘左近大夫鎮直三百餘人にて福良に屯し居たりけるか忽ち來て跡を襲ふ初め敗走したりける美濃守も同く攻たりける程に引退んとするも叶はず前には統増さへたり進退こゝに極て命をかきりに追つ捲りつ一舉に死を争ひける統増か手にかけて究竟の士を五人討て首をとる利光彦兵衛吉田一祐も各手柄を顯しける其後は寄手攻んとせさりければ城中よりも討て出さりける處に寄手の陣よりも精兵なる者を擇て城に向はせ遠矢を射させたりける此矢海上三町餘を過て外郭の石壁に中

り微塵に碎けて散りにけり宗麟是を見此方よりも還矢を射さしむましきにしも有らすとて則日田郡の高瀬兵部丞永次と云ける手垂城中に在りけるを召して上の矢の鏑を取出し御邊是にて答の矢を射敵に見せらるへきと有りければ永次辭する氣色なくして席を立ち弓を強く挽ん爲め鏑を脱て浪打際に歩み出る弓は塗籠糸包み四方竹にて有けるに只今賜りたる矢を打番ひ忘るゝ計に挽しほり兵と放ちたりしかは鏑は浦ひく程に遠鳴して磯邊に扣へ居たりける薩州勢の上を射越して遙なる後の渚に立ちける薩州手の者共是を見て其弓精の程を稱歎したりける宗麟喜悅斜ならず即時に兵部丞永次を改て備後守鎮次と號し許多の恩賞賜りける其後又薩州の足輕共五六十人徒黨して押し取強盜せん爲めに臼杵近所を徘徊し不敵なる者共にて敵陣さひしき城下を通り津久見と云ふへ越んとそしたりける爰に吉田一祐と云ける者此由を聞よりも安からぬ事ともかな城中に人もなけなる振舞云ひ甲斐なくも奴原を安穩に通せしなど後日に於て世の人の口にも及ふへければ其儘にもさしをき難しいて討ちらし弃んとて好む處の薙刀携へ道を替へて先きへゆき平原坂へ打登て今や今やと待處に件の者來りてけるを餘すまじきと討て掛れば真中に取籠たり一祐元來強勇の者なりければ膚撓ます目瞬かす前後左右に相當り八方へまくり立て秘術を盡し戦へは暫時か間に十八人を討れにける殘る者共争か以て怵ふへき四方へばつと逃散けるを一祐か郎等とも追詰るほとに二十三人討捕て城中差てを引にける宗麟大に感悅あり一祐數年の忠貞淺からざるのみならず今度の勳功比類なき事なりとて月山の薙刀を賜りける其後城中手分をなして一

手をは追手の勢屯に置き又一手をは平清水へ控へしむ薩州勢も備へを分け一隊をは門前の上の高みに置いて一隊を次第々々に引かしむ其意若付慕ふことあらは横矢に射んどの巧みに見ゆ城中荒手の兵入替て追討に今一軍と勇しを宗麟父子の人々必ず追討することなかれ味方に兵を損せぬは是則全勝なり數十人討取も以ては同し事なればことごとく引取るへしとの使にて軍は是にて終にけり薩州勢は夫よりも鶴か城へと押向ふ

鶴か城合戦の事

去程に島津中務少輔家久は鶴か城より南方八町餘を隔てたる梨尾山と云けるに陣營し軍兵の手配ありける先つ一番は伊集院美作守を大將として其勢五千餘人二番は新納大膳正を將として其勢三千有餘三番は本庄主税助其勢二千餘人惣大將家久は八千有餘を相從へ斥候の侍頭は逆瀬豊前守豊前兵衛相良民部左衛門兩人に輕卒六十餘人を相添へられ家久の下知を受けてを働さける既に軍伍整りて同六日の早旦に先陣の伊集院美作守追手に向へは二番備の新納大膳正搦手に廻て同音に鬨を作る城中も同く鬨をを合せける天地もひくはかりなり寄手大勢なりければ此城即時に攻落さん事案の内よと思ひ侮り各分捕高名をし譽を後代に残んと勇すゝんで攻登るを城中よりも徳丸傳八加藤兵庫助五十騎はかりにて打て出て弓鐵炮を放ちかくれば先きに進む兵を十四五人討伏る寄手は是を事もせずして攻上る此山(城カ)四方嶮岨ををひ殊に逆茂木やらひ等に大木なんと引かけ置し事なりければ輒すく乗越かたくしてひるむ處を鎗長刀にて突伏せ切伏せする程に六十餘人討れにけり寄手の兵無念と

や思ひけん追手搦手八千餘喚き叫て攻たりける去れども寄手の討るゝのみにして攻あくんとてそ見えたりけるを伊集院采幣ふり上げかゝれと下知すれば後陣へ控へし本庄主税助か兵とも同くかゝつて火矢鐵炮を打掛々々只一揉に攻破らんとしたりしかは城中にも役者を定め火矢を消せて防ぎ戦とはいへ共多勢に無勢の事なりければ二の丸を固めたる朝見太郎景治徳丸彈正忠長繼討れて三の丸も燒落されて本丸に取籠る寄手は彌勇みをなし差も嶮き鶴か城かつき連てをよりけるあはや此城只今攻め落されぬと見えける處兼て用意仕置きたりける大石小石木の箇切りなんと數を盡して投落せば一陣二陣を打透し麓を差て落て行く只輪寶の山を摧き磊石の卵を壓すに異ならず石に當て死するのみならず此石を避んとすれば山嶮しうして滑らにころひ落ちては落かさなり落ちかさなりて上か上へ人額雪をそつかせける尸は伏て谷を埋め血は流れて川をなす去ともひるむ氣色なく手負死人を乗越々々無方かゝりに攻しかども城中堅固に防し故叶ふへき様あらずして軍兵大に疲れしかは大將の命に従ひ七日の晩景に梨尾の山へと引退く利光宗魚は火威の鎧に五枚兜の緒をしめ矢倉に上敵何所まで引たりけるを遙に見やりける處を敵一人引き残り木陰に隠れ居たりしか弓箭取て打番ひよつひき兵と放つ連の極めの哀しさは眞只中に當り急所なれば争てか以て怵ふへき忽ちに卒せられぬ城中大に驚きさわき我れも我れもと驅出て討とめんとはしたりしかども黄昏催す夕まくれ早や行方の見えさりければ各城中に立歸りて大將を討せしことを大に恨み哀みける中にも彈正平助目を怒らし齒を切て今宵敵陣に押寄せ家久を討捕ら

すんは有るへからすと云て早や蒐出んとせし處に成大寺豪永并に高橋村上等制して曰く敵の要害嶮岨にして其上右の夜討に懲りをなし用心おろそかなるへからす然る處に押かゝり功を立てざるのみならず却て各討死せは誰かは當城を守るへき只幾度も此の方へ敵を引寄せ大石大木落しかけ千變萬化に戦は、快氣を得んこと疑ひなしと理を盡して諫ければ怒りを押へて止りける成大寺重て曰く件の男敵陣に立歸て討たる時の趣き物具の體に至るまでを語らば大將なるらんと思ひつへし去れ共定かならさりければ家久是を聞かまほしく如何なる思慮をか廻して實否を窺ひ見るへきなり此方も色を悟られしと寄手の引きしに事をよせ悦ぶ體にもてなし愁の色を隠しては如何あらんとありければ何れも然るへからんと俄にもよふす遊興の舞樂を奏する太鼓笛鼓の調へいとやさしく優々緩々たる體にて深くもつゝむ者共の智慮の程こそ淺からぬ案に差はす薩州勢兩日の合戦に鎗大將物頭を始め許多討れたりければ是を便りに城中をうかゝひ見んとや思ひけん其夜則ち使者を以て討死したる兵の死骸を取り歛め度候問今宵姑く矢の口を引させ給はるへき由を云ひ送りたりければ城兵等思へらく是を次てに折よくは夜討にせんとのことならんと御尤に候築地の邊は此方より送り申候はんとて死骸を谷々へ落し此の峰彼の尾崎五人三人つゝにして喚き叫はせたりしかはさしもの家久城中を計かたくを思はれて却て稱嘆せしとかや斯て家久は組頭奉行等を召集めて曰く右の若くに攻め上らは石にて討たるゝのみにして勝利は更にあるへからす山の体を能くみるに四面谷皆深ふして城は極て頂きの聳へし處に據るなれば水は定めて有

るへからす思ふに麓の谷水を夜々に汲とを覺えたり水の手を止め遠攻めに一と蒸むして見るならばやはか弱らてあるへき其時に攻め入て一人も洩さぬ様に討へしとて谷々に番を付け明る八日の早天を遅しとこそは待ち明かす横雲空にたなひきて雪より白む朝たより又押寄せて鐵炮打かけ矢を放ち遠攻めにこそ日を送りければ水の手止られて是にを難儀したりける水を絶て既に早や兩三日に成りぬれば軍民渴を忍ひかたく草葉に置る露ならて喉を濕す便りなし雪ふりぬれば取集めて食など炊き居たりける城兵等議して曰く加様に數日をふるならばいよゝゝ飢渴に及ふへければ彼れを欺き引さしめんとて西の口に多くの馬を引出し白米を以て湯洗をする體にもてなし敵にこれを見せたりければ城中に用水あると心得て水の番をを引にける寄手いつまでためらふへき去らは急に攻め落せとて伊集院新納本庄野村白濱家久の勢荒手を入替々々同十一日まで晝夜三日息をも續せず攻立て堀きは近く押寄するを弓鉄炮を放ちかけあ矢をあらせず討伏る去れども是を物ともせず尙も隙なく攻近つき堀を破て乗入んと揉たりける城兵等は破られしと散々に鎗にて突て外より是を奪はんとし外より突をは内より是を取んとして捻合挫合する程に或は中よりをし折るもあり或は奪ひ取るもありける其内に熊手長鎌を以て竹束に打掛け打掛け引たりける程に難なく十五六間引たはせは築地の陰に兼て置たる大石小石白茶白木白など數を盡して投かくる手負死人の出來しと算を亂せる如くなり抑是鶴城は登る事五六丁山けはしく谷深し殊にすくれて難所なるは築地の許にてそ有りける一夫怒れば萬卒も進み難き處なり寄手は城を

乗取んこと今日にありけると差もけはしき山なるを透間もなく打圍み身を塵芥よりも軽くして曳や聲して攻上るを城中兼て數千本の竹鎗臺にしつらひ置きたるを採撃を以て打ければ五騎も十騎も一節に貫かれてを失せにける其のみならず櫓より弓鉄炮を夥しく石を雜へて飛ばすれば差もに猛き薩州勢攻め口少し引退く其隙に替竹束を元の如く押し立て少しも騒かす居たりける鬪戦六日に始て十一日に至るまでに討る者を數ふるに城兵一千有餘寄手は三千餘人なり今は攻るに術つき日も入りなんとする比をひ梨尾の山へと引にける爰に上尾常陸守とて強弓の手たれありけるか翌る十二日の早朝なりしに四人張十五束三臥くつ巻を残さず引つめてへふと射渡す此箭六丁餘を過ぎて家久の朝餉する膳の前へにを立ちりける則ち是を見られけるに朱にて上尾常陸(介)守と書き付たりあな夥し如何なる八郎爲朝殿も是には争て過くへからず斯る處に陣取て精兵の箭先きにかゝり詮なしとて梨尾山をを引れける同日巳の刻計りなるに侍大將物頭の如くに見え五六十人引率して二の丸の尾崎に馬を乗り上げ城中に用ありけなる体に見えたりけるを岡部物三郎鉄炮にて眞逆に討落すを郎黨とも打圍みてを引退きぬ去れば寄手の兵とも心は矢猛に勇めとも雲井に狎る鶴城攻落し兼てを居たりける

中津留河原合戦事

鶴城の合戦既に難儀に及ぶの由し義統是を傳へ聞き援兵を遣すへしとは思はれければ共譜代の家人等薩州に心を寄せ外所聞したる折節なれば如何ともせんかた更になかりし處に仙

石長曾我部殿下の御下向あるまでは進んで合戦致すへからずとの上意なりとは云ながら戸次の危難を見奔にも成り難しと議したりけるを幸なりとて大友軍勢相加り都合其勢六千餘同十二日の未明に府内を打立て鶴城の西北川を隔て、鏡城と云けるに着陣し旆馬印を夥しく西風に吹なひかし龍蛇の如くに翻す前は竹中村にして後ろは谷深ければ幾千萬騎あるらんと計り難くを見えにける攻めあくみたる薩州勢此のありさまに氣をうははれあわてふためき我先にと馬にも鞍をかす坂原山まで三十餘丁ぞ引にける茲にて暫く人馬をやすめ斥候の者を召て曰く汝等是より立歸り後詰の勢の分際を窺に窺見て來るへしとて影木村や應當邊にを遣しける斯て仙石權兵衛諸卒に下知して云ひけるは六韜の十四變に進退當度變化應機先んずる時は人を制するに利あり凡そ川を隔て陣を取るに渡して戦ひに勝すと云事なし如何となれば士卒難所を越て血氣強盛になる故なりいさや面々此川を渡して蹴散せよやとを申しける土佐守元親深く制して曰く最も川を渡して勝ちたる例多しと云へとも不知案内なる敵地へ入て卒爾の働きありなは殿下の御覺えも如何なり又は此川の形勢此方は岸高くして馬のあかり塙宜しからず待て戦んに敵若し川を渡さは半途を討つに勝すと云事なし平らに待ち給へと制しけれども權兵衛素より短才愚蒙の人なりければ聞ぬ顔にて馬をさつと打入けるほどに其の手の兵千五百餘我れ先きにとを渡しける土佐守も今は止事得かたくして怒なから相渡し山崎と云處に陣を取り軍伍を二隊に分つて其一手をは脇津留と云處にを置にける窺ひ居たる斥候の者斯と告れば薩州勢さては僅の勢をとて坂原山より引

還し先つ後詰の勢を討散さんとして鶴ヶ城へは押への勢を殘し置き討て出さる如くにして先陣の伊集院美作守脇津留の勢の中へまつしくらに討て掛りしか戦ひ負て引退くを猶も追かけ利光の村中まで追討にそまたりける家久是を見遍身に汗をなかして大に怒り既にかけんとせし處に二番備の新納大膳入替て元の處へ追歸し追つ返しつゝまたりけるに未だ雌雄もなかりし折柄三番備の本庄主税助は迫の口と云處の東の山の壇に登り敵味方の強弱を如何と窺ひ居たりしか時分は好きを早やかれと仙石長曾我部の本陣へ無二無三に討てかり千死か一生をも顧みず今を最後と戦へは怖ふへき様あらすして山を下りに敗走す惣大將家久も同押かゝられしかは四隊の備一つに成て仙石長曾我部の兩陣を中津留河原へ一面に追下し敵味方入亂れ互に雄機の出し揉立揉立攻め戦ふ仙石長曾我部の兵は五畿内四國に名を顯したる面々爰にて後れを取りしかは日來の武功も廢るのみならず諸人の指笑も耻しければなりとて義を鉄石に比し命を鴻毛よりも軽くして一足も退かしとを蒐たりける島津方は九州を討從へ天下に旗を建つへしと思ふ折からなりければ敵を怖るゝに足らずとし天維も落ち坤軸も碎けよと喚叫んで揉たりける大敵凌き難ければ仙石長曾我部の勢戦ひ負け敵味方に討るゝ者惣て二千餘人なり死骸は積て屠所の肉の如く血は流れて江河をなす爰に戸次鎮連か嫡男右近大夫統常は父の鎮連薩州方に從ひしを様々諫言したりしかとも更に聞入れす剩へ勘當までせられしかは此の上は力なし父こそ不忠の名を取給ふとも我は今般討死して先祖の名をはげがさじと一族戸次刑部大輔鎮連同治部少輔鎮直同隼人佐統昌郎

等には由布又右衛門安勝左衛門佐足達兵庫助大久保源吾右衛門等を始として彼是都合百餘人新納か陣へかけ入て皆はなやかに討死す長曾我部彌三郎信親は父元親と諸共に軍の下知して居たりしか味方の敗軍を制しかね馬に拍て敵の村雲立たる真中にかけ入れれば相續きて宗徒の勇士竹内新助桑名太郎左衛門兩人元親の家臣十河新太郎矢野田宮内兩人義統の家臣など云ける者共に精神を抖擻し勇を奮て散々に切て廻るに敵の圍いよく緊して人馬共に疲れければ憐むへし終に亂軍の中に討れにけり父の元親是を見て今は早や是までなると既に蒐んとせし處に大友家人竈門兵庫助と云者同陣に在りけるか馳寄て勝負は時の仕合せにて候大勢の中へ只一人馳入せ給ひても何の勝利か候へき犬死せさせ給はんよりは是非に引退せ給ふへしとて諫めければ元親けにもと思はれて府内をさして引にける鶴ヶ城よりも下風合すへかりしかとも薩州方より押への勢を置きければ後詰をすへき様もなく只徒に見物のみして居たりける仙石權兵衛尉秀久心は矢猛に思へとも敗軍力及はずして手廻り僅か五六人計にて白瀧川を打渡り府内をさして走りければ家久猶も餘さしと跡を慕て追かけらる爰に大友義統の家臣に吉弘加兵衛尉統幸とて智勇を兼ね備へたる大剛の兵あり此の由を聞よりも三百餘人を引率して祇園河原に出張し今や今やと待處へやかと押寄せ來りしか吉弘か勇氣凜然たるを見て取て返して守岡の小山に上り陣をとる中にも先手の者共は府内の様を窺ひ聞猶押寄んと相共に勇み進んで更けゆきし夜半を厭はて待居たり

義統府内退去事

既に其日も暮ければ吉弘加兵衛尉統幸祇園河原にありけるを大津留河内守宗俣掃部助より使を馳て喚返し一つ處に差湊ひ議定しけるは島津家久機に乗て今宵の中にも當城へ押寄來る事もやあらん去れば當時の世の模様を見るにたとひ朽たる繩を以て六馬を継ぎとむも只憑かたきは頃の人の心也是ぞよも貳あるまじきと思ひつる直入大野の兩郡に於て志賀朽網一萬田など云ける數代君の恩惠を厚く蒙りたるもの共忽ち虎狼の心をさしはさみ薩州に從ひ却て這邊に弓を挽んとする上へは其兩郡の小身たる者も彼等か下知に隨て島津に心を寄すへきなり當城の士とて定て如此ならんか然らば旗本の御勢に我々か手勢を加へ添たりとも五千にはよも過し此無勢を以て勝はこつたる大軍に争か對する事を得ん一と先高崎の城へ御坐を移し進らせ豊前筑前筑後の勢を驅催し中國勢を待合せて島津を御退治あるへきに何の子細かあるへしと衆議已に一決して此由義統へ報せしかは則ち是れに隨はれ奈田兵部田北六郎を以て仙石長曾我部へ牒し合せ其夜ひそかに府内を出高崎の城へと落らるれば秀久も元親も別府を過ぎて金越と云山を越へ豊前國山香の郷田原與兵衛親盛紹忍の世繼義統の弟なりか居城妙見嶽へ入城したりけるか姑くも留らす思ひ思ひに引き別れて元親は伊豫國火振島へと趣き仙石は家僕一兩人相具して小舟に取乘り淡路の洲本に退にける是を忌しと思ふ者や仕たりけん

仙石は四國を差て逃にけり三國一の臆病の者此時まで府内には軍勢二萬餘ありけるか義統にも隨從せず各残り留りて却て島津に降參し或はこゝ彼に立退て時宜をうかひ居る

も有りける大友一家の人々今年春の比よりも其身は府内に在りなから心は島津に内通し此後軍に打勝なは右の如くに在ぬへし若し又戦ひ利なくんは島津を主と成すへしとてかねて摸稜の手に習ひ運を兩端に掛け居眠して處たりしをは今そ思ひえられたれ際もすかさず薩州勢の先手府内の追手へ押寄る去れとも落行き或は降參したりしかは一戦にも及さりけり偶残る者共は何つしか心翻り君に對して弓を挽き朋友に向て太刀を抜く昔は九國二島の管領として列國の諸侯皆其麾下に屬せしかは亭宅軒を連しこと幾千萬落と云數を知らず去る永祿元龜より爾來畿内の干戈止事なく四夷八蠻同時に起りたりしかとも府内は天文以來より兵革の沙汰もなく國郡靜かなりければ上平かに下安くして士農工商琴碁書畫百家衆藝の流まで皆徳風を慕ひ來て靡聚りたりしかは豊府の繁榮士民の富饒凡そ京都鎌倉にも尙いやまさりて語るも辭なかりしに薩州勢入ると均く諸所へ火を付たりければ此彼より起り出次第に熾になるまゝに東西南北車輪の如くなる焰鳴はためひて送り其光白日の如く府中一面の火と成てひいて蔣山萬壽寺に及び法堂方丈庫裡鐘樓八十六間の廻廊五千餘卷の諸經論一時の灰燼と成り行基菩薩の彫刻し給ふ丈六の牟尼の尊容も既に煙と成せ給はんと見えし處に典西堂と云ける老僧あななさしと大衆諸共走り入りければ其大像なればすへき様なくて御首はかり抜き奉り池に投して出られける名蓋さへ如此況や其餘の神社佛閣及び諸士の亭宅並ひに町家に至るまでをや唯大智寺來迎寺の兩處を除て回祿にかゝらぬ所はなかりけり落ち行く者の有様は老たるを扶け幼を負ひ父子兄弟兒童女起つ轉ひつ行く程に夫は

妻を見失ひ妻は夫を尋ねかね西を呼ては東とし北を南と誤て烟にむせひ逃迷ふ日來は大
 厦の妻室淑女など云へる者人に心を奥深く假にも外面に出ぬ身の今は顯はに只獨り步
 なる風情にて其處とも知らず出行けは或は敵の手にかゝり或は年來使ひたる被官に衣裳を
 剝取られ歎き哀む有様は譬て云ん方もなし中にも最哀れなりけるは義統府内を出て五六丁
 はかりも往き過て足達圖書はと問はるれば見えすと答ふ義統彼れはさりとともと思ひし物に
 とある處に圖書助馬に鞭して追付ける義統いかに遅かりけるを有ければ圖書さこそい不
 審に思召れ候ひつらん君の御大事今日を限と存候間追來る敵の候は引返して防矢射い
 ささよく討死せんに妻子の事を思ひ出し未練をや仕らん或は隠しをきたり共敵に探し出さ
 れて憂目を見せんよりはと存し立歸て妻子を害し家に火を掛け参りたりと申しければ義統
 を初めとして皆感涙をを促しける府内には義統落られたりし故亂入したる薩州勢我討捕ん
 と勇み進み跡を慕て追來る足達圖書吉良主水小原平馬丞永松武藏以下取て返し命を一
 羽の輕きに比し踏止りて防矢戰ひ皆悉く討死をそまたりける此等の者に支へられて敵さま
 て追はさりければ浸々として落延ぬ係る危難のある中にも愛戀執情のわりなき道は神通の
 聖者の身にも有るならひ義統妾人ありとて曰杵刑部少輔をめし汝は是より立歸り何とそし
 て天野又兵衛か娘を召具し來るへしと有ければ曰杵則立歸りやかて打連出けるか敵早や府
 内に充滿して通るへき様あらざりけるを兎角切りぬけする程に薄手二箇所蒙り高崎城に着
 ければ義統喜悅淺からず佩たる太刀を賜ひてけり曰杵は是を悦はす席を立て大音揚げ此年

比數度の勳功ありし者某一人のみならず幾許多も候ひしを御加恩の沙汰もなく用にも立ぬ
 女はらを召具し來りし褒美なりとて引出物は何事を其御心故係る耻辱に逢給へ向後主君と
 頼み申すまじきと云捨て行き方知らず逐電しけるか後には毛利輝元に仕へて藝州にありし
 とかや足達左衛門岐部源左衛門坂本越後も勳功數箇度に及ひしかとも終に恩賜のなかりし
 を常々恨み居たりしか是れも高崎より落て其後に坂本は佐々内藏助成政に仕へ足達は大谷
 刑部少輔吉繼に仕へけるとを聞えける係る中にも君臣の禮を亂さす忠貞最も淺からざりけ
 る吉弘宗像大津留等重て義統へ申けるは當城は御先祖刑部大輔氏時公能直菊池肥後守と
 合戦のとき籠らせ給ひて御運を開きましゝたる吉例の地にて候へ共俄の登城にして人
 倫遠き高山に兵糧運送の便りも宜く候はす豊前國龍王は田原紹忍か居城にて要害堅固に候
 へは彼の地へ翌日狹間山城守鎮秀を召し御邊は姑く此所に残り留て我金越に到り烽火を揚
 ぐんを見て其時當城を燒拂ひ狹間に還り近邊の諸士と心を合せ薩州勢を防ぎ民家の難を救ふ
 へしと委細に命して出られければ鎮秀其日の暮なんとする比は合圖の烽火を見るよりも
 則ち城を燒拂ひ狹間をさして引退きぬ義統に相從ひける士には大津留河内守鎮益手勢百五
 十餘人ありける内を五十餘人引分て己か居城松尾の護りの爲めとて指しかへし百餘人にて
 扈從せり吉弘加兵衛尉統幸三百餘人舍弟田北平助統員百五十人宗像掃部助鎮繼五百餘人及
 ひ田北六郎統辰臼杵彈正統光寒田六之進統政齋藤勘助賀來主膳秋岡式部以下都合其勢五千
 餘人十二月十五日に龍王城にを入られにける島津中務少輔家久は守岡に一夜止宿し逆瀬豊

前相良民部兩人に輕卒百廿人相添て府内の様を點檢させしめ翌れは上への原と云處に天台宗圓壽寺として六坊ありしを本陣として其後大友の居城に移り來年の三月までを居られける其間に貪欲熾盛の溢者共府内近邊の神社佛閣へ押入り寶器什物等を奪ひ取ることを計るに違あらず無慙と云もをろかなり去程に利光鶴ヶ城には大將討れたりしかとも城中堅固に防ぎし故攻落すへき様もなく挑みあうたるのみにして數日を送り居る處に宗麟使者を以て此間の忠勤比類なき事感するに餘りあり向後軍を止め早く此方に引取るへし若此旨を用ゐずして他日如何なる粉骨ありとも忠節に思ふましきとの度々の使命の重なりければ城中不殘曰杵の方へと引にける

狹間素性事

抑狹間山城守鎮秀か先祖か尋ね考るに大友大炊助親秀能直の嫡子の四男大炊四郎直重と云けるは剛強無雙殊に才智他に超へ未だ弱冠の比より毎度譽を顯せり舍兄兵庫頭賴泰憑しく思ひ父君の命を受八百貫文の領を宛行ひ大分郡狹間に封せられしより狹間を以て氏とせり或時直重速見郡を一見せんとして駕を廻し別府に遊ひ既に邑を過んと欲して姑く憩れけるに上を學ぶ下部とも其隙に戯れて相撲力持などしたりけるを打見て傍に大石の形ち鶏卵の如くにして長さ七尺横五尺厚さ四尺も有んするを指て夫々持來れよとありければ大に驚き此石人間業にして動し難しと云ければ直重やかて立寄り兩手を以て安々と頭の上にさし上げ那邊這邊と持廻り果はそはなる磐石の上に置きけるか其後幾年歷ると云へとも動す者のな

かりける是を狹間の重石として今の世までも傳へける係る勇猛怪異の人なりし故鬼狹間とも云しとかや其後文永十一年甲戌夏大元の蒙古數十萬騎吾か日本を犯んとて筑前の國へ襲ひ來りしことありしかは九國の武士とも馳向て是を防く一日大友勢出て熊猛虎奔の勇を振ひ大に戦と云へとも蒙古の多勢を支へかね既に敗軍に及ばんとしける處に直重真先に進み出櫓を以て振廻し大勢を薙伏せ難なく敵を追退け目を驚かすはたらきして許多の首を取り勇名尤も高かりける直重より十五代山城守鎮秀は生質寛仁忠直にして義心鉄石誠に文武の良將なりけるに當時多くは大友家を背て薩州に心を寄せし折なりけるに鎮秀は別心なく數度の勳功顯して名を後世に止めける憑しかりける人傑なり

惟定討因尾通路事

去る程に島津中務少輔家久は威風凜々として大友義統を豊前國へ敗走させしめ乃府内の城へ入替り猶殘黨を討んとて姑く在陣せられしかは日州の諸士府内へ往來する毎に佐伯の因尾と云處を通りける佐伯太郎是を聞き道に待らけ討捕へしとて十二月十七日因尾の士に命せしかは承るとて馳向ける其輩には柳井左馬助同外記同平兵衛同兵庫助三代勘解由柳井喜右衛門同彌右衛門吉良舍人助杉谷兵部丞同源四郎稗田右馬助同加右衛門杉井雅樂助此等の者を先として因尾傳岩といふ在所の下三竈江大明神の前へ川の南北小板屋の里所々に兵を忍はせ置野にも山にも遠見を付て待つ所に翌十八日に日州縣の住人戸高將監と云ける者を大將として騎士卅六人に歩卒の者多く隨ひ來りけるを巢破是れこそと斥候の者味方へ斯

と告たりしかは待設たる伏兵等同時に起て討て驅る日州無勢なりければ河中に追はめられ向ふの岸へ上らんとすれば大明神の一の華表の左右杉村松原よりも餘すまじきと驅出たりける程に前後左右を包れ網代の魚の如くにて洩て出へき様もなく進退谷まる處を勢に乗て討つ程に大將戸高將監を柳井左馬助討取りてければ殘る三十六騎の者共及び雜兵等に至まて皆悉く討れにけり續て一黨來りしか叶ふまじとや思ひけん或は山に入るもあり或は跡へ引返しける勝はこりたる因尾勢追かけ討んと勇みしを柳井左馬助制して曰く必ず著け討することなかれ是より宇目堺曲木峠まては其間切所なれば日州勢も著け慕はんとこゝろえて由布内山の邊に兵を伏せ置き前後より中に取込め討んとする事もや有らん大將戸高を討取ければ全勝なり去來引取んと云ければ是に同して悉く梅牟禮城にを歸りにける其後は薩州勢因尾の往返叶はずして同國直入郡南郡朽網赤岩と云處より府内へ通路を成にける同く十九日に討取る所の首帳を曰杵丹生島へ出しければ宗麟感悅ありて乃ち袖判を加へらる

判

去十八日薩州日州之人數佐伯領往來之刻み於因尾數十人討捕首帳令披見候連々無油斷依御心懸切々忠節之段感悅不淺候猶田北宮内少輔へ申遣者也

- 首一 戸高 柳井左馬助討之
- 首二 將監 柳井平兵衛討之
- 首一 新 杉谷兵部丞討之
- 首一 柳井彌右衛門討之
- 首一 三代勘解由討之
- 首一 杉谷源四郎討之
- 首一 柳井外記討之
- 首二 後藤勘之進討之

- 首一 稗田左馬助討之
- 首二 深田左京進討之
- 首一 柳井雅樂助討之
- 首二 稗田加右衛門討之
- 首一 吉良舍人助討之
- 首一 柳井喜右衛門討之
- 首二 河野藤兵衛討之
- 首一 柳井市之進討之
- 首一 染屋五郎左衛門討之
- 首一 柳井左馬助侍討之
- 首二 柳井外記内侍討之
- 首一 柳井雅樂助侍討之
- 首一 甚左衛門討之
- 首一 覺右衛門討之
- 首一 太郎右衛門討之
- 首一 次郎左衛門討之
- 首一 彦兵衛討之
- 首一 五郎三郎討之
- 首一 次郎右衛門討之

右之外雜兵六十餘人討捨也

鶴崎城合戦之事

中津留河原の軍破れしかは薩州方伊集院美作守野村備中守白濱周防守を大將として其勢三千餘にて十二月十二日に直に鶴崎城へと押寄る其比鶴崎の城主吉岡甚禰統増は宗麟の命に従ひ曰杵丹生島に籠城して鶴崎城には統増の祖父吉岡參河守入道宗勸か後室妙麟尼丹生小次郎正俊女と云ける者守禦し居たりけるか心飽まで剛にして坂額巴か跡を追ひ智謀軍術逞しく類ひ少なる老尼なり男子二人ありける嫡子掃部佐統久鎮興は豊前國妙見嶽にて龍造寺と戦ひ討死し嗣子有らざりける故に次男越中守統定遺跡を相續し是も天正六年十一月十二日日州高城に於て討死す統増は次男統定か子にてそ有りける既に薩州の大軍發向する由聞えしかは其來銳を防んとて妙麟兼て軍慮を廻し一城の砦を構へけるにも自ら出て繩張し外郭二三

の丸を見計らひける俄の事にてある間塀の裏をは板或は疊などを以て圍せ堀を藥研堀にして菱を植へ柵を振り柵の外には諸所に陥穴を拵へ其上を平地と成て城中より打出ん時目驗の杭或は篠を捨置ける智慮の程こそ淺からぬ抑此高田鶴崎の二邑と云けるは戸次の庄よりも此にとなりて戸次川高田の庄へ入んとして派分れて溶々と二邑を中にをきつなみ河水と共に縈帶して自らなる琵琶の体誰か巧に成しつらん鶴崎は首に似て高田は腹を見る如く中間二川相寄て最狭かりし處を以て頸に似たるか故にとて琵琶の頸とを名つけたる此處にも二重に堀を通し外の堀には竹の燒柵を立て内には築地を用意して鶴崎并に高田三百町の十徳丸式部大輔同刑部丞同助作同權左衛門尉以下土民百姓等を驅促し軍議を示し今や今やと待つ處に薩州勢三千餘にて押寄する待設けたることなりければ我も我もと討て出爰を専途と攻戦ふ妙麟其日の裝束には鎖鉢卷を無手としめ着込の上に羽織を着長刀携へたりしかり相從ふ侍女に至るまで皆括袴に鉢卷し太刀を佩たる其有様偏へに勇士にことならず妙麟は築地の陰に相よりて外より内へ入る味方あるをは大に耻しめ押返し／＼せなと士卒を勵し下知する程に命を鴻毛よりも輕し蒐出々々戰て徳丸三郎兵衛同勘右衛門同中書を先として二十餘人討死す此強戰に薩州勢此所より入りかたくして川を東へ打渡り白瀧山に陣をとり重ねて鶴崎城へ押寄て見れば僅の平城に堀も築地も俄に拵へたと見え要害さまで堅固ならず殊に大將尼なりければ何程の事あらんと思ひ悔り只一揉に攻亡さんと勢ひに乗て驅たりければ件のまつらひ置たる處忽然として大山の崩るゝ如くどさ／＼と落入たりける程に

人馬上か上に重り伏し杭にぬかりて失せにける殘る軍兵膽を冷しあはつる處を鉄炮二百八十挺雨の如くに打かくれば討るゝ者數を知らず案に相違やあたりけん此城急に攻落しかたしとて元の所に引退く其後は寄手の者共穿に恐れをなし所々に放ち置きたりける牛馬を奪ひ先に追かけ其路につき隨て押寄せなどするは不自由にこそは見えにけれ既に寄手攻動すと十六度に及ふといへ共妙麟術を替へて防ぎし故たやすく攻落す事を得す只陥穴を埋られ外郭の屏を破られ三の丸先手を乗取られたる計にて一二の丸を堅固に守り猶相支へて戦ける程に寄手は多く討るれ共城中には手負死人十餘人には過ぎさりけり妙麟は自身を安穩ならしめす常に夜寒を防くには酒食を饋り憐みを垂れ持口櫓々に至るまで晝夜隙なく周廻し士卒を勇め軍慮を示し敢て怠る事もなく首を實驗するに至ても自ら手をかけ是は士か彼れは雜兵なるかなと沙汰する有様古今世に鳴る名將も斯やらんと各感し合にける有時侍兩三人妙麟の前に出て只今までは戦に勝利を得させ給へ共多勢に無勢の事なれば如何に矢猛に思ふ共開運更にあるへからず御忠節も一旦御勵しましませは今は降參仕候ても然るへからんと云ければ妙麟勃然として面色かはり大に怒て汝等は臆病至極の者かなと云て國光の太刀を抜き耳のあたりを振廻せば三人共に耻たる色御尤にて候と畏て退出したりける斯て數日に及ひしかば薩州の三大將思慮を廻し妙麟譜代の家臣中島佐玄猪野道察へ使者を以て金銀を送り遣し今は干戈の争ひを止め向後互に別心なく申し談度候間兩人の計ひにて妙麟下城ある様に和睦の扱ひ宜く頼存るなりと云送りける兩人軍の始終を察し勘るに行末

のほと覺東なく降参するより外はなしと思ひ妙麟に三大將の旨趣を伸ふ妙麟曰く思ふに數日を歴るならば城中兵糧玉藥等皆悉く盡ぬへし然らば一旦和平をなし重ねて謀を廻し討へき間彼等か望に隨て和與の儀宜く相計らへよとありければ玄佐道察三大將に斯と云ふ三將喜悅淺からず放火本ま、脱文ある歟の残り本に放て城かまへの屋敷を經營し妙麟に相渡し薩州勢は皆城中に入替りぬ妙麟方の者共は在々所々に居て薩州勢に打交り過にし軍の手負に逢ては是は某か射たる矢疵彼れは何かしか鎗疵など、雜談などして居たりける妙麟は從來智謀いみしくして雨中徒然淋き折節には城中へ音信し又ある時は三將を私宅へ招き珍膳菓肴種々の美物を調へ置き若き女の顔好きに酌など、らせ酒を勸めて饗應せり是は今様彼は昔しの風流とて飛燕か袂靜か舞も斯やと思ふ計りに戯れ唄はせ敵の心をとらかしける謀とは夢にも知らず身を空蟬のうつゝなく心も虚に浮されて面白やとのみ興しける誠に傾城傾國とは後にを思ひ合せける

權現嶽籠城事

狭間山城守鎮秀は高崎の城よりかへり一族共を召集て義統の命令を委細に語り近郷の諸士と心を戮せ相共に敵を防て民家の難を救はんと思へとも人の心計りかたし又此のまゝに茲に居て敵を引受たりとも後詰なくんは民侶を救はさるのみならず一族從類諸共に淺増き死を遂なんもうたてし所詮要害の地に據て敵を難所に引受け快く戦て討死せば生前死後の本懐ならんと議定して狭間を去ると二里ばかり領地の内なる猿渡村權現嶽と云處を俄に

こしらへ一族家臣は云に及ばす近邊の郷民等までに催促してを籠りける此權現嶽と云けるは大龍山永景寺の丑寅に當て陵嶮たる一嶽屹立として峙ちたるに殊に蛇生瀬ウツリと云ふ流れ來て西北の麓を廻り湍聲常に激漸たり谷風亂雲蜀道の難に均しく壁立疊嶂瘦嶺の登陟し難きも是には過さしと思しきに柵を結せ逆茂木を引き或は大木を落さん爲めに綱にて繋きあらはに見へぬ様にとて上へを篠なるとて掩ひかくし加之大石小石竹の燒削等までに品々用意仕たりける南に續きたる龍原村と云より往來あるといへとも僅の小徑殊に猶巉岩たるを履行は軍馬の便りなしかたし東の方に雙ひたる燕嶽と云けるに平松上野助向井藏人兩人に兵を授て遣し置く是は敵の後ろより横矢を射させん巧なり去程に島津兵庫頭義弘去る十二月二日二萬五千の軍勢を三手に分たれ一手は一萬五千餘騎自ら領して朽網に居一手は新納武藏守忠元其勢六千餘にて玖珠郡の内津野無禮と云ける城に森帆足小田長野など云ける者大軍にて籠ると聞攻從んと馳向て見れば巖石雲に聳へ要害堅固なりければ攻上るへき様もななく去れ共鬨をつくりかけ身をなきものと攻しかとも寄手のうたるゝのみにして城中疼む色なければ武藏守思へらく重ねて方便を廻らすへしとて遠卷にして居たりける一手は武藏守か息右衛門佐久將其勢四千餘騎にて大野郡へ打出て先つ手初に松無禮の城を攻んと押し向ふ折節城主田北平助義統に相隨て龍王に到り留主には老母并に家頼の人等のみにしてさしたる者の有らすと云共地の利の嶮難なるを見て輒からずや思ひけん矢入れをもせず押通り朽網か與力に案内させ同七日大分郡の内阿南の庄船か尾の城へ押寄せ鯨波を揚げたりけれ

は城中に齋藤將監等和矢因幡土師彌七等を先として四百餘人ありけるか同く関を合せける中にも齋藤將監は鉄炮の達人にて城戸を開かせ只一人有る大石を楯として敵の登るを待處に足輕大將よと見えて小川掃部兵衛と名乗り歩卒三十餘人を率し先に進て來る處を待設たる筒なれば放つと均く掃部兵衛只中を通されて馬より下にとうと落つ城兵是に勇みをなし小野藤九郎東家平助土師彌七を先として七八十騎討てか、れは薩州勢たまり得ず二町計り引退く係る處に笠和矢因幡兼て朽網入道か内通に與し合圖を示し置きたりければ時分は好きそと城中を走り廻て火を放つ折節山風はけしくして忽ち餘烟地を掩ひ猛火熾にもへ上る寄手は是に勇みをなし勢ひに乗て攻上る城中の老若男女如何はせんとしてあわてさわき我先にとそ落けるか親討るれとも子はあらず主人は敵と戦へとも郎等はを扶るに暇なかりし程なりければ往く先の險難なるをも願す若や助る事もやと流の早き谷川を是非なく是越へんとして押流されて死するもありける係る處に武宮辻の臺橋爪鳥の鼻など、云ける處に籠り居たる者とも後詰の爲めとて來りしか城中火かゝりたるを見て力及はず夫よりも引んと欲して歸るさに彼の者共を恤んで大津留河内守鎮益か居城松か尾と云けるに誘ひ扶け入にける其外所々に籠り居たる大友方の小給人共船か居既に落ると聞き未敵の寄せさる先に懐えす落行き去にけり新納右衛門佐久將はたやすく城を攻落し此勢に松か尾を陥んとて大津留さして押寄る然るに此松か尾と云けるは大津留嶽の東南にして後ろには高山残々と聳へ萬仞の青壁刀を削り前は幽谷深々として千丈の碧潭藍に染む只鳥ならては翔りかたぐ攻む

へき様の有らざりければ守り居たる計りなり城主大津留鎮益は大友に隨て出て留主を守る者共一つの所に聚て敵を防ぎ退るの議定を成ける其間に鎮益か老母并に妻子大軍の圍たるに大に怖れ居たりけるか懐るに忍ひすして共に自害し伏ける程に籠城したる者共此上は縦防きて能守り敵を退けたりとも詮なき事とて夕まくれに徑を傳ひ思ひ思ひに落行けり寄手は斯と聞よりも我先にと亂れ入り資財雜具を奪取り勇み進んで其より山城守か籠たる權現嶽へと押向ふ

權現嶽の城合戦事

斯て權現嶽の城には大津留河内守よりも老母妻子の事共を兼て憑れける故に迎越へき爲めにどて使者を遣しけるに時松と云處に到り川を隔て見たりけるに薩州勢雲霞の如く先陣既に松か尾に著山に漫り野に滿て隊伍嚴整なりければ何方よりも忍ひ入り誘ひ出へき様もななく所詮歸りて此由を述へ後詰を遣はさしむへしと思ひ立歸りて斯と申たりければ鎮秀是に應じてやかて人數をとゝのへ次の日遣しめたりけるに敵早や松か尾を攻落し直に權現嶽の城へ押寄るとの急を告ぐる使者に路にて逢ひ大に驚き其より取て返し引籠りて緊く守て待居たり薩州勢此間は諸所の砦に人數を分て攻けるか今度は四千有餘騎を只一齊に押向ふ先陣は城より西北の方川を隔て陣をとれば新納右衛門佐久將は賀須懸原の小高き處に旅をすえて日も早や虞泉に呑きなんとする比ひ先陣後陣同時に鯨波を作れば城中も同く関を合せける其聲山谷響を交へて天柱も折れ坤軸も摧けやすらんと夥しく兒童婦女の輩はふるひ

わななく計なり去れども暮に及びぬれば其夜は空く打過ぎぬ翌日は新納右衛門佐營外を巡見して此城かしこくも嶮難を帯ひたる物かな急に攻んと欲しなは味方の損亡多かるへし方便も有へかりければなりとて諷に許さしりしかども所々に控へし陣よりも隼雄の若者共早や川岸を打越て無方かゝりに攻上る城中より是を見て弓鉄炮を放ちかけたるに難所に控し敵なりければ少か手負たる者も怵へず轉ひ伏ては石にて身を破る況や竹鎗に當りし程の者共甲を透されざるはなし城兵鎮秀に向て曰く敵は前後と右とに川を帯ひたり西一方の地つゝきより不意に夜討をかけたれば忽ち川へ追ひ入るへし鎮秀曰く我兼てよりは是を思はぬにもあらず去れども三方に川を帯たる處の備へ只をろそかの事にあらず諸軍の心を一つにせんと欲してなり又彼は多勢にしてもとより覺悟の精兵味方は無勢にして身を懐くの老幼たり出て敵對すへき者僅二三百にも足らず此無勢を以て諷りにかゝり手負討死多き時は當城争てか持たるへき何とそ後詰の有らましかはきひしく敵に切かゝり追崩すへきと思へ共今人の心區々にして誰れかは我軍を救ふへき只堅く守て時々或は罵詈訛悪口し或は辱めなどし怒を越させ攻來らせて討へきなり夜討は然るへからずとこそ止めける薩州方には勝利なく徒に日を送りけるを本意なき事にや思ひけん一日大勢攻上る城中よりも是を見て又竹鎗を突落す去れども是を事ともせず手負死人を乗越々々攻上れば城中よりも五六十騎鎗をひねつて突て出る後陣の大勢是を見てわれ討すなどて川を越我も我もと攻近きけるを燕城より下立て散々に矢を放つ所は元より難所なり進退自由ならざりければ寄手の者共容易渡

る事を得ず猶々豫々として居たる處に先陣まくり落されければ後陣も進に及はず共に崩れて引き退く其日も又手負死人こゝかしこに充滿たり其後は薩州勢急に攻んとする事なく諸方の通路をさし塞き兵糧を盡さしめ降らしむへき謀にて遠攻にして居たりしかは仲元寺甲斐之助二宮源助平野馬之丞など云ける者鎮秀を諫て曰く是非に勢を二手に分て夜討をかけた破らすは終には糧糧つきはて只犬死をどくへきなり平に今宵と勸れば鎮秀尤なりと申しける程に馬場庄藏向井藤藏仲元寺甲斐之助平野馬之丞甲斐太兵衛三ヶ尻長門之助園田六郎次郎二宮源助宮崎大學小野源九郎須美太郎左衛門平井將監等を先とし其勢八十餘人なり鎮秀法を出して曰く必ず深入りすへからず最初に構へ置きたる陣屋一つを打破らは皆悉く引取るへし下知を背くことなかれと堅く制して日の暮より五人三人つゝ分れてこゝかしこより川岸を傳越へさせ夜の更けゆくに隨て敵陣近くあつまらしめ又別に大勢を打出し強きに川を越へ渡らせ弱を河邊に下立てて先に進し者共の篝火守る者共に恠められて喧き聲を合圖に此方より同時に鬨をどつと作れば薩州勢大に驚きすは夜討よと川岸に眼をくはつて居たるを見て猶しも曳や聲をして川を渡さん勢ひを成しける程に薩州勢陣々よりも川邊の敵を防んど只一片にこゝろ得ければ西の方は中々に思ひ寄りける處に八十餘人の兵共とらと云て入り散々に攻たりければ手負討るゝ者多く陣屋を打破り討捕首をも兼てより前し合せし事なりければ切弁にして引退く河邊に居たる者共も皆城中に歸りぬ其夜は酒宴を促して兵共をいこはせ蹴をならし笛吹さしめ悠々たる体をなし翌日も亦右の如く謠ひか

なて、朗詠の興を催し折々には高聲に叫はせて敵兵大勢なるとても鼠輩何を恐るゝに足らずと云て或は笑ひ或は罵り辱めて居たりける薩州勢是を聞狭間か少かの分際にて嶮岨をたのみにかくまでもあさむく事こそ奇怪なれ縦千丈の石壁萬重の鉄門たりと云とも攻落さては置くへきかと大に怒り皆攻支度を仕たりける去れども久將思慮深くして諷に是に隨はず鎗大將組頭其外古老の者をあつめ各異見を問はれけるに淺久間鞞負と云し者進み出て云けるは惣して頃日味方の者已前の軍に勝はこりて餘りに敵をあなとも搦手へも勢を廻さす只一方よりかゝりし故勝利を失ひ候ひき今宵の中に勢を分けて雙方より攻たらましかは城中少かの勢なる故前後を支へ難くして落城せんこと疑ひなし此儀は如何と申ければ尤然るへからんとて則鞞負を大將として一千有餘の勢を付けければ朽網か家人に案内させ室小野と云處より其夜潜かに川を越へ權現嶽の南の龍原と云處に到て夜の明るをそ待居たる城中には兼て斥候を出置し故室小野山に火の揚るを見此宵敵兵南にまはり候らひけると告ければ則城中より燕か嶽、謀を傳へて曰く猿渡山の林中に潜に勢を埋伏し敵の後ろを支へしと前合て城兵等明日の合戦一大事運の窮達こゝにありとて弓鐵炮の手配し大木等を上か上に積重ね猶竹鎗の穂を揃へてそ待たりける案の如くに薩州勢其夜も未だ明さるに追手搦手同時に鬨を咄と作る城中にの態どうらたへたる体にして鯨波をも無調子に侵々として揚たりければ先一番に搦手の勢龍原より襲ひかゝるを待設たる伏兵等思も寄らぬ高みより弓鐵炮を放ち懸る薩州勢は合圖を差ふへきならぬは矢炮をいはす無二無三に竹策きはまで攻よする

城より竹鎗つき落すに當て倒れ伏者をば乗越々々攻上るを二宮源助是を見て大薙刀を電光の激する如くひらめかし一散に馳下れば相續て五十餘人我劣らしと討てかゝる伏兵平松向井等百餘人にて居たりしか弓鐵炮を投すて、是も鎗にて突てかゝる又城中より目の下に敵味方見分安く猶竹鎗を突落し大石大木投かくれば争か以て怵ふへき開たる方へと左へ亂れ川に落入ける程に跡より是を救んと續し勢諸共に龍原へとそ引退く搦手斯の如しと云へとも北よりかゝる本陣の勢雲霞の如くなりけるか搦手の破るゝにや臆しけん未だ墓々しくもせず楯を雙へ竹束を構て居たる計りなり右衛門佐久將是を見て河邊に馬を打寄せ先手の者共遲滞せば後陣より切棄て攻上るへしと下知すれば先陣こらへすかつきつれ後陣も續て曳や聲宛も潮の湧くか如し城中より弓鐵炮或は竹を突をすと云へとも大軍敢て物ともせず山の半腹までに攻上る城兵今は戦つかれ既に角よと見えける處に兼て期したる大木の綱手を切て放しければ鳴はためいて大山の崩るゝ如く落かゝりし程に忽ち微塵と成もあり或は是を避んとして共に押合衝動して互の刀に身を破られ死を致す者もありける去とも是を物ともせず乗越々々攻上るを又大石を落し掛け、れは今は攻るに力つき河邊をさして引けるを追討んとて城兵等我も我もと進みけるを平井將監堅く制して止ければ其儘にして止にける此日薩州勢の討死八十餘人手負の者は數知れず城兵七人討死し手負は二十餘人なり

權現嶽の城和睦之事

新納右衛門佐久將は僅の砦に攻かゝり勝利を得さるのみならず士卒多く討せぬれば空く引

退かんも歎息し攻んとするも兵すゝます案し煩ひ居たる處に或者是を諫て曰く鎮秀縦ひ勝利を得氣にのると云へともさして大身なるにもあらず要害堅固なる故に今まで守り保へたれ今五七日も遠まきに糧道をさし塞かは終には降を致すへし又其内に時合を見一攻せめて見たらましかは落まじきにもあらずと云ふ又一人か進み出いやく城の中兵糧の程あなかりに計かたし戈鋌刀鎗矢炮などは兼て期したる事なれば怖るに足らずと云へとも大石大木等の類は幾許くと云ふ數を知らず貯へ置し事なりければ此方の死傷多くして兵進み得さりしなり若し悠々として數日を送り敵に援兵ある時は雙方より挿れて由々しき味方の大事ならん所詮辨舌巧なる者を差遣し賺て彼に和を乞せ若し領承せば其に事よせ引退んに如はあらしと云ければ久將此儀然るへしとて先づ其口才なりけるを且し擇て居たりける城には今日敵陣のまつまり返てあるを見て又もや如何なる奇策をか廻して攻來んと心を惱しめける處に二宮源助頃日の夜討より戦毎に先を掛て首級も多く獲たりしか數回所の深手を負ぬれば昨日の暮ほどに終に虚くなりける加之城中には痢疾と云ける煩ひの行るゝことを歎息けれども此病の發生する事如何なる疲勞に依けるを醫書にて是を考るに痢は是濕熱及び食積三者なり多は熱に屬す亦は虚と寒との者にありと云々實にや時しも冬の空山上陣屋の憂住居に飲食滋味の羹なく醫療も乏しかりければ彌盛に成るまゝに今は早煩ふもの半はに過たり殊に老人幼稚の輩多くは命を失へり中にも狭間か一子鹽松と云けるは今年十三歳なるか是も痢疾の難にかゝりて今朝未明に空なる其外この間の戦に勇を振ひ威を逞して精神を

勵したる者共次第に重き枕にふし其苦み忍ひかたき飲食共にすたれぬれば中々便りを無りける鎮秀紅涙にまつみ口惜や今までは一手の援兵あるならば敵陣を追退け譜代の家民等まで安堵の思を成さしめんと思ひし甲斐もなかりける不運の程こそ是非なけれ今にも敵の攻來らは皆犬死をすへきなれば下部の雜人たる者は老幼病者を介抱し何方へも落忍ひ命を全して時節を待へし我が一族たる者は悉く自害せよと思ひ切たる眼色に皆神色を失へり斯る處に斥候の者走り來て敵陣よりも武者一騎出來ると告たりければ此方へ入らしめ惡しかりなんとて平井將監兩三輩を相伴ひ酒肴を携へ城外へ少し下て筵を設け共に並居て盃の興を催し悠々と座ら敵の陣營を打なめたる體をなし居たる處に件の者鎧の上に緋の羽織を着歩卒十餘人を具し川に臨て馬より下り筏に乗して越渡り平井か居たりける處へ近付よるを將監は何方より何地へ越れ候ひけるを斯籠城の處なれば容易く通し申さん事之こそ叶ひ候まじきと云ければ彼者則手を束ね慇懃に蹲踞して某は新納右衛門佐か使者村井權之助と申者にて候山城守殿へ仰上られ給るへし主人久將申入候は今度島津の命に隨て當城に罷向ひ互に義の爲めなればこそ是非なく箭鋒を交しなれ然るに大友義統公豊前へ御退去ありし後郡庄多くの薩州に従ひ申され候ひぬ此上は狭間殿御一黨も共に心を傾けられ歸順ましますへきに於ては何方にても御望の處を先知一倍宛行るへき由兵庫頭義弘方へ申遣し既に内意相極りぬれば向後御長久の御思案然るへくなと辭を盡し申ける將監曰く山城事今般當城を枕とし討死と思定て候へは承諾如何と存すれとも此旨を申聞せ同意に於ては此方

より返使を以て申入へし左なきに於ては使も進らせましく候好其同意の程は左も右も幸ひ是に小竹筒あり所ろは從來山地なれば菊の酒をと思召しきこし召とて様々にもてなしてこそ返しにける此由狭間に語りければ我大友の氏族として鳥津に従ひ何の面目ありてか世人に面を對せらるへきや重て使者の來りなは一々首を刎軍門に曝すへしとて敢て肯ふ氣色なし將監重て某不肖の身を以て多年厚恩を蒙りぬれば兼てより死を一等に極しなり然るに今度粉骨して働をし恩賞にも預るへき者共を先として此病難にかゝり危事旦夕に迫れり御賢慮如何に存候へとも一と先彼か望に任せ賺て退かしめ重ての御計策然るへく候はんと諫ければ鎮秀尤なりとは云へとも賺して退かしめんとせは定て質を取替さん人質を取かはさは大友方に疑れ後難のかれ難かるへし然らは一尙討死に如はなしとて議定未だ整さりける處に二宮源助か弟庄次郎とて今年既に十六歳に成ける者進み出て曰く憚なから某に姓名を御許し給はらば敵の望に従ひ出ん一旦彼等退きなは如何なる秘計も御心の儘なるへしと申ければ満座の士大夫悉く詞を齊ふして最も然るへからんと云ふに隨ひ鎮秀も顔色とけて感賞し汝未だ若年にして能も命を我に歸し身を敵に委する者かなと斜ならず悦ひ則三ヶ尻長門助を使者として和融すへきの由を申せしかは案の如くに右衛門佐人質をそ乞にける三ヶ尻其儀に候は、狭間か嫡子鹽松を進らせん其替に御一族の内一人遣し給はるへし左なきに於ては此契諾争か整ひ申候はん右衛門佐曰く當陣に我親戚を具せさりければ去ぬへからんする者を十人遣し國許より重て計らひ申さんとて酒を出して賞し返しけり此由狭間に語

りければ彼借名をしたる鹽松をやかて遣し十人替り質を請取り狭間の邑龍祥寺の傍に圍を造り籠置きけり斯て新納右衛門佐師を瀧の河内に班せは狭間は敵を謀りて退けたりし事なりければ翌年の五月まで權現嶽を退すして居たりける其後曰杵へ注進し討捕首級盡く實験にそなへければ宗鱗大に稱歎ありさて又請取置し者共をは誅すへしとそ下知せらる狭間を初め相從者共に至まて是を誅せば鹽松か身の上如何と思へとも是非なく是を殺戮して又實験にそ入にける其後四塞狼烟絶へ九天鳳瑞新なる世と成りければ秀吉公より命ありて人質及び奪れし者共皆本國へと送り還しぬ彼鹽松も薩州にて大友一家の者なりとて疎略を成さず置きけるか是も還されたりければ悦わること斜ならず狭間は先に人質を殺して還すへき者のなかりし故に僞て此十人疾爰許を欠落して逃歸りしと云ひければ薩州にて狭間は道を知らぬ虚偽なる者にて有けると甚た嘲哂せしとかや

三河内城没落事

茲に日州曰杵郡三河内と云ける處は佐伯に隣てありけるに頃俄に一城砦を築き日州勢楯籠る由如何なる故と尋るに薩州勢佐伯の内へ打入んとき一方を支ん爲めの便にとて經營したる端城なりと聞えしかは惟定曰く其城暫も闇くへきにあらす急に陥つふすへしとて家臣高畑伊豫守舎弟理兵衛同苗勘左衛門尉を大將として一千五百を興へしかは既に打立んとせし折節在々所々の農民等此由を傳へ聞先に日薩勢來て我々等に至るまで大に困掠したりけるを今此時に報せずんは何れの時かあるへきとて我も我もと馳加りける程に其勢都合二

千餘人十二月下旬三河内さして押寄す去程に三河内城には日州の住人甲斐宮内少輔と云ける者遣兵七百餘人を率して楯籠る此宮内と云けるは去る十月廿三日に島津家久佐伯太郎を賺んとして玄西堂に十九人を相添差遣されける時番匠淵に於て皆悉く打たれしに淵に飛入り只一人死を免れしは此者にてそ有りける今當城の大將として備へを堅くし紀律最も嚴重に守て居たりける然る處に佐伯勢寄來て初の程は方々より鐵炮を放ちけるか後には同時に押かゝりて一二の城戸を打破り一度に唾と込入れは宮内少輔志はし支て戦ひしかども争か防ぎ止へき甲の丸へと引登る是に替て七百人鎗ふすまを作て喚て蒐れは佐伯勢ものどもせず真中に追取込め微塵になれと攻たりける程に大半討れて殘る者共叶はしと思ひけん一方の尾崎より我先にとそ落行けるを勝に乗て五六丁追討にして城中を暫時の烟と燒拂ひ瀬越と云處までこそ引にけれ尋常の者なりせば直に落行くへかりしに宮内元來曲者にて少しも屈する氣色なく敗散したる者共を再び集め自ら真先に進み佐伯勢の跡を慕てかゝりけるを伊豫守是を見て取て返せば宮内も姑く引退き重て慕ひ來りけるを理兵衛勘左衛門兩人共に鉄炮を一度に放ていあやまたす馬より真側に打落す定て二つ疵あるへし日州勢目前に主を討せて口惜く當の敵を討取て武恩を爰に報せんと無二無三に割て入り一騎も殘らず討死せよと罰て巴の字に廻り十文字に討て通れはさしも勇し佐伯勢立つ足もなく蒐破られ剩へ伊豫守二箇所まで手を負ぬれは思はず陣を引退く去れども理兵衛勘左衛門勇を振て攻戦ひ難なく四五丁追退け引返して士卒に向ひ敵は鐵炮二十挺には餘も過し多くは弓にて有る

へき間味方の矢をは放つへからす敵に矢種を盡させよ敵より射棄たる矢をも皆悉く拾取れよと云終て引き往ければ日州勢弓鐵炮を放ちかけ跡を慕て追來るを取て返せば臆と引き敵引はあつくと馬を歩ませ又近付は取て返し追つ返つする程に日州勢終に矢種を射盡して今は早や只一箭をも射さりけり時分は好と佐伯勢磯打浪の岩に當て返るか如く同時に唾と喚て返し鐵炮稠く追蒐々々打程に二十餘町になんくとして有峠に引登て旅をなし又一方の間道の茂みの中にも兵を伏置き二手に分れて居る處に日州勢は懲もなく山の半腹までに攻登けるを待設たる峠の勢大山の崩る如くに同時に唾とかけ下風ウロコ三十人討捕ければ間道の伏兵も横合より突て出何の手もなく追まくり又三十人討捕ける佐伯方には今度の合戦に死傷の者十餘人には過さりけり其よりも日州勢三河内さして引退けば佐伯方には勝鬨を取行て梅牟禮の城にを引にける去程に佐伯惟定無二の忠節粉骨の働き秀吉公聞召及はれ則感悦の書を下賜はりける其文に曰く

今度仙石權兵衛尉不慮之仕合無是非次第に候然る處に其城堅固に相抱候由神妙之至に候先き勢追々被差遣頓而被出御馬島津事可被刎首段不可移時日候條今ま少之間丈夫之覺悟專一に候也

正月三日

秀吉 判
佐伯太郎殿

態と染筆候其城堅固に相抱へ候段尤も以て神妙に思召し候今月廿日廿五日羽柴八郎を

初め爲先勢被差遣御人數候殿下二月の末三月始に至て豊前表へ可被成御動座事八幡大菩薩非偽候今廿日卅日之間丈夫に可相抱候此砌無二之覺悟誠に忠義不淺候彼の逆徒等悉可被刎首事案之内に候條可被成御褒美候間家中之者共に申聞せ成勇彌堅固に可相蹈候兵糧玉藥之事可相籠之由被仰付候間可差遣候猶追々可申聞候

正月十七日

秀吉朱印

佐伯太郎殿

豊薩軍記卷之八終

豊薩軍記卷之九

駄原城合戦并逆瀬豊前守討死之事

小固不可敵大寡固不可敵強とかや島津修理大輔義久逆瀬豊前守を斥候の大將として家久に従はしめ豊後國へ遣はし志賀太郎親次か倍臣朝倉一玄か籠りたる駄原城在岡城西二里を攻へしと命せしかは豊前守急ぎ彼地へ馳參し先近邊を放火して次第々々に攻近んとそしたりける一玄此体を見て曰く當城は斥候の爲めのみに構へ置たる要害なれば多勢の敵に圍れ争か以て叶ふへき愁なる軍をし味方を多く亡しては親次への不忠のいたりいさや面々今宵の内に菅迫の城に移り重ねて方便を廻らすへしと衆議既に一決して堀柱を切て押し倒し引退きたる其跡に自然と城中火起て燒失せしめん巧にて留主の火繩と云物を拵へ置てそ出にける斯て二更の比をひに件の火繩發り出て家に移て次第に熾んなるまゝに猛風中より吹起り餘烟十方に蓋ひ炎は天に漲り上る豊前守是を見て謀とは思ひもよらすこれは定て城中の手過ちにてそ有るらんいさ此弊に乗取んと眞先に進み出堀際まで走寄り内を窺ひ見たりけるに人あるへきとも見えされは不審に思ひ関を作り走入て見てあれは落行たる其跡に家のみ燃てそ有にける豊前守大に笑ひ拔ぬ太刀の高名とは斯る事をや云ならん及に血ぬらす兵を損せずして城を陥いるゝことともい比類なき大功なりとてやかて火を消し其儘に入替てそ守りける斯て朝倉一玄は菅迫の城に在て岡の城へ密に使者を遣し右の次第を演説し御勢を賜はるへし駄原の城に籠居たる者共を悉く討捕申候はんと云送り

にける依之十二月廿二日志賀掃部助後藤遠江守大森彈正等に一千五百餘の兵を與へて差遣したりければ則到て軍議を成す中にも志賀掃部助朝倉一玄云ひけるは尋常のことくに城を取巻き攻へからず只大手よりのみ攻て搦手を圍ます敵を開たる方より走しめて三方より相討は十分に利を得へし先陣は掃部助後陣は一玄後藤遠江守は横合にかゝり大森彈正は搦手より差廻したる尾を隔て谷間に兵を伏せらるへしと既に手配とのほりて先陣の掃部助大手に進み弓鉄炮をまきりに放ちかけたりければ城中よりも打出して半時はかりもさへて後城兵討て出ければ掃部助如何しけん三町ばかり追立らる後陣の一玄入替り豊前守か勢の中に會釋もなく討てかゝり勇猛を振て驅たりければ逆瀬か兵此勢に辟易して城中さして引入けるを先陣後陣一手に成て透をあらせず付け入に亂れ合てを戦ける城兵必死と成て戦へは寄手又追手の出丸まで追出されて踏こたへ諸所に在ける大石を楯として鐵炮きひしく打かくる元より城中には外側の堀或は家に至まで一玄悉く焼亡したることなれば楯に取へき物陰なくして討るゝ者數をまらず豊前守今は防くに堪へかねて搦手より落行けるを姑くありて後追手の二隊一手になり追かくる向には初に廻り居たる大森彈正北の谷に待かけたりしことなりければ前後を敵に狭れて度を失ふたる折節に又遠江守横合より突てかゝり三方より攻立ければ逆瀬か兵叶ふへき様あらずして此にては討れ彼にては取籠られなどする程に次第々々に減少して今は早や主従八騎に打なされ沼田の疇の細道を心はそくも落行處を後藤大學同市助はせ來りて深田の中へ追込み兩人してを討捕ける今度の合戦に岡方疵を

被る者廿九人戦死は十三人なり夫より四將高みに登り勝鬨を取行ひ討捕處の首級を持せ岡の城へ凱旋し志賀親次の實驗に入れ豊前守か首に付て後藤大學同市助初太刀を仕候某は其次にありと云市助是を然りとせずして互に功を相讓る此者共は數度の高名ありし故不珍事なりと思故にや依なるへし孟之反か伐らすして馬の不進也と云し類に異ならず親次此首を大將の規式に均しく實驗し戦士の功を論する事は古より是多し然るに今斯相讓ること神妙の至りなり決斷するに不及とて同文同日の感狀を兩士へ與へられにけるさても朝倉一玄か駄原の城を引退き菅迫の城に籠りたること最も宜き軍術なり左なくは一玄及び士卒等に至るまで皆悉く討るへき物なるをとて太た賞歎せしとかや

朽網赤岩合戦并足達四郎か事

去る十八日に佐伯太郎惟定因尾に於て薩州勢の通路を討しより以來佐伯の往返叶ひ難くして南郡朽網と云所を過て府内へ往來したりけるを志賀太郎是を聞急き彼に馳向て路を遮り討留よと大森大炊助後藤遠江守中尾伊豆守を大將として一千三百餘を附與しければ則命に應して朽網赤岩邊に到り三將三處に伏を成て一の伏は中尾伊豆守二の伏は後藤遠江守三の伏は大森大炊助と相定め追々切所々々に至るまで或は三百或は五百の兵を伏せ山には斥候を付け置て鳴を静めて待ける所に薩州よりの騎馬武者五十騎其勢七八百人計一列に來りもせず二三隊に引分けてを來りにける是を見て一の伏にありける中尾伊豆守此伏せ宜しからすとて忽ち直し待處に早や伏の内へ入たりけるを時分は好とて前後の伏兵同時に起て討て

懸り暫しせり合ひ戦處に後藤遠江守は小高き處に驅登て鐵炮廿挺下矢に成して討かくる更に虚矢のあらさりければ其數多く討れにけり薩州方の兵共斯る時節は必ずしも左右に心を移すへからず只一方を討破りて通らんには如しとて曳々聲を出し大森大炊助か第三の伏の中へ無二無三に討て蒐り一丁餘り追立けるを中尾伊豆守後藤遠江守一手に成て跡より頻に追討は薩州勢踏止り爰を専途と火出る計戦ける初め敗走したりける大森大炊助も取て返し前後より狭て命を塵芥よりも軽くし必死と成てを揉たりける未だ雌雄もなかりしに諸所の谷々峰々に埋伏したる者共鳥の如くに翔り林の如くに圍んで三方より取廻し喚叫て攻たりける岡勢加様に増けれとも薩州方には援兵なく次第に勇氣をとろへて大半亡ひ失にけり討洩されたる者共は谷岑傳ひ落行く處を岡方案内者なる故往さきくを遮て此の尾崎彼の谷間に追つめて六百餘討取ぬ岡の方には或は味方の矢に中り或は敵に討れなどして死傷は僅か十八人なり爰に後藤遠江守か組の歩弓頭に足達四郎と云者あり其性頓機穎脱にして辨舌無礙に云まはし殊に精兵の手利なりけるか何とか仕けん午の刻より未の終までの戦に分捕高名せさし事を無念に思ひせめて一人雜兵なりとも討捕らんと軍場より辰巳なる三宅山に分入りてある徑の岩陰に身を潜め居て待處に其長普通勝れたる容貌魁偉の壯士一人三尺餘りの太刀を佩き急に來て四郎か矢先につき當りつと通るをやり過し弓をなけすて無手と組を事ともせずして七八間引立ててを行にけれ足達もまた、かなる者なれば藤の如にからみ付猶押伏んとしたりしを争か我に及んやと力をはつて投んとす去れとも心の儘ならず

上を下へと返しけるか更に勝負はなかりける今は互に勢力つきため息つひたる計なり四郎は敵と組しより弓の事のみ思ける勇士の習ひ戰場にて命を落すは期したると終には討か討るゝかせん我名をよそに知れたるにはあらね共譽を跡に留めんには態とも弓を捨てて敵に見せたき物なれとも少しにべをきの所ある故今日は弱きを持出たり是を敵より拾はれて小兵にてありけるなど、云れんことこそ口惜けれと是のみ思たりけるか急度工夫を廻して謀り討ん者をも思ひ組合ながら云けるは今日の合戦に人こそ多き其中に殊に御邊と某と斯山中にて只二人相撲のことく仕ることをもへは深き因縁ならん我等は元來豊後の者にて候はす日州財部の者なりけるか此彼に渡り奉公せしかとも未だ立身することなく二三ヶ年以前より當國に來り志賀太郎親次の家中に住居仕り候ひぬれども見かけかゝりの身上なり今斯く參會致せしを幸の縁と覺ゆれば後日に御邊を頼み申薩州方へも參るへし和融をせんと思ふは如何と云けれと此男聞くよりも尤の仰なり某も日向國にて蚊口四郎と申者なり同國の儀にてもあれは向後互に入魂に申談し候はん國も同じく名も同きことどもは定て深き縁ならん此上は弓矢八幡も照覽ましませ争か別心なかるへしとて其時に取放れて息を繼ぎ先に棄たる弓を取り腰に付たる餉菓子などを取出して彼の男にも食しめ行末かけての因を約し早や落給へあの茂みには我方か味方多かるへし是よりも妻手に付この尾崎を五六丁はかり那邊へ行けは往來の通路ありとて苦シコホに教へ見送る體に賞モテなして太刀に手を掛たりけるか謀とは云ながら斯睦く云ひかはしたるあたら若者と思ふ心の出來て七八間はのはせしか

とも終には思ひ返しつゝ、鉾矢取て打つかひ追かゝりに射伏せ首を取にける其後岡方討取る首級を取集め親次の實餘に入れれば感賞甚不淺即時に隊將たる者へ感悦の書をたひにけり其辭に曰く

今度於朽網赤岩敵多勢討捕心地能働手柄之段無比類事共令喜悅候彌可被勵忠戰事肝要也追而可賀之候恐々謹言

十二月二十四日 親次

中尾伊豆守殿

大森彈正後藤遠江守へも感狀是に均き故省略せしめ訖ぬ足達四郎か働の事遠江守親次へ委細に披露を遂しかば能計ひたる物かなとて黄金をあたへ其外忠の淺深に隨ひ各々祿を宛行る夫賞其功則有忠者は速に進み且罪當其罪則有咎者は恐れ退くと云へり強將の下に弱兵なし上を學ぶ下なれば雜兵被官に至るまで其心剛なりき

篠原目落城井白坂石見守討死事

同二十四日島津中務少輔家久白坂石見守を大將として六百餘の兵を授け篠原目の城攻とゝろかさしむ此城は岡城より西北三里にして家中と云所にありけるに志賀太郎親次か從臣阿南三右衛門惟秀と云ける武練琢磨の達人なる者を大將として籠置たりけるか折節勢微にして百餘人には過さりける去れども軍の法なれば関を合せ城戸を開て討て出阿南も自ら鎗にて當り暫し戦たりしかとも叶ふべき様あらずして城中さして引退き一族郎從等を召集め議

定しけるは多勢に無勢如何に矢猛に思ふとも叶ふべき様更になし先此度は降を乞ひ重て方便を廻して素懷を遂んに如はあらしとやかて書翰を調へて石見守へ遣しける其文に曰く

乍恐呈一翰候今度一戦不得勝利事雖相似武略拙以小勝大難又依時運者歟某無勢而楯籠繞小城然糧盡兵困重而戰貴國引兵放箭無勇力候被免前日之罪者屬幕下爲忠勤倍臣臨事急降敵非本意候得共異國本朝非無其例私雖爲不肖之身苟爲太神末流穢其家名親次元來禮義亂忠賞不正依之累年含遣恨子細有之親次行跡之段者老父道喜心以可被思食知候哉哀以此次事貴國爲一政民生前之思出何事如之哉右之趣被分聞召於御同心之御返事者速退城渡端矢倉之番等被仰付者生々世々可爲本望候若又和睦有間敷與之儀候者無是非引請御勢枕此城可討死外無他事早速御返札所希候誠恐誠惶謹言

十二月二十四日

阿南三右衛門尉惟秀

白坂石見守殿

石見守披見して蟻螂か斧と云しを能知て引かはりたる文章かなと悦て乃ち返書を成す其辭に曰く

芳札令披見候紙面之趣一々承届同心候間早々城中片付貴殿者搦手之丸江御移尤候如仰臨事降參之事者誰迎武士之法候間更不可爲耻辱候彌悔先非向後可被抽忠節候連々達太守之上聞一廉御扶助有之様可申成候早解四方之圍甘勢候間其心得可有候猶

以對面可申談候恐々謹言

十二月二十五日

白坂石見守

阿南三右衛門尉殿御返報

阿南此書を見るよりも能こそ計ひたるものかな我思ふ圖に相當れりとして則出て降禮を遂げ城を渡せば石見守やかて打連れ入城して惟秀には搦手を預置き共に守て居たりける元より惟秀は敵を謀る底心上には服する體にして白坂に隨順し宜しく勤仕したりければ石見守も打解て懇にそもてなしける或時阿南種々物語りの次に某主君と頼みたる志賀太郎親次如何なる故にや依けん隨分忠を盡せども賞せられざるのみならず彌うとみ果られて奉公終に外様に成る此般斯る城壘を僅の勢にて預置しことども、某を矢に矧んどの心得なるへし係る恨を胸間に含むと云へとも時刻到らざりければ空く打過ぎ居たりしなり日來の鬱憤を散すへきは此時に在ぬと覺ゆ夫に付親次在仕る岡城と申せしは力攻になりかたき堅城なりとは申せども家久殿御出馬あり某内より起りなは落城何を難からんと他事なき體を顯して語にければ石見守忽ち智辨に落されて誠と思ひ入にける不運の程こそうたてける阿南は隙を窺ひて何とそ素懷を達すへしと晝夜肺肝を碎きしか便好かりし事ありけんひそかに使の者を親次へ遣し相圖を牒し合せける岡の城には斯る方便の有とは知らず篠原目の城即時落城するのみならず剩へ惟秀敵と一味し此方へ敵對せんとする由日來にも似ぬ阿南か舉動言語同斷の至なりとて大に怒り居る處へ阿南方より使者として右の趣伸ければ親次感

悅斜ならず彌以て忠勤を勵すへしと委細に約し此上は一時も急に押寄すへしとて同廿八日中尾伊豆守大森彈正兩人を大將として一千七百餘の兵を相附せたりければ乃彼地へ馳向て陣々の手分を成し了はり後藤美作守輕卒五百餘を卒して追手の堀際まで押寄せ鐵炮をつるへ放し頻りにこそは打かくる阿南の搦手を預りながら城中を走り廻て云けるは寄手は僅の勢にして殊に隊將たる者は尋常肩を並へたる後藤美作守なりけるそや墓々しき事よもあらし多勢を以て一戰に討散されよと諫れば石見守けにもと思ひ下知を成したりけるほどに城戸を開て八百餘人矢一節をも射るまなく抜つれて討てか、れば美作守か五百餘人立足もなく追立らる殘る城兵是を見て尙も勇んで一人も餘すまじきと勢ひ猛にの、しりて一度に墮と蒐出る岡方元來烏雲の陣を與義としたる事なりければ此の山際彼の尾陰より鳥の如くに群來り雲の如くに驟霧出て或は高さ處より横合に山風掛などするほどに差も勇みし薩州勢前後左右を遮られて堀池等共云は、こそ或は隕り或は深田に馬を乗込て打ども引ども上らさりしを方々より蒐出て皆悉く討捕ける阿南の猶も搦手に相圖を窺ひ居たりしか時分は好きそと城中を那邊這邊と馳廻りて檣搔楯役所々に火を放ては北の松原に待居たりける原田伊賀守即城の後ろより一番に乗入ける大將白坂石見守は牀机に掛て居たりしか叶ふまじとや思ひけん手廻僅か十四五騎にて追手を出て落こちの勇氣もこゝに緩むなる老戸の口とやらんまで落行ける跡よりも餘すまじきと阿南惟秀頻りに追つめ討てか、れば石見守も引返し暫く戦ひたりけるか惟秀手にかけ二人討係る處に志賀親次此合戦を心元なく思ひ

けん佐藤右京亮を大將として二百餘人を従ひしめ篠原目の城後詰の爲めとて重て遣しける處に老戸の口にて白坂に端なく礮と行逢たり右京亮案内者なる故行先々々の道の節所を切りふさき走りかゝつて石見守と無手と組む右京亮は最前に石見守か下部の者鎗にて股を突しかども薄手なれば物ともせず安々と取て伏せ終に首を搔たりけり此日の軍に岡方疵を被る者十七人戦死は廿八人なり其後高き處に登て相圖の貝を吹しかは諸軍一所に集て悦の凱歌を唱へ岡の城へと引退きぬ其日の首をは親次も規式を調へ實驗あり並に戦士の戦功の淺深あるに隨て感狀或ハ祿を宛行はる中にも佐藤右京亮は大將石見守を討たる働き拔群なりとて感狀與へられけるにも餘に替たる文體なりしかや此般駄原篠原目の合戦に討取所の首級を誌し白杵丹生島へ披露を遂け其後使者を京都へ上せ委細に上聞に達したりしかは秀吉公其忠貞を甚賞歎し給ひて即感悦の書を送り賜はり其文に曰く

舊冬十二月於_二駄原篠原目_一兩度_二遂_一一戰討捕首之註文并書狀披見候碎_二手無_一比類勦別而感悦之至候爲_二御先勢_一去月廿五日羽柴備前少將打立候羽柴中納言其外追々被_二差遣_一候殿下來月朔日被_二出御馬_一候條彼逆徒等急度可_二被_一刎_二首候事不可_一有程候成_二其意_一辛爾之術等無用候猶黒田勘解由可_二申也_一

二月八日

秀吉

志賀太郎殿

秀吉公西國御出陣用意之事

鳥津修理大夫義久盛んに猛勇を振ひ同中務少輔家久に大軍を相添へ豊後國へ打入らしめたりけるに長曾我部元親同信親仙石權兵衛尉秀久戸次川原の軍に打負信親命を殞す事西國在陣の諸將より京都へ注進ありしかは秀吉公大に怒らせ給ひ我を待請すして謾に軍を始むるのみならず怯弱の舉動其科輕からすとて仙石權兵衛か領地讃岐國を召上られ尾藤甚右衛門尉に下され長曾我部元親は戸次川制詞しける働の上息彌三郎信親討死彼是以て忠節にぞ思召れける斯くては九州の擾亂鎮るへからず急に出陣すへきなり其用意を致せよとて石田治部少輔大谷刑部少輔長束大藏大輔に仰付られ人數三十萬の糧米馬二萬匹の飼料一年分を次第に差下され奉行には小西隆佐建部壽徳吉田清兵衛宮本長次郎四人に相定め十二月十日大坂を出船して國々の御藏米を兵庫尼ヶ崎へ其手寄に隨てそ着させける此外大楯繩細引斧鉞鎌熊手相鋏等に至まで廻船百餘艘に積夫々の奉行是を司て年内より遣され諸軍勢着岸の時其手々々へ配り渡すへき由嚴密に仰付られけり明れば天正十五年正月月中旬より上方の諸軍段々に出勢す諸軍に出さるゝ掟の條々

- 一 兵糧並に馬の餌料九州の地へ令_二參著_一の日より可_二被_一下行の事
- 一 出勢の日次二月十日より無_二相違_一出立泊々の不差合様宿奉行次第に可_二守_一於其旨事
- 一 喧嘩口論は雙方共に其罪遁間敷事
- 一 追立夫押買諸事狼藉等有間敷事
- 一 奉公人先主に暇を不_二乞別_一に主取候を先主見付候而理不盡に誅戮仕候者還而可_二爲_一越度

見付次第當主人に相斷其上にて可申付又届有之後其者を逃し候者當主人可爲越度事
一城責の事相定る攻手の外不可出合事
一戰場先陣後陣は軍奉行の下知に任せ私の働き有間敷事
右軍法を背き自由の驅引於有之者可被處嚴科者也依て如件

天正十五年正月十一日

朝日嶽落城之事

豊後國大野郡宇目朝日嶽の城には柴田入道紹安費しより後日州の土持次郎九郎親信を島津中務少輔家久より籠置れたりけるに宇目中の土民を悉く相從へ隣郷を奪掠し亂妨狼藉甚以て法外なり佐伯太郎惟定是を聞き其儘にしも聞くへきにあらすとて一族佐伯久左衛門尉惟澄同小右衛門尉統安高畑伊豫守を大將として二月中旬因尾曲木峠横川兩處より差向け、る此勢宇目に打入て所々を放火し諸士郷民等を殺戮し或は搦捕りなどして城の麓まで押寄せたりけるに城中鳴を静めて音もせさりければ寄手も急に攻めんとせすためらひ居たるのみにして未だ矢合せなかりし處に佐伯惟定より廣末與三右衛門尉を以て先驅とし土佐入道匡徳に籌を廻さしめ速かに城を乗取へしと云ふ匡徳曰く斯城下まで押寄せたる上は乗取に相同し落城何ぞ幾程あらん縦急に攻たりとも明日には落つへからす其上松尾の城よりも合戦急なる由を聞若も後詰に來りなはた大なる軍となりて墓々しき事はあるましとを答ける惟定聞て其儀尤なりとは云へとも我軍卒を出し僅の城を見なからに一戦もなく引退んは餘

りに詮なきことゝもなり一方を明け其餘をは重々に備を堅し足輕に鐵炮放せ試て其後術も有へしと重て矢野大炊助を先陣として差遣す匡徳先手の者に向て其後詰の有ん事を言上したりけるを餘りに思慮の過ぎたると思召れて候き誠に過ぎたるは猶及はさるか如しと云に相同し成ほど今度の謀の君命に従ひ進すへきなりとて諸卒に示し追手口に段々に備を張り仕寄を付てはや鐵炮軍を始りける係る處に惟定も自ら來りぬ日も西山に沈しかは籌を燒て通夜互に打かふ矢炮の響き鳴止む隙もなかりけり斯て土持親信は勝負の程を計ひて叶ふましとや思けん夜半計に搦手より潜に忍ひ落行しを知る人更になかりけり曉方に及し比押の鐵炮落行しを追かけ討捕り城中を一片の烟となして歸陣せり是より士民の生捕れしも皆還住をを成にけり宗麟此軍戰を聞れ感悅の書を送り賜はりける其文に曰く

今度土持親信相籠朝日嶽之城刻被出自身馬令落城御心懸之段感悅不淺候度々之軍功切々之忠節不可勝計候猶田北宮内少輔方へ申遣候恐惶謹言

二月十三日

宗麟

佐伯太郎殿

小牧城軍井督君謨付陳墮瀧之事

去年十月上旬島津修理大夫義久郎從北田強兵衛尉矢嚙彈正忠を大將として一千八百餘人を相添へ豊後國へ亂入せしむ兩將命を承て大野郡緒方庄に發向し小牧の城に居て近邊に相働く爰に緒方三十六人衆と云けるより前は戸次紀伊入道道雪の與力にて有けるか今は志賀太

郎親次の與力と成て三十六人の士の頭人をい藤井右京進五郡民部少輔と云り及び耳忍の
兵士同心して緒方高尾と云處に要害を構へ籠るもあり或は同所栢野城へ據もありける其餘
の武士は一旦計策の爲に丸田強兵衛尉矢嚙彈正忠に相従ひ小牧の城に楯籠りける彼矢嚙丸
田と云けるは兩將共に比類なき勇士なり殊に矢嚙彈正は數度の軍功隠れなく射る矢の鏃を
も口を開て嚙留る神變奇異の者なりければ島津家久其姓名を矢嚙彈正忠と號せらる是を以
て遠く異朝を尋訪ひ昔年隋の世に當て督君謨と云ける射の達人あり目を閉て弓を挽くに目
を射んと思ふ時は目に當り口を射んと思ふときは口に當る其比王靈智と云者ありて君謨を
師として射を學ひ曲に其妙術を得たり王靈智後に君謨を射殺て己獨恣に誇んとす君謨時に
弓矢なし一短刀を執て射る矢を請て是を截る末後の矢をは口を開て其鏃を嚙み王靈智に謂
て曰く汝射を學ふこと三年なりといへとも未だ汝に鏃を嚙むことを傳すと申ける其時王靈
智先非を悔て謨を尊崇すること平日に過たり今の矢嚙彈正も殆ど是に相均しとを沙汰した
りける明れば天正十五年二月十五日志賀太郎親次是を聞て曰く小身輩の中に縦ひ金鉄忠直
の志ある義士たりとも援の兵なくんは心ならず降參せん況や彼等は某か與力の者共なり是
を見るに忍ひすとて右田佐渡守大森大炊助後藤遠江守原田伊賀守丹肥前守後藤美作守此等
を宗徒の大將として總軍二千五百餘人を與へければ則小牧の城へ押寄る此城はさのみ峻難
の地にもあらず又平地にもあらず北の方には大河を帶て流の下に陳墮瀧あり今一方の差出
たる尾崎には幾重ともなく堀を掘り柵を結ひ塀には狹間を透間もなく開き敵寄來らば弓鐵

炮を放ち掛んと巧みし故すみやかに攻拔かたき要害なり斯て岡の方には軍勢の手分あり
て追手には大森彈正中尾伊豆守搦手には原田伊賀守を大將として後藤美作守は河を隔て陣
を布き後藤遠江守丹肥前守は川を渡して備を張り表に足輕の矢炮を進て動亂の機を考へ右
田佐渡守朝倉一白は東夏足より攻寄る既に總軍相かゝつて後遊軍なりける後藤大學敵味方
の強弱を奈何と窮ひ巡りけるか諸將に向て申けるは中尾伊豆守は今朝より諸將に抽んで攻
戦ひ一足も不退一の城戸を打破り乘込申され候に各何とて猶豫せらるゝ事をやと喚りけれ
は搦手に寄する伊賀守大に耻て士卒を勇め攻登る強兵衛尉是を見て我に等き逞兵を左右に
從へ討て出金の團扇をふり上ふり上下知する所を志賀か若黨阿南五郎と云ける者二人張
に十三束三伏忘るゝ程に引保て弦音高く切て放ては思矢坪に過たす強兵衛か高股に籠深に
こそは立たりける大事の手なれば叶はずして城中さして入けるを寄手は此に勇みをなし追
手搦手同時に嚙と攻上る此時始め降參しける緒方耳忍の兵とも元より武略のためなりけ
れは忽ち内より起り出追手の陣屋に火を放ちをめきさげんて戦へはさしも剛勇なる強兵衛
内外の敵に攻立られ防くに術あらずして残りすくなく討れにけり強兵衛尉齒嚙をなし鎗
ひつさけて突て出丹肥前守と志はらく戦ひたりけるかもとより痛手は負ぬれば終に肥前守
に討れにけり矢嚙彈正も比類なき働して志賀掃部助に討る兩將すてに亡ひにければ城中忽
ち火かゝつて残る兵我先と落行けるを或は追散し或は川に追入れて皆悉く討捕りぬ此日の
合戦に岡の勢疵を蒙る者十八人に及びける其折節生裸なる武者一人狹間より出て逃んとし

て川に飛入たりけるか浮ぬ沈ぬ流れしを隼雄の若者共見ると等く五十人われ討捕とて鐵炮を頻に放ちかけしかども一つも中る事なうして陳墮瀧より眞逆さまに落たりける微塵にならんと見る所に憑夷か術を得たるにや游き揚て身つくるひし走去んとする處を大勢追かけ取て伏せ首をかゝんとせし處を大森大炊助制して曰く是希代の士なり五十挺の飛丸にあたらざるのみならず此瀧坪に落入て身命恙なかりしは運命長久の者にてあり努々殺すへからすとして路糧を包み被服を與へ早々薩摩に立歸て義久に云へきは豊後國緒方庄小牧の城に丸田強兵衛矢嚙彈正籠られしを大友の家臣志賀太郎親次一手を以て攻亡したると委細に演説すへしと云へは彼者禮謝して去りぬ斯て討捕首級を聚め岡の城へと歸陣して親次の實驗に入ければ感悦太た不淺して即時に感狀を高名の士に賜りける

今度於緒方小牧城討捕矢嚙彈正紛骨之段不淺候自今以後彌被勵御武勇盡忠可被抽節事肝要候重一廉可申付候仍狀如件

二月十八日

親次

志賀掃部助殿

今度攻小牧城刻討捕丸田強兵衛尉紛骨不淺候自今以後彌勵武威可盡忠戰事肝要候重而一廉可申付者也仍狀如件

二月十八日

親次

丹肥前守殿

大森大炊助後藤遠江守等へも残らず感狀を賜はりける夫陳墮瀧の水經百歩にして其高きと十五間大水には唯一瀑常には十二陳列し水かさ増りぬる時には十三行共成にけるを是を雄陳墮と名つく大友義統詩を題して曰く誰從天上決銀漢陳墮十三澗一岩近比人々口如啞只聽雷霆起深潭又夏足川一行にして懸涯十八間なりけるを是を雌陳墮と號す落ちて則雄陳墮の流と合す兩瀧の相去こと僅に一町有餘碧潭均しくつらなり巖尖く苔滑かにして人の毛吼を寒らしむ山嵐の吹荒ては凱歌を唱へ瀾水流落ては鼓聲を調ふ常に午の時より脯時に至て虹と云り虹は純陽にして陰氣を攻る故なり寔に是州中の絶觀なり去れば近衛大臣龍山公大宰權帥に成て左遷の時路すから詠歌さまくありける中にも殊更此瀧を賞せられて布引をはたち計りは重ぬとも麓になりぬ豊國の瀧

鬼城合戦之事

同二月二十八日薩州勢大將誰とは知らず七八百計りにて岡の城の追手滑瀨暗燈か岩屋に出張し狼烟を擧たりければ城中より相應して挑灯か嶽に同く烽火を揚げにける志賀太郎親次右田中務丞阿南下總守を召して委細の事を云含め鉄炮の輕卒三十人弓の輕卒二十人を相添へ滑瀨に差向ける兩人河邊に打望んで敵を窺ひ見たりけるに寂りかへつて音もなし右田中務丞敵に云へきことあれども橋は引たり水増て川の瀨音も高ければ矢文ならては叶はしと矢立硯を取出し書んとするに筆の道もとより愚なりければ文章までも拙くて其跡りばかりをぬり付る其辭に曰く

城主親次思旨者滑瀬之岩屋被遂御出張共橋者引川者深雖成一戰互以墓々敷事不可有候明日此川上於御出張者小渡牟禮之渡出瀬踏可令知案内候自此方出向鬼ヶ城爲御暇乞矢合計申度候由親次存所也急度諸軍御歸陣之聞依有之如此候恐惶謹言

二月廿八日

右田中務丞

薩州某殿

と書て矢に卷て射送りける薩州勢の返翰に

羽檄拜見珍重此事也可押向鬼ヶ城儀殊小渡牟禮之渡可被瀬踏出之段尤以神妙候何様於鬼ヶ城期矢合之節而已恐惶謹言

二月廿八日

某

右田中務丞殿

と書て大の鴈股に拴り精兵に射させけるに其矢河邊の岩角をかけず射削りあまる矢か岸の面篋中半を立たりける既に其日も暮ければ翌るを遅しと薩州勢また東雲も曙やらぬに小渡牟禮の川の邊に打出何所に渡る瀬やあらんと彼方此方と窺ひける志賀太郎親次も城より西に當りたる上角と云所に早旦よりも打出て中尾右近大森彈正右田佐渡守阿南美作守同下總守同越前守大森大炊助丹肥前守志賀掃部助等凡一千餘の勢をは二手に分け鬼ヶ城に残し置き備を堅く守らしめ且又歩武者十六人川を渡して敵陣へ到らせ此瀬はさのみ深からぬ請速かに御越ありて寄せらるへしと云せにければ薩州勢不及一儀一度に颯と打渡つて鬼城の

半腹まで曳々疊して攻登る岡の方には兼てより敵を間近く寄ん爲態と矢炮を放たすし静りかへつて居たりけるに寄手は是を幸とし矢頃計りに近付寄するを時分はよきと三段の備へ先陣後陣三方より同時に喚て攻かゝり縦横無盡に討立れば争か以て怵へき皆谷そこへまくり落され多くハ川に追はめらる偶殘る者共は阿藏さして往もあり玉來へとも引もあり松本吉田其外の在々所々の村落に至らぬ處はなかりけり岡方元より斯あらんと兵を分つて置たる故此彼より起り出討て蒐れは爲方なく這々の體にして他地ともなく逃迷ふ斯る折節鬼城より南の麓河邊に添て三百餘人味方の引しも氣を屈せず備へを堅し傑然と十分に威を逞し傍を拂て居たりけるに志賀掃部助右田佐渡守一手に成て追つ返つ互に威風を抖擻して火出る計りに戦しか薩州勢餘りに辭理なく攻立られ浸しもそきに退きしか後ろの川にせり入られ浸々として凌ぎ渡るもあり多くは廻流激湍の逆卷中へ押流されて湫く水と諸共にあはれ墓なくなりてけり其餘の殘る者共は小渡牟禮の瀬の方へと落て行へも白浪や皆散々とを成にける今度の合戦に薩州勢の討る者混甲三百七十級岡方二十餘人なり鬼城にて實驗あり皆萬歳と壽きて勝鬨を取行ひ岡の城へと引取りぬ翌日岡の城中にて足輕及雜兵等一所に集り語りけるは昨日鬼の城に於て討洩されたる薩州勢木野に集り居ると聞くいさや行て討散らし分取高名したらんはいかゝあらんと云ければ尤なりとて六十餘人潜に木野へと押寄る其折節伊集院肥後の國より豊後に來り木野の勢に加はりて一所にありしを夢にも知らず僅か六十餘人にて突て蒐れは薩州勢昨日の遺恨を散せんと方々より群りかゝり中につらん

てあまざしとこそ攻たりける岡方小勢なりとは云へども心飽まで剛にして案内は能く知たり大勢を事どもせず勇氣たはます懸入て終に一方打破りとある山陰を楯として矢炮を飛ばし防さしか手柄立すな引取れと爰の谷あひ彼の尾陰徑を傳に一人も疵を被る者もなく岡の城へと引にけり

親次攻落所々城郭事

島津義久の舍弟兵庫頭義弘去年の冬の始より豊後國に打出朽網に陣營ありしかは大友家の功臣志賀朽網戸次一萬田など云へる者共從屬す夫より南の方三里はかりも有るらん志賀太郎親次か籠りたる岡の城と云けるあり此の岡城東西と云けるは十八町はかりにして南北に大河を、ひ四方ことく岩壁巖々としてそはたち松柏森々として路を閉ち苔深く岩滑にして手足を措に所なし要害無雙の堅城なる故朽網より程遠からぬといへともたやすく攻むへき様なくして空く時日を送り居られけるに親次却て薩州より朽網へ往來する者を浪野原邊に人數を出して打果せし事幾回にそ及ける夫のみならず剩へ義弘陣所に忍ひを入れ度々陣屋に火を放ち焼亡せしめける程に義弘是をもてあつかひなから岡の城をは見物のみにて打過ぬされは舊冬の始より明る二月の末に至るまで攻亡したる城郭は緒方普濟寺本田の要害白谷の園鳥岳朽網の城榎牟禮駄原篠原目高城菅迫鐵嶽小牧水五合鳥屋上角以上十五ヶ所なり右の内國人降參し明退渡したる城是多し志賀太郎親次十八歳の時なり

秀吉公九州御進發并海路風景事

斯て上方の諸軍勢難波の津より出船して先陣既に豊前豊後に着岸すれども後陣は未だ兵庫明石の沖に支えたり秀吉公は三月朔日洛陽を御立あり其日の御裝束には緋威の鎧に鍬形打たる龍頭の冑赤地の錦の直衣最花美にそ見えにける攝州大坂より御船に召れ水手纜を解て漕出せば旗本の七組御先に船を推立る御坐船の前には淺野彈正少弼木村常陸介か船を漕雙へ後ろには三奉行其外諸役人の船共を押續たり諸大名の本船供船透間もなく漕浮めたれば東は大坂三の濱北は葦屋鳴尾か崎高砂室の津につゝき南は淡路繪島か沖四方三十餘里か其間は舳艫を雙へ舷を隣りて恰も平地を行か如し數千艘の船ごとに家々の旗幕紋幄水引船印春風に翻翻たり幡連吹貫綺羅幟半さまゝの飾をなし意々の物好は春は三月の梢の花紅白紫黄を雜へたるも是には争てかまざるへき其外弓鐵炮鎗長刀を立てならへ金鼓の聲艦柁をさし其響き欸乃の節をとつて數百千艘の船なれば空に徹つて夥し御船には金森法印高山壽庵連歌師紹巴其外醫師祐筆俳優音曲の輩までを召連られすてに難波江の一の洲漂柱を漕離れば海山の眺望一方ならずさらぬたに春の景色はをもしろきにましてや名にあふ難波瀉堀江の葦も生立て波打寄する浦の松霞む煙の夕けしき雲井にかへる鴈金もよも見すては行かさらまし此方を見れば千歳ふる鶴なきわたる田蓑島民の竈も賑て君か御影をあをくなる雲ながくして生駒山幾世ちきりの姫小松岸の緑もうるわしく向ふに近き淡路島浪もあつかに詠れば紀伊路の遠山金の蜂蘆屋の沖をはや過て和田の御崎の笠松も春の夕邊の色ことに暮かゝる日の惜まれて御船を漕に漕寄する其の夜は御出船陣の御祝として俳優の輩を召

され舞曲數多御覽ありて御土器末々までも回くりける船々に燈す篝火揚提灯波に映し空を照らす遠く是を望み見れば萬星の爛々たるに異ならず漸く曉天に成ぬれば先船碇を起し纜を解き大鼓を鳴らし漕出す今日は殊更風閑に御船を岸に傍てを漕行きける遙に北山を眺望あれは雲より落つる瀑布あり如何なる飛泉そと御尋ありければあれこそ生田の川上にて布引の瀧なりと申上しかは秀吉公の御歌に

布引の瀧の白糸くり返し來て見んまての契むすはん一の谷を御覽して昔源平の戰場なりし事共御物語あつて鷓越の逆落し義經雄英の奇策を感せられける關吹越る春風に若木の櫻や薫るらんあた波噪く須磨の浦風に鳴散る百千鳥月見の松も枝垂て有りし昔をなつかしき光源氏の大將のくもりもやらぬ朧月憂名と共にさすらふる浪こゝもとに寄せぬらん彼の人丸の島かくれ行く舟をしと詠しける明石の浦の朝霧も水の烟も晴ゆけは眺にさはる隈もなし誰か工に筆染し繪島か磯を漕過て長汀曲浦の御詠め漸く日數重なりて御船を安藝國嚴島にぞ寄せられける神前に御參詣あつて神樂を奏し神馬を引れ御祈り事終り暫く御休息あつて廻廊に上り給ひて御詠歌など遊はされける

聞しよりあかぬ詠のいつくしま見せばやと思ふ雪の上人扈從にありし人々も或は詩を吟し歌を詠し皆幣帛を捧げゝる夫より御船を押出す凡そ難波の湊より赤間か關に至るまでは百五十餘里の海上の名にしあふたる浦山に御心を寄せられ雨奇晴好の風景に御眸を廻らされ三月十五日と申すには赤間か關にぞ着たまふ是處に毛利輝元より構へ置たる假屋あり是

に御移り御座て輝元を召れ當國の事とも委く御尋ありて後御殿を端居に出給ひ浦の濱ゆう幾重ともえならぬ望み無窮水色接天悠々たりしを御覽あり向ふに見えたる山は何所の山をと問はせ給へは門司か關にて候とを答へける扱は聞ゆる歌枕都にて聞しより尙氣色の艶なるそと興せさせたまふ折節丹後の細川玄旨も參られたりけるに歌やあると仰せければ玄とりわへす

昔人心のかきり盡しけん三十一文字の關の浦なみ

詠むれば空も霞める浪の上に雁の數よむ門司の關哉 佐々内藏助成政

扱阿彌陀寺に御參りありて安徳天皇其外平家一門の影像を覽あり

波の花散にし跡をことゝへは昔なからにぬるゝ袖かな 秀吉公

古への其名はかりはありなから姿は浪の春の海つら 羽柴出羽守頼隆

もしはくさかく袂をぬらすかな硯の海の波のなごりに 細川玄旨

名にしあう長門の海を來て見れば哀を添る春の浦浪 佐々成政

翌朝當地の體を考へ給ひ赤間か關には増田右衛門尉長盛を差置れ門司の城には丸毛三郎兵衛城戸十乗坊を入置る赤間か關渡海の舟奉行には羽柴勘八森兵様兩人に仰付られければ往還の渡海いと安かりけり今度九州出張の諸將には尾州大納言羽柴中納言同若狭少將同丹後少將同陸奥守同備前少將赤松左兵衛尉福島左衛門大夫羽柴丹後侍従同伊賀侍従同河内侍従同越中侍従同遠江侍従同松島侍従同敦賀侍従同左衛門佐高山大藏侍従生駒雅樂頭同主水正

木村常陸介同左近將監織田三郎水野惣兵衛淺野彈正少弼岩部中務卿法印瀧川儀大夫石川出雲守稻葉兵庫頭津田隼人正同大炊助戸田民部少輔同半右衛門松下民部少輔同加兵衛池田久左衛門南條勘兵衛龜井武藏守木下平大夫鹽屋平右衛門前野但馬守青山助兵衛村上次左衛門溝口金左衛門山田喜左衛門太田小源五九鬼大隅守岡本下野守蜂屋大膳大夫市橋下總守器部善七郎上田太郎勢田掃部古田繼部松垣左京亮山崎志摩守長谷川勘兵衛早川主馬此外年内より先達て下りける四國中國の大神小身諸奉行諸役人等計るに違わらず鍋島加賀守直茂は龍造寺政家名代として御迎に上りけるか九州案内の爲とて御先にそ下りける諸大名の本船供船門司赤間壇の浦東は田の浦向か島西は小倉柳か浦凡そ豊前長門の津々浦々に充満して幾千萬艘と云數を知らず盛んなりける事ともなり

家久歸陣并賀來刑部少輔鎮綱事

去程に秀吉公の先陣既に豊前柳浦に着岸せし由其隱なかりければ豊州在陣の薩州勢差て仕出したる事もなく敵の城々を攻惱して守り居たるのみなる處に取圍れなは味方の大敗なるへしとて島津中務少輔家久各所の陣を相収て歸郷を促されにける爰に豊州由原八幡宮の神職に賀來刑部少輔鎮綱と云ける者あり當時天下亂世にして業ならねども武勇を好み學はされども軍慮に長す宛も孫吳か肺肝より出たる如きの人傑也殊に忠貞の志深かりしかは大友宗麟かねてより密意を仰含められ偽て島津へ降り敵の術を此方へ告知すへしとの事なる故家久豊後出張の砌りより薩州方に隨て合戰の術なんと度々臼杵へ注進せり去れば此事藏せ

は彌露る世の習ひ家久是を洩聞れ或時鎮綱に向ひ御邊には當家に歸服して貳なき体なれば譜代の者と相替らす萬端議定をなす處に却て大友に心を通せらるゝ由告知するものあり但私曲なきに於ては靈社の午王寶印の裏に起請文を書れよと申されければ鎮綱曰く左様の流言これあるよし兼て承り及し故定て御咎に預らんと内々其覺悟仕しに何の御沙汰もあらざりければ遮て此方より申上んと存せし處に御不審を承り候ぬ起請文にも及候はず其申上たる者慥なる仁にて候は、某を御誅伐するへし若又不審者にてあらは其者や大友に内通仕候はん如し兩人御前にて對決仰付られんにはと色をも變せず述へしかは家久即ち理に服し此上は告知せたる者を召寄せて委く糺明し後日の沙汰に致すへしとて坐を立れにければ賀來は宿所に歸りける翌日家久又鎮綱父子を召寄せ昨日の事をよくくたつね聞けるにあとかたもなき事ともなり彌忠節を盡さるへしとて盃を賜はりければ鎮綱大に悦び獲罪於天無所禱と承る身にあやまりなくして死罪に行はれんことを歎き申てありける處に聞召し分られ喜悅の眉を開き候とて盃を戴きさまに衣服の下に著したる鎧の衿のはつれよりさらさらとしたる物見えたりければ家久を始め並居たる者共色を變して見えにける鎮綱少も騒かす今は何をかつみ申候はん今日召れ候は定めて某父子の者どもを誅伐の爲にてを候はん若さもあらは家久殿を恐れなから只一太刀にと存しこみ斯のことくの仕合なり懺悔に罪も亡ふとは只今の某の身の上とき事ならんと打笑ひたりければ家久武士の志は誰も斯こそあるへけれど酒も漸々酣に及ひし比彌國中の手遣頼み存るなりとて立れにければ鎮綱

は危き難を免れて宿處に歸りぬ斯て鎮綱はつくく思慮を廻すに若や討手の來りやせん左
 あらん時には討死をするより外の事はなし迹にて君の御教書を敵に執れて表裏の者と云れ
 ん事こそ無念の至り焼却せんには如しとて宗麟父子の密狀を火中に投して捨にける鎮綱か
 妻女是を見て主君の御判を悉く灰となして失んも餘りに勿體なればとて一二通密に藏し
 て盗取り帶へ縫込置しとかや去とも何の咎もなくして打過ぬかくて天正十五年三月八日薩
 州勢悉く府内を引取りける折節賀來家久に向て某か様に幕下をまたひ従ひ屬し申せし事大
 友家に對し不忠の者にて候へは爰に残り留りていかてか安穩なることあらん唯御供をし薩
 州へ越し候はん思ふに御歸陣の折に乘し付慕ふ敵共も是あるへしと存れぬ某後殿仕候はん
 とて退さけるか忍ひやかに勢を集め山に隠し谷に伏せ置き賀來に付置れたる薩州勢を先き
 に押立行きけるか行先險難なる處にて俄に弓鐵炮を放かけ拔連て討て掛れば節所の詰々よ
 り兼て相圖の伏兵等不意に起て戦ひける程に究竟の兵二十餘人討取て府内を差て引返す其
 後討捕首級を誌し宗麟の實檢に備へければはなはた賞歎不淺して感悅の狀を賜はりける
 今度薩州勢討入砌内通の事共申合候處切々注進之旨令喜悅候殊殿一戦之手柄首帳令披
 見感入候追而一稜可賀之候猶浦上入道可伸者也恐々謹言

三月廿八日

宗麟

賀來刑部少輔殿

其後秀吉公御出陣あつて大友家謀反の輩誅戮の砌鎮綱も敵と一旦和睦の事聞召及はれ御吟

味有りし時一戦の首帳又は内通の密書彼是證據あるに依り却て忠節の御書を賜はりける
 とかや

豊薩軍記卷之九終

豊薩軍記卷之十

鶴崎在陣三大將討死事

鶴崎へ在陣したる三大將も引退んと用意する中にも野村備中守妙麟か館へ來り我々明朝本國へ歸郷を促し候なり妙麟はいかゝし給ひけるを問ければ妙麟僞り云けるは自らかく大友殿を背き進らせ却て各々と厚く交りする上の何國までも具し給へ爰に残り止りなはやはか罪に行はれさらん我等か勢も残りなく召連れ參り候はんと云へは備中守悦ひて馬よ竹輿よと様々用意をなしにける妙麟野村を請し入れ首途祝ひ進らせんとて件の若き鮮妍たる女の得も云はれぬを酌として献酬度々に回るとに郢曲絃歌の絶妙に花の句も懐しく艶なる色にうつゝなく土器數重りにければ備中守痛く沈醉してよろばひく立にける妙麟つゝひて跡に隨ひ自も懸て立出申さんと他事なき體に後ろ姿の隠るゝまてに門送りし立歸て士卒に向ひ兼て議定を成けるは今此時にゐるを乙津川の邊に俄に人數を差遣はすそれには徳丸權左衛門同加右衛門同刑部同又左衛門尉統貞同兵部同式部同志摩同新右衛門中村新助同弟助兵衛已下其勢纔か五六十騎一村茂る藪陰に鳴を靜て居たりける明れば三月八日斯とは知らず伊集院野村白濱等鶴崎の城を出ゑつかに打て通る處に待設けたる伏兵等同時に起て討てかゝる去れども多勢に無勢にて一町計り引退き西の藪はつれ寺司テラジの濱にてふみ止り追つ返しつ戦ひける軍なかはに伊集院下野守白柄の長刀押取て一文字に討てかゝるを中村助兵衛渡し合て討捕たり伊集院美作守鎗をひねつて蒐りけるを徳丸又左衛門尉是を討つ

白濱周防守も鎗を取り七縱八横に突て廻り大に威風を抖擻トサツして勢ばうたりける處を徳丸式部四人張に十四束忘るゝ程に挽持て周防に辭を掛けければ直に突てかゝりけるを三間計りに近付け寄せ兵と放ては周防守胸板掛け射通されて馬より下に眞倒に落たりけるを周防か郎等馳來て肩に引かけ退んとするを二の矢を以て主従二人を射貫き同枕に臥しめける野村備中妻栗玄蕃諸軍同時に討てかゝるを徳丸權左衛門同志摩同加右衛門向新右衛門中村新助なと云へる者共勇氣を震て或は射伏或は切伏などして且し戦ける折節兼て相圖をなし置ける老若男女時分は好とて藪陰より鯨波をそ揚げたりける薩州勢是を聞き大勢にて蒐ると思ひ大に怖れわなゝきて我先にとそ逃たりけるを猶も頻りに追蒐て乙津川に追込み浮ぬ沈ぬる處を勢に乗て攻ける程に大半討れ溺て死するも多かりけり野村備中は流矢に中り郎等共に介錯せられ漸く落延たりけるか日州高城まで行て卒しけるとを聞えし鶴崎方の討死は中村新助一人なり妙麟は思のまゝに討勝て翌日究竟の士之首六十三持せ丹生島へ送りければ尼の身として希代の忠節古今の絶類なりけると稱歎限りなく則彼か嫡孫吉岡甚橋統増へ重ねて恩賜あるへきなりと有しとかや其後秀吉公此由を聞召し感讚太た不淺後日には是を召寄せ御覽せられんと宣ひけるか終に果させられさりける

朽網在陣の諸將引退事

朽網に在陣せられける島津兵庫頭義弘肥後國へと引るれば瀧河内に在ける新納右衛門佐久將も朽網を差て引ゑりそく殘留て防矢射ける者共をは狭間山城守鎮秀か家人其外林甚助坂

井惣助工藤長門など云ける者共押寄て十四五人討捕ぬ其中に宇野越中と云ける者をは生捕にそしたりける新納武藤守忠元は玖珠郡に在陣して速見郡を攻んと欲したりけるに由布院は深泥多く難所の由を聞及ひ棒か畑と云處にあし城の爲にとて俄に城を拵へ蟻村隼人助を大將とし内田主水を先陣として三百餘人を籠置しか味方の勢悉く引退く由を聞て是も引んとせし處に由布院に有合たる軍兵に荒木攝津守兼弘八坂主馬允鎮知大津留舎人允小佐井右允鎮員幸野外記允統直など云ける者共其勢七百餘人此弊に乘し分捕高名せよやとて急に押寄せ攻戦ふ難所なりけるに落へき方も敵にかこまれ進退こゝに極て蟻村隼人助終に自害をしたりければ内田主水は討死す殘りし者共は腹切り或は討死するもありける小佐井右馬允か與力に森山彌右衛門奈須右馬允と云ける者多くの手柄を顯して其日の一の高名にを記されける新納武藏守忠元は遮る敵のあらされは島津兵庫頭と打連て事故なく肥後國へと引にけり

山梅峠合戦之事

去程に島津中務少輔家久は府内を引て三重郷松尾に暫く居り同十六日に松尾を立三重と宇目との境なる山梅峠に差掛る志賀太郎親次此由傳聞き進肥前守後藤遠江守に一千五百餘の勢を授與へて差向る兩人緒方の庄の市に到て議定しけるは今度の合戦節所なれば野際の軍と違へし大軍を麾くるには鐵炮に如事なしとて鐵炮鍛鍊なる者を一千五百の中より二十人擇出す是等は皆百發百中正心思無邪直身正氣眼睛眇々たる三調子も空に浮ホへし者共にてそ

ありける兩將是等に下知して曰峠より七八分下茂みの中に隠れ居て自餘の敵には目を掛へからず惟家久と見るならば二十挺の鐵炮をつるへ放しに一度に討ち必ず仕損する事なかれ日來の稽古は此時なり中書をたに討捕なは兼て見置し間道より引取るへし不知案内なる薩州勢節所なれば追事も叶ふまじきを鐵炮の音の聞えなは峠よりも下風へし峠の筒は一挺も打事なかれと約諾きはめ鳴を静めて居たりける斯て島津家久は隊伍嚴整次第を亂さず先陣既に峠を越て早下り坂にを趣かる爰に肥前守か手に蘆鷹侯之助とて大力の勇士あり弓勢人に勝れ四人張に三尺五寸矢束を挽けるか鷹侯にて鹿を重て射通す事多し去るに依て名字と名の中に鷹侯とつゝけて付たる程の選シモなり度々の軍に高名せすと云ことなし去れども血氣盛んにして後さきの考へなく籠相第一の者なる故未だ立身する事なく歩弓二十人の組頭にありけるか空穂より矢一筋取出し四人張に打番ひ射よけにや覺えけん如何なる不運の者ありて此矢先きに懸り幾許多か命を失はん天晴中書か胸板をも通しつへう覺ゆると獨言して二三度すひさせし程に誤て取放し其矢飛て中務の先きに打たる兵の鞍の汐手の逃れにはつしと立つ馬は驚き騒揚り主は前に百と落つ島津家久此を見て此邊に伏兵ありと覺ゆるを卒爾に進む事なかれと峠に馬を控へしめ所々へ勢をを配られける後藤遠江守を見て今日の軍は仕損しけるをや去なから暫く控へて様を見よ今鐵炮を放なは二十挺の筒の合圖と相違すへし敵かゝらは踏こたへて討て多分打越者なり汝等心を静め日來の鹿鳥の思ひをなし目メ中ナすラりはりを肝要に見よと下知する處に堀八郎首藤五郎大夫とて武勇を勵み殊に鐵炮の

手たれなるか何とかしけん不幸にして二十挺の擇に泄たりけることを無念に思ひ當國小牧篠原目鬼ヶ城所々の軍に臆病したるためしな右の二十人より外の鐵炮は島津に當るまじきかどつふやきつふやき茂みを分て窺へとも多勢の敵の中なれば大將家久を見付け得す隼る心を居へかねて爽々鎧たる騎馬武者二人ありけるを各一人つゝ分て遠矢に放ちかければ思ふ矢坪をあやまたす眞倒に討落す薩州勢是を見て皆ことごとく馬よりをり手毎に鎗を押取々々同音に突てかゝりけるを岡勢五十八挺の鐵炮頻に打掛ければ死生は不知其數多く討伏する去れども是を事ともせず曳や聲して攻かゝり二丁餘も追立るを兼て揃へ置たりける横矢の者共尾つゝきより散々に射る夫のみならず坂の半腹に下し置たる二十挺の鐵炮相圖も相違したりしかは間道より傳ひ來て横矢に是も打かくる岡勢是に力を得火出る計りに攻戦ひ相引に相引て薩州勢は峠に陣をとりける岡の勢一同に今一軍と進めとも遠江守制して曰く薩州勢に智慧を付し事なれば峠を卒爾に越へからず縦ひ上より下風合ても墓々しき事よもあらし物の違亂に及びぬるは事の不調相にてあり薩州勢と合戦し親次一度も後れを取給はず今度の軍を仕損して日來の譽を失はんは詮なき事にあらずやとて宇田枝と云處まで引退き討取る首を數るに二十八級内混甲五つあり味方は宇田枝日野小田の雜兵彼是十七人討死す進後藤岡の城に歸りて蘆雁俣之助か軍令を背し趣き堀八郎首藤五郎大夫か傍若無人の行跡ゆへに術の相違したる事を悉く申たりしかは親次曰く是唯天の家久を助給ふ故なるへし軍の勝負は時の仕合分捕は獵の如し誠に天運に叶ひたる島津か鋒に逢て今度の戦

は十分の勝利なりとて満足斜めならず其後首を臼杵丹生島へ送り宗麟の實驗に備へければ感悅淺からざりしとかや

梓峠合戦并佐伯肩衝之事

去程に島津中務少輔家久翌十七日に宇目を打立ち豊後と日向の堺なる梓山を越んとす然る處に佐伯太郎惟定是を喰とめんと欲して自ら朝日嶽まで打出て先つ手分をそ仕たりける先陣は佐伯久左衛門尉惟澄高畑伊豫守二陣は泥谷左京進高畑新右衛門として相從者共には矢野大炊助泥谷左膳同志摩守同肥前汐月兵左衛門高畑理兵衛河野三左衛門奈須左京杉谷兵部同源四郎同帶刀同五右衛門等都合其勢二千餘人梓峠に打上て烏雲の備をなし勢を分て此彼に忍せ置きまづまりかへつて居たりける斯て薩州勢峠を越て既に二本杉坂を過んとする比はひ佐伯勢時分はよしと眞下りに鐵炮頻に打かくる更に化矢の無きのみならず重て透すも多かりけり後殿の尾合伊勢守少しも臆せず取て返し絶頂まで攻登る土佐入道匡徳是を見て横合より突てかゝれば兼て忍はせ置たりける伏兵等も同時に起り四維上下に群立て矢炮を放ち掛たりける程に差も勇みし者共も怵へず峠を背走す佐伯の者案内は能知たり左右の尾崎物陰より進來るも引退をも討伏せ討伏せ戦て軍の様を見る處に又七八十騎雜人原を先として曳や聲して攻登る二陣の隊將泥谷左京進眞先に進て敵陣の中へ割て入り七縦八横に蒐廻り勇を振て戦しか終に討死したりける士卒も多く討れ既に敗軍と見えける處佐伯の先陣後陣より鐵炮稠く打かける所は從來嶮難にて薩州勢蒐合すへき様なれば終に坂を引退く

此時日州田野の地頭と聞えし大身の武士後藤主水に討れける程に其手の死傷三百餘人に及ける薩州勢大に怒り又峠近く攻登りや、まはらく防戦して相引に引取ぬ其後佐伯勢麓へ下りて見てあれは行路盡く血ならずと云所もなく左右の山の草の葉まで赭に染りてありければ薩州方の手負死人許多にてそ有らんと想像して無慙と云も疎な。餘りにあわて引たりけん捨置たる荷物あり佐伯の雜人拾ひ得て蓋を開て見てけるに様々の物ありける中に肩衝の茶入あり惟定是を得悦ぶ事限りなし此肩衝の昔年公方義輝公御所持なりしを大友宗麟に賜り其後宗麟の家臣臼杵入道紹冊數奇の達人たりし故即ち是を興へられけるに此度薩州勢府内へ亂入したりし刻如何して取落しけん島津家久の手に入り永く他物となるへかりしを不思議に佐伯か手に渡りける其後家康公の重器となりて佐伯肩衝と召れしは是なり

志賀親次阿蘇出張事

同日の事なりしに志賀太郎親次坂梨を攻んと欲して肥後國へ打越る如何なる故ぞと尋るに深き遺恨のあるにもあらず肥後國高森以下の者共豊後の幕下たるゆへに薩州勢と數回戦たりけるに坂梨の引分れて島津に降り剩へ豊後の案内たるの由其聞えありければ是をにくみて攻んため阿蘇郡へ出張するにそありける明れの三月十八日に河野相模守同久助朝倉伊豫守阿南河内守同美濃守同下總守同越前守是等を宗徒の隊將として其勢一千有餘北坂梨唐木の城^{坂梨居城}に押寄る折節薩州伊集院の侍大將牛九^{ウヅ}立蕃と云者相加て城中大勢なりければ濕雲の雨を帯ひ暮山を出たる如くにたなひき渡りて討て蒐る豊州勢勇氣^{ヌキ}弱す蒐合せ面も振らず

攻戦ふ朝倉伊豫守鎗にて甲首を獲たりければ阿南河内守も坂梨名字二人討つ既に終日戦て日も早や西の山の端にをちなんとしたりしかり軍を止て相引に互に陣を引取しか薩州勢取て返し跡を慕て追來るを朝倉土佐守引返して一戦し宮地に陣を取にける其夜又高森へ薩州勢打出たる由聞えければ豊州方より援兵として堀紹巾同一佐其勢百六十餘人彼地に到り其と見るより直に討てかゝりければ敵もためらふ氣色なく相かゝりにかゝり兩陣互に入亂れ追つ返つ戦ける中にも堀紹巾と矢津留主馬助と押並て無手と組む紹巾の長刀を持ち矢津留の太刀を持たから上を下へと返しけるか何とかしけん矢津留か太刀にて紹巾か鼻を摺落す去れども矢津留を取て伏せ首を取る右田中務も疵を被りたりしか其究竟の勇士を討て宮地に歸りぬ其夜の終宵大篝火を燒て夜を明す此大將の軍令疎にして雜兵等徒黨して神前をも憚らす九乳の鳧鐘を損し社壇を破り獅子狛を薪とし鳥獸を殺して喰ひ亂妨狼藉あらゆる邪惡を振舞けること淺ましけれ未前に事を鑿る人の穴いまくし今度の合戦墓々しからしと眉を顰て鼻色せり大宮司八郎惟光安からぬ事に思ひなから無勢なれの力不及怒りけるか薩州の新納武藏守伊集院肥前守入木院祈答院豊後國玖珠郡を引拂ひ肥後國小田と云ける處に陣營して居たりけるを傳聞き斯と告たりける新納武藏守忠元聞と均く大に悦ひ時刻を移さず馳向ふ通夜急き行程に其夜の丑の下剋に阿蘇に着暫く人馬の足を休め人の糧食などつかひ馬に喰餌沓うつて十九日の横雲をらむ霞の内より押寄せ鬨を喧とそ揚たりける豊後の先陣中尾伊豆守大塚典藥朝倉伊豫守中尾駿河守朝倉土佐守等相かゝつて火出る計り戦け

る前の夜神前を穢し其身も穢れに觸たる奴原の眼に霧ふりをほつて物の黑白も見分たす草木も敵と思ふにや或の草に依て太刀を振り或の木に向て矢を放ち物狂はしき爲體にて自ら首を伸て切れと云のさる計りなれ何の手もなく雜兵等百五十餘人只あへなくも討れにけり薩州勢勝にのみ勇み進んで戦て兩軍互にさつとひき人馬の息をつきにけり中尾伊豆守士卒に向て日來のあらぬ者共の物狂しき果様是只事にあらす殊に山谷鳴動して殺氣四方に蓋ひ嶺の烟の愁雲と相交りて一陣の狂風に隨ひ此方を差て馳來る軍氣を窺ふとの斯る時節の事にてあり姑くも止るへきにあらすとて先親次の本陣を引さしめ諸軍もつゝひて坂梨の坂を登れり薩州跡勢を慕て追來るを中尾右京進取て返し坂の半腹程にして勇を振て良き防戦たりけるか大勢に取籠られ終に討死したりける其隙に諸軍事故なく岡の城へと引入にけり抑阿蘇大宮と申奉るの神武天皇第二の皇子神八井耳命の御子建磐龍命を祀り奉る靈驗新にして一度歩みを運ふ人の二世の悉地を成就し僅に御名を唱る輩まで萬事諸願を満足す故に上一人より下萬民に至まで渴仰の頭を傾けすと云事なし朱の玉垣さらゝかに賢き神の神葉も茂る木々の緑こく久堅の天津空新金の國津岩本地和光の月高く消々たる水の音索々たる松の風までも萬歳を唱ふかと疑かひし誦經の聲振鈴の音燎の影も神寂て生死長夜の闇を照す本有常住の月明かに霜の白幣かけまくも信感を添る媒となれり

巖石城軍事

斯て秀吉公豊前國に著岸あり馬嶽に御座を占られ三月下旬近江權中納言豊臣秀次卿を總大

將として宇佐郡へ差遣さる相伴ふ大名に蜂須賀阿波守六千餘騎尾藤甚右衛門尉三千餘騎中川右衛門大夫四千餘騎毛利右馬頭大江輝元及び吉川小早川已下四萬餘騎羽柴備前宰相秀家卿一萬餘騎黒田勘解由孝高龜井武藏守茲親佐々内藏之助成政等を相從しめられ宇佐の城へ押寄て既に攻んとする處に城主宮成吉右衛門尉目に餘る程の大勢なりけれの叶いしとや思ひけん弓を伏せ冑を脱て降參す夫より時枝城へ押寄せけるに一日防ぎ戦て時枝平大夫降參す又一手の丹波少將豊臣秀勝朝臣を大將として蒲生飛驒守氏郷前田肥前守利長に北陸道の勢を相添へ同廿九日同國巖石城豊前筑前の巖石城にありを攻させらる是の秋月種長か端城にて芥田悪六兵衛と云者を籠置ける要害勝れし堅城なりとい云へとも寄手大軍と云殊に秀吉公九州手始の軍なれの諸卒只一揉にと攻寄せ此折節立花左近將監宗茂より御着陣の祝使として立花三河守を指上たりけれの御前近く召れ汝の西國にて武勇の者と聞く未だ東國武者の城を攻る働を見たる事あるましそこにありて見物せよと宣ふ處に藩生氏郷か陣より武者一騎真先に進み何の障もなく城屏に著けれの秀吉公御覽有てあれを見よ三河とて居長たかに成て感悦し給ひ使番を以て問せられけるに蒲生か内關小伴と申者にて候と言上す其後氏郷へ小伴か働き頗る御賞詞をそ下されける小伴後に蒲生源左衛門とを號しける彼につゝいて諸軍手強く攻けれの即時に外郭を乗破り詰の丸に押つむる城兵防くに術なく首を延て降を乞けれの命を助け城を請取蒲生氏郷を入置る筑前國大隈の益富城に秋月種長か父宗金籠居たりしか此勢ひに怖れをなし秋月差て落行ける程に聽て大隈に御陣を移させ給ひける秋月

古所山の城には秋月か一族其外豊筑肥の國士相集て其勢二萬五千餘なりしか殿下大軍の威勢に兼ての企や違ひけん何れも縁を求て降參し或は故郷へ遁るもあり又は山林に隠れなどして散々にこそ成にける

秋月父子降參の事

去程に秀吉公の軍勢豊前筑前に充滿して山野に陣屋を打續け家々の旗馬印を建並へ帷幕をはり棚を結し幾千萬落と云數を知らず日來は鎮西の國士とも打寄て語りけるは何々關白秀吉とやらん下向せらるればとて上方勢の化粧軍何程の事かあるへきを島津殿を大將として九國二島の者共心を合せ戦は、京勢やはか怵ふへきやと嘲哂したりける處に舊冬より四國中國の人數豊前國に渡海し當春に至て海潮の滿來る如く次第々々に入込て今は早や三十萬に餘りければ山野に驅る獸も己か栖を失へり此故に兼ての思案大に相違し恐怖する事深淵に臨て薄氷を踏に異ならず邂逅に義勢を立る者共も一戦に追散され方々に逃隠れ或は妻子を奪れて是非なく降參人となりやうやく命を助かるもありける秋月も雄銳折け此体にてい島津を頼み居たりとも墓々しき事余もあらしと思惟して剃髮染衣の姿となり父の種實入道宗全諸共に降參の旨を願ひ申上ければ秀吉公聞召秋月い九州にて島津に差續きたる凶賊なる故誅戮すへき者なりけれども法体の身となり降參いたしぬる上は命を助け置へしと御免を蒙りける秋月斜ならず悦ひ猶柴と云重代珍奇の茶入を捧け御禮をを申上けるこれにより秋月寶滿岩屋寶森赤司の城を盡く開け渡しけり

彦山來由并僧徒誓詞の事

茲に彦山と申けるは九州第一の大山にて豊後豊前筑前三ヶ國に跨り山中の僧坊三千八百坊あり彦山大權現と崇め奉るは天地開闢の始三尺六寸の八角水精石の上に降靈まします三社は伊奘諾伊奘册天忍骨の三神本地は彌陀釋迦觀音の應化なり一説に天竺摩訶陀國より飛來り第一彦山に示現第二伊豫國石槌山其後紀伊國室郡下野國日光山出羽國羽黒山に示現し給ふ飛來らせ給ふ時は其形八角の水精にて御長三尺餘りに見え給ふと云傳へし其後人皇二十七代繼體天皇の御宇に大唐より善正和尚と云る僧來朝ありて此山を草創ありしか其未た佛法流通の時到らずして頓て歸唐なりける爾後四十二代文武天皇の御宇慶雲二乙巳年役行者彦山の峰を開き給ひしに權現の靈あらはれ給ひ夫より以來靈驗九州に普ねく萬人歩を運ふ靈山とは成りぬ四十四代元正天皇の御宇に當山の中興開山法蓮上人は般若崖にて勤行し如意珠を得し給ひ種々の神異を示されける于時養老四年庚申異賊襲來て日隅の兩州大に亂れたりしかは天皇大に驚せ給ひ佛神擁護の力に預らすんは也とて宇佐宮にて降伏祈念を行はれ豊前の領主宇努首男人等に勅宣ありて軍將とし宇佐の禰宜辛島勝波豆米を御使とし神輿を新に莊嚴して護神となし日子權現及び法蓮同侶人聞華嚴覺滿大能等の高僧各神策を運らされたりしかは官軍の威雄凜烈として勢ひ當りかたく異賊一戦に敗走し纔に討殘されて歸りにければ君も安全に國土も饒かに治り萬民快樂の化に屬す其より法蓮上人高原嶽彦山と云けるにて日想觀を修し給ひけるに紫雲光耀として嶺より起り太宰府まで覆ひ山あり

野を照しか、やかす郷民是を府に告げ終に上聞に達せしかは同五年六月詔して招請せらる
 宣使の來着ある處を公原コノハラと名つけ温室を點して官使を浴せしむ其地を名つけて湯迫ユヅカと云上
 人官使に隨て都に上らせ給ひぬれば獻慮殊にうるはしく即時に大和尚の位を賜はり猶詔し
 て沙門法蓮心住禪杖行居法梁最精醫術濟治民苦善哉若人何不褒賞とて其僧三等以上
 親に宇佐君の姓を賜ひけるとなり第五十二代嵯峨天皇の御宇に當て始て勅願所となり四方
 七里の神領守護不入十方檀那の宣旨有之禁裏へ牛王寶印并卷數御守等年々于今獻上す彦山
に曰く嵯峨天皇弘仁十年法蓮齡三百餘歳にて參内す夫の兩部習合神事の行儀たる事十方檀那天下國家の禱祈として年中四
 百八十の講祭あり先正月修正從元日三日同九箇の法華八講二月十五日の舍利會并に御田
 祭修驗理界入峰三月最勝會同三十講卯月誕生會法華不斷經同夏中大般若若毎月仁王會六月會
 并十五日蓮華會七月十五日結願會八月如法經同智界秘密入峰九月大念佛會十月一切經會其
 外衆徒先達月々の例講長日の護摩等ハ計るに違わらず然るに座主と云けるは昔者より清衆
 の中明智碩徳の叡才を撰て座主と成れけるに第九十二代後伏見天皇の御宇に當て同學の僧
 侶競て貫主を望み互に憤激し異論蜂の如くに起つて不止の間一山衆議して經奏聞皇子を
 請して貫主と成さしめんと欲す即勅許ましくして第六の宮助有法親王を下さしめ給ふ是當
 山座主妻帯の始なり近年領地も多く祈願の料も盛んになり僧侶繁富して驕奢の餘り目を
 驚す振舞多かりけり往古より守護不入の山なりとて惡僧我まゝをなし秋月種實に與みし
 て一山大友の從政務にはさりしかは座主の坊へ使を立惡黨の狼藉下知あるへき由數度に及

しか共僧中耳にも聞入す打過けるを宗麟大に怒て清田阿波守鎮忠上野權の正鎮俊を大將と
 して其勢四千三百餘天正四年丙子四月八日に押寄せ山の腰を取圍む去れとも兩將神地を犯
 す事を怖れ只無事なるを好みし故黒岩に陣を取て攻とる事なかりしかは山徒も討て蒐りも
 せず上佛來山に馳上り互に諍論問答のみにて數年を送り居たりける程に回檀とても難叶
 して一山飢に及びけるを秋月種實縁者なる故折々助成したりける其比大友宗麟は邪宗に沉
 浸せし故天正九年終に權現の社頭を始め僧坊民屋悉く一字も不殘燒拂ひ剩へ神体の御頸を
 きり佛像經卷祭器まで一時の烟となしにけれハ一山嘆き悲むこと譬て云んかたもなし斯る
 處に秀吉公此由を聞召れて大友へ和與の儀仰せられしかは則陣を引れける其後衆徒中年を
 逐て亂世につるゝ習ひなるにや驕慢熾盛の身と成て惡黨人を驅促し動すれば妨往還惱萬
 民隣境の財産等を奪取り狼藉非分の事のみにして頗る我意を働さけるか今度秀吉公御下
 向に付仰付らるへき由を隣國より頻に訴へ申により破却せらるへきに極りける處に一山衆
 評して糟屋内膳正加藤主計頭木下半助早川氏等を頼み四月三日使僧を以て御高免を願しか
 は秀吉公さらは此書付の趣衆徒中同心にてあれば連判を致し誓詞を上へし其上にて對面す
 へしと宣て使僧をは歸されける誓詞前書の文に曰く

- 一 守寺法背禮儀申問敷の事
- 一 對隣國向後非儀仕問敷の事
- 一 衆議判の時正路なる分別を取立最負偏頗の徒黨を立申問敷の事